

少年探偵長

海野十三

青空文庫

怪事件の第一ページ

まさか、その日、この大事件の第一ページであるとは春木少年はるきは知らなかった。あとからいろいろ思い出してみると、その日は、運命の大きな力が、春木清はるきよしをぐんぐんそこへひっぱりこんだとも思われる。

ふしぎな偶ぐうぜん然の出来事が、ふしぎにいくつも重なって起つたような感じだが、それもみんな、清少年の運命であつたにちがいないのだ。

奇々怪々ききかいがいなるその大事件は、第一ページにあたるその日において、ほんのちよつぱり、その切口きりぐちを見せただけであつた。もし春木少年が、そのときにこの事件の大きさ、深さ、ものすごさ、おそろしさを半分ぐらゐでも見とおすことができたなら、彼はこの事件に関係することをあきらめたであらう。それほどこの事件は、大じかけの恐怖事件きようふしけんであつて、とても少年の身では齒がたたないばかりか、大危険だいきけんにまきこまれることは分りきつていたのである。

まあ、前まえおきのことばは、このくらいにしておいて春木少年がその事件の第一ページの上に、どういう工合ぐあいにして、足を踏みこんだか、それについて語ろう。

その日、春木少年は、この間から学校で仲よしになった同級生うしまるへいたろうの牛丸平太郎という身体からだの大きな少年といっしょに、日曜を利用した山登りをやっていたのである。その山登りというのは、芝しば原はら水源すいげん地ちの奥にあるカンヌキ山の頂上まで登ることであった。春木少年が、この町へ来たのは、ほんの一カ月ほど前のことであつた。その前、彼は東京にいた。この町は関西の港町だ。

くわしいことは、いずれ後でのべる時があるから、ここには説明おぼしないが、春木少年は、家の事情によつて、とつぜんこの港町の伯母おばさんの家へあずけられたのであつた。そして清は、近くの雪見ゆきみ中学校へ転校入学したのだつた。彼は三年生だつた。

一時はずいぶんさびしい思いもしたが、清はこの頃ではすつか

りなれてしまった。そして学校にも牛丸君のような愉快的な友だちができるし、それから又港町のうしろにつらなっている連山れんざんの奥ふかく遊びにいく楽しみを発見して、ひまがあれば山の中を歩きまわった。

その日、清は、牛丸の平ちゃんへいと連立つれだつて、おひるごろカンヌキ山の頂上にたどりついた。そこで弁当をたべ、それからそこらにある荒れ寺の境内けいだいでさんざん遊び、それから午後三時ごろになつて、二人は帰途きとについた。

秋の日は、六時頃にはもうとつぷり暮れるので、午後三時に頂上を出ると、麓ふもとへ出て町へはいるときは、町にも港にも灯ひがいっぱいいついているはず、すこし山の上で遊びすぎておそくなつた。

そこで二人は、競走をして、山を下りることにした。

カンヌキ山を下りて、芝原水源地に近くなつたところに、けいり溪流ゆうにうつくしい滝がかつているところがある。この滝の名は、イコマの滝というんだそうだ。文字はたぶん生駒いこまの滝たきと書くのであろう。

カンヌキ山から出ている下り道が二つあつた。東道と西道だ。この二つの道は、生駒の滝のすこし手前で出会い、いっしょになる。そこで春木少年と牛丸少年は、べつべつの道をとつてどっちが早く生駒の滝につくか、その滝の前で出会う約束で、競走をはじめたのだつた。

「ぼくは、だんぜん東道の方が早いと思うね。ぼくは東道ときめ

た」牛丸少年はそういった。

「そうかなあ。じゃあ、ぼくは西道をかけ下りて、君より早く、滝の前についてみせる」

春木少年は、牛丸が東道をえらんだものだから、やむなく西道を下りることにしたのだった。この決定が、春木少年を例の事件にぶつからせることになった。もしこの時反対に、牛丸少年が西道をえらんだら、牛丸の方が怪事件にぶつかったことであろう。

二人は、一^いチ二^にイ三^さンで、左右へ別れて、山を下りはじめた。

秋の日は、まだかんかん照っていた。しかしだいぶん低くなっていた。

春木少年の方は、口笛を吹きながら、手^て製^{せい}の杖^{つえ}をふりまわしつ

つ、どんどん山を下りていった。すこし心細くないでもなかったが、ときどき山の端はからはるか下界げかいの海や町が見えるので、そのたびに彼は元気をとりもどした。

二時間ばかり後に、彼はついに生駒の滝の音が聞える近くにまで来た。

「さあ、ぼくの方が早いか。それとも牛丸君が勝ったか。なにしろ牛丸君は、この土地に生れた少年だから、山の勝手かってはよく知っている。だから、ぼくはかなわないや」

春木の方は、そういうわけで自信がなかった。

ところが、実際は春木の方が、ずっと先についたのであった。

牛丸少年の方は、途とちゆう中で手間どっていた。というのは、東道

では、途中で丸木橋まるきばしが落ちていて、そのため彼は大まわりしな
くてはならなかった。本当は、東道の方が近道だったのだけれど、
思いがけない道路事故のため、牛丸は春木清よりも、三十分もお
くれて現場げんばにつくことになったのだ。

そして三十分もおくれたことが、二人の少年の運命の上に、た
いへんなちがいをもたらした。それは一体どういうことであつた
か。春木少年は、何事も知らず、生駒の滝の前へついて、

「しめた。ぼくの勝だ。牛丸君は、まだついていないじゃないか」
と、ひとりごとをいって、あたりを見まわした。滝は、おおだい大太

鼓こをたくさん一どきにならすように、どうどうとひびきをあげ
て落ちている。春木は帽子ぼうしをぬいで、汗をぬぐった。もみじ紅葉やかえで楓が

うつくしい。

「おやッ」少年は目をみはった。

滝をすこし行きすぎた道の上に、誰か倒れているのであった。黒い洋服を着た男であった。

(どうしたのだろう)

様子がへんなので、清はおそるおそる、そのそばに近づいた。すると、いやなものが目にはいった。うつむいて倒れているその洋服男のかたく握りしめた両手が、まっ赤であった。血だ。血だ。「死んでいるのか？」

少年が、青くなつて、再び瞳をこらしたときに、洋服男の血まみれの手が少し動いて、土をひつかいた。

重傷の老人

「あ、あの人は生きているんだ」春木少年は叫んだ。

叫ぶと、そのあとは、おそろしさも何も忘れて、ちぞ血染めの洋服男のそばにかけより、ひざ膝をついて、

「もしもし。すっかりなさい。どうしたのですか。どこをやられたのですか」と、呼びかけた。

そのとき少年は、この血染めの人が、かなりの老人であること

を知った。顔に、髭ひげがぼうぼうとはえ、黒い鳥打帽子とりうちぼうしがぬげていてむき出しになっている頭髪とうはつは、白毛しろがぞめがしてあつて、一い見黒っけんいが、その根本のところはまっ白な白毛であつた。鳥打帽子がぬげているそばには、茶色のガラスのはまつた眼鏡めがねが落ちていた。

老人は、苦しそうに顔をあげて、春木の方へ顔をねじ向けた。が、一目春木を見ただけで、がっくりと顔を地面に落とした。全身の力をあつめて、自分に声をかけた者が何者であるかをたしかめたという風であつた。

老人は、うんうん呻うなりはじめた。

「しつかりして下さい。傷はどこですか」

と、春木はつづいて叫びながら老人を抱きおこした。

分わかつた。老人の胸はまっ赤であった。地面じめんにおびただしく血が流れていた。傷は、弾丸だんがんによるものだった。左の頸くびのつけ根のところから弾丸たまがはいって、右の肺の上部を射ぬき、わきの下にぬけている重傷であったが、春木少年には、そこまではつきり見分ける力はなかった。しかし傷きず口ぐちがあることは彼にもよく見えたので、そこを早くしばつてあげなくてはならないと思つた。

しばるものがない。繃帯ほうたいがあればいいんだが、そんなものは持合わせがない。

どうしようか。そうだ。こうなれば服の下に着ているシャツと、それから手拭てぬぐいとを利用するほかない。春木少年は実行家じつこうかだつ

たから、そう決心するとまず老人を元のようになかし、それから急いで服をぬぎすて、縞しまのシャツをぬぐと、それをベリベリと破つて長いきれをこしらえ、端と端とつなぎあわせた。手拭もひきさいて、それにつないだ。

「これでよし。さあ出来た。おじさん、しつかりなさい。傷口に仮かりの繃帯をしてあげますからね」

そういつて春木は、再び老人を抱きおこして、上向きうわむにした。老人は口から、赤いものをはき出した。胸をやられているからなのだ。少年は、絶望の心をおさえ、老人をしきりにはげましながら、傷口をぐるぐる巻いてやった。

その間に、老人は苦しそうにあえぎながら、目をあけたり、し

めたりしていたが、少年がしてくれた傷の手当がすんで、しずかに地面にねかされたとき、

「あ、ありがとう。か、神の御子よ……」

と、しわがれた聞きとれないほどの声で、春木少年に感謝した。そのとき老人ののどが、ごろごろと鳴って、口から赤い泡立ったものがだらだらと流れだした。

「ものをいっては、だめです。おじさんは、胸に傷をしているのですからね」老人は、かすかにうなずいた。

「さあ、これからどうしたらいいか。ぼく、山を下りて、誰かを呼んで来ますから、苦しいでしょうが、しばらくがまんしていて下さい」

そういつて春木は、老人のそばから立ち上つて、ふもとへ走ろうとしたが、そのとき、老人が一声高く叫んだ。

「お待ち」

「えッ」

「そばへ来てください」

「なんですか。そんなに口をきくと、また血が出ますよ」

春木は、老人のそばへ膝をついた。

「もう、もう、わしはだめだ。あんたの親切にお礼をしたいから、ぜひ受けて下さい。今、そのお礼の品物を出すから、ちよつと、横を向いて下され」

「お礼なんて、ぼくは、いいですよ。大したことはしないんだか

ら」

「いや、わしはお礼をせずにはいられない。それにこのまま、わしが死んでしまえば、莫^{ばくだい}大なる富の所在^{ありか}を解^とく者がいなくなる。ぜひあんたにゆずりたい。あんたは、何という名前かの」

老人は、苦しそうにあえぎ、赤い泡をふき出しながら、少年に話しかける。その事柄は、真^{まこと}か偽^{つわり}かはつきりしないが、とにかく重大なことだ。

「ぼくは、春木清^{はるききよし}というのです」

「ハルキ・キヨシ。いい名前だな。ハルキ・キヨシ君に、わしは、わしの生命^{いのち}の次に大切にしていたものをゆずる。キヨシ君。すまんがわしをもう一度、うつ向けにしておくれ」

春木少年は、老人のいうとおりにした。

「キヨシ君。わしがいいというまで、ちよつと横を向いておくれ」

老人は、へんなことをいった。しかし少年は、いわれるとおりにした。

老人は、ふるえる手を、自分の目のところへ持つていった。それから彼は、指先で右の目のところをもんでいた。そのうちに、老人の指先には、白い球が^{たま}つまみあげられていた。卵^{たまご}大ではあるが、卵ではなく、一方に黒い斑^{はんてん}点がついていた。

義眼^{ぎがん}であつた。老人の右の目にはいつていた入れ目であつた。

「さ。これをキヨシ君に進^{しんてい}呈する」

老人は、気味のわるい贈物を、春木少年の方へさしだした。

なんということであろう。老人は気が変になったのであろうか。春木少年は、まさか義眼とも思わず、それを卵か石かと思つて受取つた。

もらつた義眼ぎがん

「これは何ですか。これはどんな値打ねうちのあるものですか」

少年は、老人の義眼を、手のひらの上でころがしてみながら、

不審ふしんがった。

そのとき滝のひびきの中に、別の物音がはいって来た。ブーンと、機械的な音であった。春木少年はまだ気がついていなかったが、老人の方が気がついて、びっくりした。

「おお、キヨシ君。悪い奴やつがこつちへ来る。あんたは、早くそれを持って、洞穴ほらあなか、岩かげかに早くかくれるんだ。早く、早く。いそがないと間にあわない。そして、空から絶対にあんたの姿が見られないように、気をつけるんだ。さあ。早く……」

「どうしたんですか。そんなにあわてて……」

「わしを殺そうとした悪者わるものの一派が、ここへやって来るのだ。

あんたの姿を見れば、あんたにも危害きがいを加えるだろう。よくおぼ

えているがいい。悪者どもが、ここを去るまでは、あんたは姿を見せてはならない。身体を動かしてはならない。あんたは今、わしからゆずられた大切な品物を持っているということを忘れないように。さ、早くかくれておくれ」

老人は、気が変になったように、わめきつづける。

春木少年は、重傷の老人がこの上あんな声を出していたら、死^し期^きを早めるだろうと思った。だから早く老人のいうとおり、岩かげかどつかへかくれるのが、老人のためになると思って、立ち上った。

が、老人にたずねなくてはならないことが、たくさんあった。「この卵みたいなものをどうすればいいんですか」

「な、中をあけてみなさい。早くかくれるんだ。だんだん空から近づくとあの音が聞えないのか。早く、早く」

そういわれて春木少年は気がついた。頭の上からおしつけるような、ごうごうたる物音がしている。でも、もう一つ老人に聞いておかねばならないことがあった。

「おじさん。おじさんの名前は、なんというのですか」

「まだ、そこにぐずぐずしているのか」

重傷の老人は腹立たしそうに叫んだ。

「わしの名はトグラだ」

「トグラですか」

「戸倉八十丸だ。早くかくれろ。一刻も早く！ さもなきや、
とぐらやそまる いっごく

いのち
生命がない。世界的な宝もうばわれる。早く穴の中へ、とびこめ。
あのへんに穴がある。だが、気をつけて……」

老人の声は、泣き叫んでいるようだ。

春木は、今はこれ以上、老人をなやませては悪いと思った。そこで、瀕死ひんしの老人の指さした方向へ走った。大きな岩が出ていた。滝つぼとは反対の方だ。

彼が、岩のかげにとびこんだとき、頭上にびっくりするほど大きいものが、まいくだ下つてきた。

ヘリコプターだった。竹とんぼのような形をした大きな水平にまわるプロペラを持ち、そして別にもう一つ小さなプロペラをつけた竹とんぼ式飛行機だった。

ヘリコプターは、宙に浮いたように前進を停止し、上下に自由に上ったり、下ったりできる飛行機である。だから、かつそうじよう滑走場がなくても飛びあがることができ、またせまい屋おくじよう上へ下りることもできる。

そのようなヘリコプターが、夕ゆうやみ闇がうすくかかって来た空から、とつぜんまい下りて来たので、春木少年はおどろいた。

なぜであろう。ヘリコプターが、なに用あつてまい下りてくるのであろう。

戸倉老人が、恐怖していたのは、そのヘリコプターであろうか。春木少年は岩かげにしやがんで、この場の様子ようすをうかがった。

ヘリコプターは、垂すいちよく直に下ってきた。

と、ぱつとあたりが昼間のように明るくなった。ヘリコプターが探照灯たんしょうとうを、地上へ向けて照らしつけたのだ。

「あッ」春木少年は、岩にしがみついた。

ぎらぎらと、強い光が、春木少年の左の肩を照らしつけた。

少年は、なんととはなしに危険を感じ、しずかに身体を右の方へ動かして、ヘリコプターの探照灯からのがれようとした。

しかし探照灯は追いかけて来るようであった。

春木は、岩にびったりと寄りそったまま、身体を右の方へ移動していった。

すると、彼はとつぜん身体の中心を失った。右足で踏んでいた土がくずれ、足を踏みはずしたのだった。そこには草にかくれた

穴があつた。身体がぐらりと右へ傾く。かたむ。「あツ」という間もなく、彼の身体は穴の中へ落ちこんだ。両手をのばして、岩をつかもうとしたが、だめだった。

少年の身体は、深く下に落ちていって、やがて底にたたきつけられた。それは、わりあいによわらかい土であつたが、彼はお尻しりをしたたかにぶっつけ、「うん」と呻り声うなをあげると、気を失つた。

気を失つた少年のそばに、戸倉老人がゆずり渡した疑問の義眼が一つころがっていた。そして義眼の瞳は、まるで視力があるかのように、上に丸く開いている空を凝視ぎようししていた。

空中放^{はな}れ業^{わざ}

穴の中に落ちこみ、気を失ってしまった春木少年は、その直後に起った地上の大活劇^{だいかつげき}を見ることができなかつた。

まつたく、彼の思いもかけなかつたような活劇の幕が、そのとき切つて落されたのであつた。

ヘリコプターから、とつぜん、だだだだッ、だだだだッと、はげしい機関銃が鳴りだした。弾丸^{たま}は、戸倉老人の倒れている身^{しんぺ}辺^んへ、雨のように降りそそいだ。弾丸が地上に達して石にあた

ると、ぴかぴかツと火花が光り、それが夕暮のうす闇の中に、生き物のようにおどつた。だが、弾丸は、戸倉老人のまわりに落ちるだけで、老人の身体は突き刺さなかつた。

「うわツ、なんだろう」滝つぼの正面の道路の上に、少年の姿があらわれた。春木ではなかつた。牛丸少年であつた。彼はようやく生駒いこまの滝たきの前に今ついたのであつた。彼にはまだこの場の事態じたいがのみこめていなかつた。だから身の危険を感じることもなく、道のまん中に棒立ちになつて、火花のおどりを、いぶかしく眺めながたのであつた。

が、一瞬ののち、彼は戸倉老人の倒れている姿を認めた。また、つづいて起つた銃声のすさまじさによつて、はつと身の危険を感

じた。

「あ、あぶない」牛丸少年は、身をひるがえすと、かたわらの大きな柿かきの木に、するするとのぼった。牛丸は、木登りが得意中の得意だった。だから前後の考えもなく、柿の木なんかによじ登ったのである。それは、彼のために、幸福なことではなかった。

そのときヘリコプターは、戸倉老人のま上まできた。胴どうの底に穴があいて、そこから一本のロープがゆれながら、まい下つてきた。

すると、ロープを伝わって、一人の男がするすると下りてきた。そのときロープの先は地上についていた。その男は、カーキ色の作業衣さぎよういに身をかためた男だった。その男も倒れている戸倉老人

も共に探照灯の光の中にあつた。

老人は、死んでしまつたように、動かない。

牛丸少年は、柿の枝につかまつて、この有様をびっくりして眺めている。

作業衣の男は、ついに地上に足をつけた。ロープを放して、戸倉老人の方へ走りよつた。そして膝をついて老人の身体をしらべだした。彼のために、老人は二三度身体を上向きに又下向きにひっくりかえされた。

しばらくすると、作業衣の男は立上つて、手をふつて、上のヘリコプターへ、あいず合図のようなことをした。ヘリコプターの胴の窓からも、一人の男が上半身を出して、下へ手をふつて合図した。

下の男は、分つたらしく、合図に両手を左右へのぼした後で、ロープの端を手にとつて、戸倉老人に近づくと、老人の身体をロープでぐるぐる巻きにしぱりつけた。

それから自分は、老人よりもロープの上の方にぶら下つた。

それが合図のように、ロープはぐんぐんヘリコプターの方へ巻きあがつていった。ヘリコプターは、宙に浮いて、じつとしていく。この有様を、牛丸少年は、あつけにとられて柿の木の上から見ていた。

ところが、とつぜん作業衣の男が、片手をはなして、牛丸少年の登っている柿の木を指した。と、ぱつと強い探照灯の光が牛丸少年の全身を照らしつけた。

「うわッ。たまらん」牛丸平太郎は生れつきものおじをしない楽
天家であったが、このときばかりは、もう死ぬかもしれないと思
った。彼は目がくらんで、呼吸いきをすることができなくなった。彼
は懸命に、両手と両足で、柿の木の枝にしがみついていた。目は、
全然ものを見分ける力がなくなった。

「柿の木の上で、目はみえず」

ヘリコプターの音が遠のいていったのが分ったとき、牛丸は、
ひとりごとをいった。俳句になるぞと思った。

このとき、ようやくすこしばかり、ものの形が見えるようにな
った。

「ひどい目にあわせよった」

彼は、そろそろと柿の木から、すべり下りていった。

牛丸少年は、滝の前に、小一時間もうろうろしていた。もうまつくらな中を、あたりを探しまわった。

「おーい。春木君やーい」と、何十ぺんも、友だちの名を呼んでみた。しかしその返事は、彼の耳に聞えなかった。その間に、彼は、倒れていた人のあとへも行つてみた。そこには、血の跡らしいものが黒ずんで地面を染めているのを見た。

「誰だろう、ここに倒れていた人は」

彼には事情が分らなかつた。

ヘリコプターで救助作業をやったのかもしれないが、しかしその前に、はげしい銃声のようなものを聞いた。それを聞きつけた

から、彼はびっくりして柿の木へ登ったのだ。彼は後で考えて、「ぼくは、あのときは、なんてあわてん坊であつたらう」と苦笑したことだつた。

いつまでたつても、春木君がやってこないのので、一時間ばかりたつた後に、牛丸少年は、ひとり川を下りていった。

牛丸はなんにもしらなかった、ここにふしぎなことがあつた。それは、戸倉老人の身体からはなれてとび散らばつていた老人の帽子も眼鏡も、共にそのあとに残つていかなかったことである。

それにしても、重傷の戸倉老人を拾つていった、ヘリコプターに乗つていた者は、何者であつたらうか。

老人を救助に来た者だとは思われない。もし救助に来た者なら

ば、老人は春木少年の前であのように恐怖してみせるはずはないのだ。

すると、あのヘリコプターは、戸倉老人のためには敵手^{てきしゅ}にあたる連中が乗っていたものであろうか。

この生駒の滝を背景とした血なまぐさい謎^{なぞ}にみちた一幕^{ひとまく}こそ、やがて春木清が少年探偵長として全世界へ話題をなげた奇々怪々なる「黄金^{おうごん}メダル事件」へ登場するその第一幕であつたのだ。

穴からの脱出

岩かげの穴の中に落ちこんだ春木少年は、まだ牛丸君がその附近にいた間に、われにかえることができた。

彼は、牛丸君が自分を呼ぶ声をたしかにきいた。そこで彼は、穴の中で返事をしたのである。いくども牛丸君の名を呼んで、自分がここにいることを知らせたのである。しかし牛丸君は、ほかの方ばかりを探していて、春木が落ちこんでいる穴の上には近よらなかつた。

そのうちに牛丸は、あきらめて、生駒の滝の前をはなれ、ふもとへ通ずる道をおりていった。

あとに残されて穴の中にひとりぼっちになった春木のまわりは

だんだん暗くなってきた。彼は、お尻をさすりながら、あたりを見まわした。

「あッ、あの球たまだ」彼は、そばに戸倉老人の義眼ぎがんが落ちているのを見つけると、あわてて拾いあげた。

「何だろう。ふしぎなものだなあ。おやおや、目玉みたいだぞ。こつちをにらんでいる。ああ気味きみがわるい」

あまり気味がわるいので、彼はそれをポケットの中へしまった。

「さあ、なんとかして、この空からっぽの井戸からあがらなくては」

見ると、空井戸からいどの底には、横向きの穴があった。人間がやっとくぐってはいれるほどの穴だった。しかし、気味がわるくて、春木ははいる気がしなかった。彼は立上った。そして上を向いてい

ろいろとしらべてみたが、そこには上からロープもなにも下つて
いなかった。深さは十四五メートルらしい。

「土の壁が上までやわらかいといいんだがなあ。そしてなにか土
を掘るものがあるといいんだが。待てよ、ナイフを持っているか
らこれで掘ってやろう」

春木は、空井戸の土壁つちかべに、足場の穴を掘り、それを伝つて上
へあがることを思いついた。そこで、早速さっそくその仕事を始めた。

それは手間のかかる仕事であつたが、少年は根気こんきよく土の壁に
足場を一段ずつ掘つていつて、やがて穴のそとに出ることができ
た。

「やれ、ありがたい」春木は、そこで大きな溜息ためいきを一つして、

あたりを見まわした。あたりはまっくらであった。そしてまっ暗闇の中から、滝の音だけがとうとうと鳴りひびき、いつそう気味のわるいものにしていった。

ただ晴夜せいやのこととて、星だけが空にきらきらと明るくかがやいていた。しかし星あかりだけでは、道と道でないところの区別はつかなかつた。彼は、山を下りることを朝まで断念だんねんするしかないと思つた。むりをして下りれば、足をふみすべらして谷底へ落ちるおそれがある。

「しようがない。今夜、滝の音を聞きながら野宿のじゆくだ」

春木は、草の上に尻餅しりもちをついた。決心がつけば、野宿もまたおもしろくないこともない。ただ、明日あしたになつて、伯母おばたちに叱しか

られるであろうが、それもしかたなしだ。

春木は、急に腹が空すいているのに気がついた。ポケットをさぐったが、例のへんな球の外になんにもない。みんなたべてしまったのだ。

そのうちに寒くなつて来た。秋も十一月の山の中は、更けると共に気温がぐんぐん下つていくのであつた。

「ああ、寒い。これはやり切れない」空腹はがまんできるが寒いのはやり切れない。どうかならないものか。

「あッ、そうだ。ライターを持っていた」

こういうときの用心に、彼はズボンのポケットに火繩ひなわしき式のライターを持っていることを思いだした。そうだ。ライターで火を

つけ、枯れ枝をあつめて、どんだんたき火をすればいいのである。少年は元気づいた。

火繩式のライターは、炭火すみびのように火がつくだけで、ろうそくのように焰ほのおが出ない。それはよく分つていたが、彼はこの前、火繩の火に、燃えあがりやすい糸くずを近づけて、ふうふう息をふきかけることにより、糸くずをめらめらと燃えあがらせて、焰をつくつた経験があつた。その経験を今夜いかして使うのだ。

彼は、服の裏をすこしさいて、糸くずと同様のものをこしらえ、それにライターの火繩の火を燃えあがらせることに成功した。焰はめらめらと、赤い舌をあげて燃えあがつた。その焰を、枯れ草のかたまりへ移した。火は大きくなった。こんどは、それを枯れ

枝の方へ移した。火勢は一段と強くなった。それから先はもう困らなかつた。明るい、そしてあたたかい焚火が、どんどんと燃えさかつた。

あたたかくなり、明るくなったので、春木少年はすっかり元気になった。附近から枯れ枝をたくさん集めて来た。もう大丈夫だ。火にあたつていると、ねむくなりだした。昼間からの疲れが出て来たものらしい。

しかしここで睡ねむつてしまつては、焚火も消えてしまい、風邪をひくことになるであろうと、彼は気がついた。そこで、なんとかして睡らない工夫をしなくてはならない。彼は考えた。

「そうだ。さつき戸倉のおじさんからもらった球をしらべてみよ

う」

それは、この際うってつけの仕事だった。少年はポケットから、例の球を出した。火にかざして、彼ははじめてゆっくりとその品物を見たのだ。

「ヤツ。これは眼玉だ。気持が悪い」

彼はぞつと背中が寒くなり、眼玉を手から下へとり落とした。

眼玉は、ころころところがって、焚火のそばまでいった。

「待てよ。あれはほんとうの眼玉じゃないらしい。ああ、そうだ。義眼だろう、きつと」

彼は、自分があわてん坊だったのに気がついて、おかしくなり、ひとりで笑った。

「あ、眼玉があんなところで、焼けそうになっている。たいへん、たいへん」彼はあわてて、もえさしの枝を手にとると、焚火のそばから義眼を拾い出した。

「あちちちツ」義眼はあつくなくていて、彼の手を焼いた。彼の手から義眼は再び地上に落ちた。すると義眼は、まん中からぱつくりと、二つに割れた。

それは春木少年のためには、幸運であつたといえる。なぜなら、火で焼けでもしなければ、この義眼を開けることは、なかなかむずかしいことであつたから、つまりこの義眼は、一種の秘密箱であつたのだ。この球を開くには、どんなにしても一週間ぐらい考えなくてはならなかつたのだ。少年は幸運にもその球きゆうけい形の秘

密箱を火のそばで焦がしたがために、秘密箱のからくりは自然に中ではずれ、彼が二度目に手から地面の上へ落とすと、ぱっくりと二つに割れたのである。しかし、これには春木少年はおどろいて、目をぱちくりした。

「おや。中になにかはいつているぞ。ああそうか。あれなんだな。あのおじさんのいったことは嘘うそでないらしい」

莫ばくだい大なる富だ。世界的の宝だ。いったいそれは何であろうか。春木少年は、手をのばして、二つに割れた戸倉老人の義眼を手にとって調べた。

「ああ、こんなものがはいつている」

義眼の中には、絹きぬのようなきれで包んだものがはいつていた。

中には、なにかかたいものがある。

絹のきれをあけると、中から出て来たのは半月形はんげつがいの平つたい金属板だった。かなり重い。そして夜目にもぴかぴかと黄いろく光っている。そしてその上には、うすく浮彫うきぼりになつて、横を向いた人の顔が彫りつけほけてあり、そのまわりには、鎖くさりと錨いかりがついていた。裏をかえしてみると、そこには妙な文字のようなものが横よ書こがきになつて数行、彫りつけてあつた。しかしそれがどこの国の文字だか、見たことのないものだった。古代文字こだいもんじというよりも、むしろ音符号おんふごうのようであつた。

「金貨の半分みたいだが、こんな大きな金貨があるんだらうか。とにかく妙なものだ。いったいこれは何だらうか」

と、彼はそのぴかぴか光る二つに割られた黄金のメダルを、ふしぎそうに火にかざして、いくどもいくども見直した。

「字は読めないし、それに半分じゃ、しようがないが、これでもあのおじさんがいったように、これが世界的な莫大な富と関係があるものかなあ」

せつかくもらったが、これでは春木少年にとってちんぷんかんぷんで、わけが分らなかつた。

さあ、どういうことになるか。

そのとき、一陣の山風がさつと吹きこんできて、枯葉がまい、焚火の焰が横にふきつけられて、ぱちぱちと鳴った。すると少年のすぐ前で、ぼーッと燃え出したものがある。

「あつ、しまった」

それは、この半月形の黄金メダルを包んであつた絹のきれだつた。それには文字もんじが書いてあることがそのとき始めて春木少年の注意をひいたのである。火は、その絹のハンカチーフみたいなものを、ひとなめにして焼きつくそうとしている。少年は、驚いて、火の中へ手をつっこみ、燃える絹のきれをとりだすと、靴でふみつけた。

火はようやくやく消えた。

「やれやれ。もちつとで全部焼いてしまうところだった」

焼け残ったのはその絹のハンカチーフの半分よりすこし小さい部分だった。それにはこまかく日本文字が書いてあつた。少年は、

その文字を拾って読み出したが、なにしろ半分ばかりが焼けてしまったので、その文字はつながらなかつた。

だが、少年は読めるだけの文字を拾っていた。が、急に彼は顔をこわばらせると、

「ああ、これはたいへんなものだ」と叫んだ。にわかには彼の身体はぶるぶるとふるえだして、とまらなかつた。

なぜであろうか。

いったいその焼けのこりの絹のきれは、どんなことが書いてあったろうか。そして半月形の黄金のメダルこそ、いかなる秘密を、かくしているのだろうか。

深山しんざんには、にわかには風が出て来た。焚火の火の子が暗い空に

まいあがる。

ろくてんさんさい
六天山塞

さて、戸倉老人をさらっていったヘリコプターはどこへ飛び去ったか。

ヘリコプターは、暮色ほしよくに包まれた山々の上すれすれに、あるときは北へ、あるときは東へ、またあるときは西へと、奇妙な針路をとって、だんだんと、奥山へはいりこんだ。

約一時間飛んでからそのヘリコプターは、闇の中をしずしずと下降し、やがて、ぴったりと着陸した。

その場所は、どういう景色のところか、その飛行場はどんな地形になっているのか、それは肉にく眼がんでは見えなかった。なにしろ、日はとつぷり暮れ、黒白も見わけられぬほどの闇の夜だったから。ただ、銀河ばかりが、ほの明るく、頭上を流れていた。

このヘリコプターには、精巧なレーダー装置がついていたから、その着陸場を探し求めて、無事に暗夜あんやの着陸をやりとげることが、わけのないことだった。レーダー装置は、超短電波を使って、地形をさぐったり、高度を測ったり、目標との距離をだしたりする器械で、夜間には飛行機の目としてたいへん役立つものだ。

こうしてヘリコプターは無事着陸した。しかもまちがいなく六天山塞へもどつて来たのである。

六天山塞とは、何であるか？

この山塞について、ここにくわしい話をのべるのは、ひかえよう。それよりも、ヘリコプターのあとについていって、山塞のものを綴つづつた方がいいであろう。

そのヘリコプターが無事着陸すると、操縦席から青い信号灯がうちふられた。

すると、ごおーツという音がして、大地が動きだした。ヘリコプターをのせたまま、大地は横にすべつていった。

それは大仕掛な動く滑かっそうろ走路であつた。細長い鉄片を組立てて

こしらえた幅五メートルの滑走路で、動力によつてこれはベルト式運搬機うんぱんきのように横にすべつて動いていく。そうしてヘリコプターは、山腹さんぶくにあけられた大きな洞門どうもんの中へ吸いこまれてしまつた。

それから間もなく、動く滑走路は停とまつた。そしてうしろの洞穴のあたりで、がらがらと鉄扉のしまる音が聞えた。

その音がしなくなると、とつぜんぱつと眩まぶしい光線がヘリコプターの上から照らしつけた。洞門の中の様子が、その瞬間に、はつきりと見えるようになった。そこは建築したばかりの大工場で、この一棟ひとむねへはいつた。土くれの匂いなどはなく、芳香を放あふつ脂らの匂いがあつた。そして壁も天井も明るく黄いろく塗られて、頑が

んじよう
丈に見えた。ただ床だけは、迷彩をほどこした鋼材の動く滑走路がまん中をつらぬいているので、異様な気分をあおりたてる。

ばたばたと、ヘリコプターをかこんだ五六名の腕ぶしの強そうな男たちは、ピストルや軽機銃をかまえてヘリコプターの搭乗者へ警戒の目を光らせる。彼らの服装は、まちまちであり、背広があつたり、作業衣であつたりした。

すると機胴の扉があいて、一人の長髪の男が顔をだした。彼は手を振つて、

「大丈夫だ。奴さんはもうあばれる力なんかないよ」

といった。この男は、生駒の滝の前で、縄ばしご伝いにヘリコ

プターから下りてきて、戸倉老人を拾いあげた男だった。波立なみたつ二じといって、この山寨では、にらみのきく人物だった。

そのとき、奥から中年の男が駆けだしてきて、波立二に声をかけた。

「おい。戸倉はまだ生きているか。心臓の音を聴いてみてくれ」
心配そうな顔だった。

「脈はよくありませんよ。でもまだ生きています」

「新しく傷を負わせたのじゃなかろうね。そうだったら、頭目とうもくのきげんが悪くなるぜ」

「ふん、木戸きどさん、心配なしだよ。おれがそんなへまをやると思いますか。射撃にかけては——」

「そんならいいんだ。担架たんかを持ってくるから、そのままにしておいてくれ」

木戸とよばれた中年の男は、ほつとした面持おももちになって、うしろを振返った。担架をかついだ一隊が、停ったエレベーターからぞろぞろとでてくるのが見えた。

その中に、ひとりいやに背の高い人物が交まじっていた。首が長くて、ほんとに鶴つるのようである。顔は凸凹でこぼこがはげしくて岩を見るようで、鼻が三角錐さんかくすいのようにとがって前へとびだしている。もうひとつとびだしているのは、太い眉毛まゆげの下の大きな両眼だ。鼻の下には、うすい髭ひげがはえている。かますの乾物のように、やせ細っている彼。そして背広の上に、まっ白の上っぱりを長々と着

て、おおまた 大股ですたすたとやって来、ものもいわずにヘリコプターの上へ登つてはいった。

彼は、すぐでてきた。そして木戸の前に立つて、ものいいたげに相手を見下ろした。

「どうだね、つくえ 机博士」木戸は、さいそくするように、机博士の小さく見える顔を仰いだ。

「ふむ、頭目の幸運てえものさ。このおれ以外の如何いかなる名医にかけても、あの怪我人けがにんはあと一時間と生命がもたないね」

机博士は、表情のない顔で、自信のあることばをいい切った。

「ほう、助かるか」木戸は顔を赤くした。

「ではすぐ手当をしてもらうんだ。頭目は、すぐにも戸倉をひき

寄せて、話をしたいんだろうが、いったいこれから何時間後に、それができるかね」

「世間せけん並なみに言えば、三週間だよ」

「君の引受けてくれる時間だけ聞けばいいんだ」

「この机博士が処置をするなら今から六時間後だ。それなら引受ける」

「よし、それで頼む。頭目に報告しておくから」

「今から六時間以内は、どんなことがあつてもだめ。一語も聞けないといつておいてくれたまえ。銃弾たまは際きわどいところで、心臓を外れているが、肺はめちやめちやだ。ものをいえば、血とあぶくがぶくぶく吹きでる。普通ならずで、この世の者ではないさ。」

しかし奴さん、うまい工合に傷の箇所かしよに、血どめのガーゼ——ガ
ーゼじゃないが、きれを突つっこ込んで、器用にその上を巻いてある。
奴さんにとっては、これはうちの頭目以上の幸運だったんだ」

博士はひとりで喋しゃべった。

「手術はここですから、医局員でない者はどこかへ行ってもら
いたいね」

「え、ここですか、机博士」

「そうさ。どうして、この重態の病人を、動かせるものかね。狭
くても、しようがないやね」

と、博士はいった。

「電気の用意ができました」

部下の合図があつた。博士は再びヘリコプターの座席へもぐりこんだ。

男装だんそうの頭目とうもく

それにつづく同じ夜、正確に時刻をいうと、午前二時を五分ばかりまわつた時であつた。

この六天ろくてん山塞さんさいの指揮権を持つている頭目とうもくの四馬劍尺しばけんじやくは重傷の戸倉老人と会見することになつた。

戸倉老人は、車がついている椅子いすにしつかりゆわきつけられたまま、四馬頭目の待つている特別室へ運ばれこまれた。そのそばには机博士が、風に吹かれている電柱のようになかつこうで、つきそつていた。

頭目は、ゆつたりと椅子から立ちあがり、カーテンをおし分けて、戸倉老人の方へ歩みよつた。

彼の風ふう体たいは、異様であつた。

四馬剣尺は、六尺に近いほどの長身であつた。そしてうんと肥こえていたので、横綱にしてもはずかしくないほどの体格だつた。

彼はそのりっぱな身体を長い裾すそを持った中国服に包んでいた。彼の両手は、長い袖そでの中にかくれて見えなかつた。

その中国服には、金色の大きな竜りゆうが、美しく刺繡ししゅうしてあつた。見るからに、頭が下るほどのすばらしい模様であつた。

四馬剣尺の顔は見えなかつた。

それは彼が、頭の上に大きな笠形かんむりの冠をかぶっていたからで、その冠のまわりのふちからは、黒い紗しやで作つた三重の幕が下りていて、あごの先がほんのちよつぴり見えるだけで、顔はすっかり幕で隠れていた。

「おい、戸倉。今夜は早いところ、話をつけようじゃないか」頭目四馬は、おさえつけるような太い声で戸倉老人にいった。

戸倉は、青い顔をして、椅子車いすぐるまの背に頭をもたせかけ、黙りこくっていた。死んでしまったのか、睡っているのか、彼の眼は、

茶色の眼鏡の奥に隠れていて、あいているのか、ふさいでいるのか分らないから、判断のつけようがない。

「おい、返事をしないか。今夜は早く話をつけてやろうと、こつちは好意を示しているのに、返事をしないと、けしからん」

そういつて四馬は、長い袖をのばすと、戸倉の肩をつかんで揺ぶろうとした。

「おつと待った、頭目」と、とつぜん停めた者がある。机博士であつた。彼は、頭目の前へ進みでた。

「頭目。あんたから、わが輩はいが預まかっているこの怪我人は、奇蹟きせき的に生きてきているんですぞ。手荒なことをして、この老ぼれが急に死んでしまつても、わが輩は責任をおわんですぞ。一言おこと

わりしておく次第である」

机博士は、俳優のように身ぶりも大げさに、戸倉老人が衰弱しきっていることを伝えた。

「ちかごろ君の手術の腕前もにぶつたと見える」

「肺臓の半分はめちやめちやだった。それを切り取ってそのかわりに一時、人工肺臓を接続してある。当人が、自分の手で人工肺臓を外すと、たちまち死んでしまう。つまり自殺に成功するわけだ。だからこのとおり椅子にしばりつけてあるわけだ。当人があばれん坊だからしばりつけてあるわけではない。以上、責任者として御注意しておきます」

と、机博士は手を振り足を動かさず、ひびのはいったガラスのコ

ツプのような戸倉老人の健康状態を説明すると、うやうやしく頭目に一礼して、椅子車のうしろへ下った。

「博士。しかしこの老ぼれは、喋れないわけじやなかろう」

「ここへ担ぎこまれたときは、血のあぶくを**ごぼごぼ**口からふきだして、お喋りは不可能だった。が、今手当をしたから、発声はできます。もつとも本人が喋る気にならないと喋らないでしょうが、それはわが輩の仕事の範囲ではない」

戸倉老人に返事をさせるか、させないかは、頭目、あんたの腕次第だよ——と、いわないばかりだった。

「ふん」頭目は、つんと首をたてた。「わしは知りたいたと思ったことを知るだけだ。相手が柿の木であろうと、人間であろうと、

太陽であろうと、返事をさせないではおかぬ。それに、このごろわしは気が短くなつて、相手がぐずぐずしていると、相手の口の中へ手をつつこんで、舌を動かして喋らせたくなるんだ。すこしらんぼうだが、気が短いんだからしようがない」

机博士も木戸も、その他の幹部たちも、おたがいの顔を見合した。頭目がそんなことをいうときには頭目はきつとすごいことをやつて、部下たちをびつくりさせるのが例だった。その前に、頭目は、しっかりとした計画をたてておく。それからそれに向つてぐんぐん進めるのだった。だから、成功しないことはなかった。らんぼう者のように見えながら、その実はどこまでも心をこまかく使い、抜け目のないことをする頭目だった。部下たちが、頭目

に頭が上らないのも、そこに原因があった。

はたして、その夜のできごとは、後日になって部下たちがたびたび思いださないではいられないほどの、重大な意味を持つていた。その重大なるできごとは、今、彼らの目の前でくりひろげられようとしているのだ。

「おい、戸倉。きさまの生命いのちを拾って、ここへ連れてきてやるま
では、三人の生命がぎせいになっているのだぞ。きさまを救う
ためにきさまを襲撃した二人連れのらんぼう者を撃ち倒たおしたのは、
わしの部下だった。可哀かわいそうに自分も撃たれて生命を失った。死
ぬ前に、彼は携け帯たい用よう無電機でその場のことをくわしくわしのと
ころへ報告してきた。報告が終ると彼は死んだのだ。いい部下を、

きさまのために失ってしまった。わしは、きさまから十分な償いを受けたい」

「私だって、ひどめ目にあっている。おたがいさまだ」

戸倉老人が、はじめて口をきいた。軽蔑けいべつをこめた語調ごちょうだ。

「ふん。なんとでもいうがいい」頭目四馬は軽くうけ流すと、一歩前進した。「そこでわしは取引を完了したい。おい、戸倉。きさまが持っている黄おうごん金の三日月みかづきを、こつちへ渡してしまえ」

四馬がずばりと戸倉老人に叩たたきつけたことば！ それはあの黄金メダルの片われを要求しているのだった。

「なにが欲しいんだか、私にはちんぷんかんぷんだ」

老人は、いよいよ軽蔑をこめていう。

「こいつが、こいつが……。きさまが黄金の三日月を知らないことがあるか。きさまが持っていることは、ちゃんと種^{たね}があがつているんだ。早く渡してしまった方が、とくだぞ」

「わしはそんなものは知らない。もちろん、持つてはいない。いんどきかれても、そういうほかない」

戸倉老人の語調は、すこし乱れてきた。机博士はうしろで注射薬のアンプルを切る。

「知らないとはいわせない。では、これを見よ」

四馬は、とつぜん右手で長い左の袖をまくりあげた。左の手首があらわれた。そのおや指とひとさし指との間に支えられて、ぴかりと光る小さな半月形^{はんげつがた}のものがあつた。例の黄金メダルの片わ

れであった。しかしこれは春木少年が今持っているあの片われとは形がちがつていた。

つまり、春木少年の持っているのは、片われにちがいないが、半分よりすこし大きく、メダルの中心から角をはかると、百八十八度よりも二十度ばかり大きい。今、四馬が指の先につまんで見せたのは、半分より小さいもので、おうぎがた扇形をしている。

それを頭目は戸倉の前へつきつけた。

「どうだ。これが見えないか」

「あツそれだ。や、なんじ汝が持っていたのか。ちえツ」

戸倉老人は、かん高い声で叫ぶと、手を延のばそうとした。しかし手足は、椅子車に嚴重にしばりつけられてあつて、手を延ばす

どころではない。彼は残念がつて、かつと口をあくと、頭目のさしだしている黄金メダルを目がけて、かみついた。

「おっと、らんぼうしては困る。はっはっはっ」

頭目は、あやういところで、手を引いた。

「はっはっはっ。これが欲しいんだな。きさまにくれてやらないでもないが、その前に、きさまが持っている他の半分をこつちへだせ。一週間あずかったら、両方とも、きれいにきさまに返してやる。どうだ、いい条件だろうが。うんといえ」

このとき戸倉は、ぐったりとして、頭を椅子の背につけた。目をむいているのか、目をとじているのか、それは茶色の眼鏡にさえぎられて分らないが、彼の両肩がはげしく息をついているとこ

ろを見ると、戸倉老人は今なんともいえない悪い気持になつて苦しんでいるものと思われる。もちろん、彼は頭目の話しかけに、一度もこたえない。

「黙つていては、わからんじやないか。わしは早い取引を希望しているのだ。おい、戸倉。きさまが黄金三日月をかくしている場所をわしが知らないとしても思うのかい」

それを聞いて戸倉老人は、ぎよつと身体をかたくした。

「ははは。今さらあわててもだめだ。わしは気が短い。欲しいものは、さつそく手に入れる。まず、これから外して……」

四馬の手が、つと延びた。と思うと、戸倉老人がかけていた茶色の眼鏡が、頭目の手の中にあつた。眼鏡をもぎとられた老人の

蒼^{そうはく}白な顔。両眼は、かたくとじ、唇がわなわなとふるえている。

「ふふふ。きさまがおとなしくしていれば、わしは乱暴をはたらくつもりはない。そこでわしが用のあるのは、きさまが目の穴に入れてある義眼^{ぎがん}だ。それを渡してもらおう」

「許さぬ。そんなことは許さぬ。悪魔め」

老人は大あばれにあばれたいらしいが、手足のいましめは、ぎゅつとおさえつける。

四馬はそれを冷やかに見下して、

「ええと、きさまの義眼はたしか右の方だったな。おい、みんなきて、戸倉の頭を、椅子の背におしつけていろ」

木戸や波や、その他の部下が戸倉にとびついて、頭目が命じた

とおり、椅子の背におしつけた。戸倉の烏打帽子がぬげかかった。四馬はその前に進みよつて、右手を延ばすと、戸倉の右眼を襲つた。

エックス線のかげ

頭目の手には、戸倉の義眼ぎがんがのつている。

「ふん。これが黄金の三日月の容器いれものとは、考えやがったな。しかしこうなれば、お気の毒さまだ。ありがたく頂戴ちやうだいしてしま

おう。いやまだお礼をいうのは早い。この中から三日月さまをださなくては……」

頭目は、義眼を両手の指先で支えて、くるくるとひっくりかえしてみた。しかし、義眼のどこをどうすれば開くのか、見当がつかなかった。その開き方は、ぼうじんぶつ 某人物より一応きいておいたのであるが、どこをききまちがえたか、彼の記憶にあるとおりに、義眼の上下を持って左右にねじってみても、さっぱりあかないのだった。

（フーン、こいつはまずい）と、頭目は心の中で舌打ちをした。だが、それを今顔色にあらわすことは戸倉に対しても、また部下に対してもおもしろくない。

が、問題は、それですむものではなかった。早くこれを開いてみる必要があつた。

「おい木戸。大きな金かなづち槌ちを持ってこい。急いで持ってこい」と、頭目は命令した。

「はい」と返事をして木戸が引込んでから、再び彼がこの部屋にあらわれるまで、ちよつと時間があつた。一座は、ここでほつと一息いれた。

机博士は、戸倉老人の腕に、強きょう心しん劑ざいの注射を終えると、自分の指先をアルコールのついた脱脂綿で拭ぬぐつて、それからぎゅつとくびを延ばして背のびした。

「ねえ、頭目。もう一回、今みたいな手あらなことをなさると、

わが輩^{はい}はこの人物の生命について責任をおいませんぜ。これで二度目の警告です」

と、机博士は、しずかにいい放った。これに対して頭目はだまりこくつていた。博士は、肩をすぼめた。

そこへ木戸がもどつてきた。頭の大きな金槌を頭目に渡す。

「これでいいんですかね」

「うん」

頭目は、卓^{テーブル}子の上に義眼をおいた。そして金槌を握った右手をふりかぶつて、義眼の上に打ち下ろそうとした。

「頭目。ちよつと待った」

と、声をかけた者がある。机博士だった。

頭目はいやな顔をして、博士の方へ首を向けた。

「頭目。金槌で義眼をうち割って、中のものを見ようというんでしよう。しかしそれはまずいなあ。かんじんのものに傷がつくおそれがある」

「じゃあ、どうしたらいいというんだ」

「その黄金三日月とやはらは、もちろん、金属でしょう。義眼は樹^プラスティック^{ラスティック}だ。それならば、その義眼を、ここにあるX線装置^{エックス}でも

脂^{とうし}だ。それならば、その義眼を、ここにあるX線装置^{エックス}でも透視^{とうし}すれば、いともかんたんに問題は解決する。なぜといて、X線は、樹脂をらくに透すが、黄金は透さない。だから、中にある黄金三日月が、かげになって、ありありと螢光板^{けいこうばん}の上にあられる。どうです。いい方法でしょうがな」

と、机博士はうしろから携帯用X線装置を持ちだしてきて、頭目の前の卓子の上においた。この装置は、さつき戸倉の胸部きょうぶの骨折こっせつを調べるために使ったものであった。

「これは名案だ。じゃあこれにX線をかけて見せてくれ」

と、頭目は、あんがいすなおに頼んだ。

「よろしゅうござる」

博士はそういって、装置からでている長いコードの先のプラグを、電源コンセントにさしこんだ。それからぱちんとスイッチをひねって、目盛盤を調整した。すると光線蔽おほいのある三十センチ平方ばかりの四角い幕を美しい蛍光が照らした。この蛍光幕とX線管との間に、博士は手を入れた。するとけいこうまく蛍光幕にがいこつ骸骨の手

首がうつつた。博士の手だった。

「さあ用意はよろしい。ここへ義眼をさし入れる。そしてこつちから蛍光幕をのぞくと見えます」

と、博士は身体を横にひらいて頭目をさしまねいた。

頭目は、X線装置の前へ進んで、博士からいわれたとおりにした。蛍光幕へ戸倉の義眼のりんかくがうつつた。うつつたのはその義眼ばかりではない。頭目の右の手首がうつつた。どの指かにはめている、幅のひろい指環ゆびわもうつた。

「あッ」頭目は低くさげんで、手を引きあげた。しばらくすると、また義眼をつかんだ手がうつつた。その指には、指環がはまっていなかった。頭目は、すばやく左手に持ちかえたのである。

「どうです。見えますか」と、机博士がきいた。

「三日月の形をしたものは見えない」

頭目が、X線の中で義眼をぐるぐるまわしてみるのが、義眼はすつかりすきとおっていて、金メダルの黒いかげはない。

「ああ、その中には、金属片きんぞくへんがはいっていないのです」

と、机博士が横からのぞいてみて、そういった。

「しかし、そんなはずはないんだ」

頭目は、怒ったような声でいって、手をX線装置からだすと、義眼を卓上においた。

がーンと、大きな音がして、義眼が金槌で叩きつぶされた。頭目が、かんしやくをおこして、やつつけたのである。X線装置が

検出した結果を信じなかつたのだ。破片があたりにとび散つた。まわりにいた者は、あつと叫んで、口をおさえた。

が、その結果は、義眼の中には、なにも隠されていないということが分つただけである。

「ううーむ」と、頭目は呻うなつた。

しばらく誰も黙っていた。嵐の前のしずけさだ。

と、とつぜん頭目が肩をいからして吠ほえ立てた。

「やい、戸倉。どこへ隠したのか、黄金メダルの片割かたわれを！」

「わしは知らぬ。いや、たとえ知っておつたとしても、お前のようならんぼう者には死んでも話さぬ」

戸倉老人は、のこる一眼を大きくむいて、四馬をにらみつけた。

「わしが知りたいと思つたことは、かならず知つてみせる。そうか。きさまの義眼というのは、もう一方の眼なんだな」

というと、頭目は、又もや戸倉にとびかかった。そして彼の指は戸倉の左の眼を襲つた。

ねこおんな
猫女

「あ、あぶない。待つた」

叫んだのは机博士だ。あぶないと、大きな声。そしてやにわに、

頭目の手首をつかんで引きとめた。

「なぜ、とめる？」

「お待ちなさい。戸倉の残る一眼は義眼ではないです。ほんものの眼ですよ。抜き取ろうたって、取れるものですか。やれば、器量をさげるだけです。頭目、あんたが器量を下げるのでですよ」

そういわれても、頭目は戸倉老人の頭髪をつかまえて、放そうとはしなかった。

「頭目、よく見てごらんなさい。ほんものの眼だということとは、目玉をよく見れば分りますよ。瞳どうこう孔も動くし、血管けっかんも走っている」

そういつて机は、携帯電灯を戸倉の眼の近くへさしつけた。

頭目は、戸倉の眼の近くへ顔を持っていった。そしてよく見た。なんどもよく見た。どうやら、こっちは、ほんものの目玉らしい。そのときだった。頭目の注意力が、急に戸倉の目玉から放れた。彼は、自分の顔へ、下の方から光があたっているように思ったのである。そのとおりであった。机博士が手にもっている携帯電灯の光の一部が、偶然か、それとも故意か、頭目の顔を蔽おほう三重しやの紗しやのきれの下からはいつてきて、彼の顔を下から照しているのである。

(あッ)

「無ぶ礼れい者もの！」と頭目が叫ぶのと、机博士の手から携帯電灯が叩たたきおとされるのと、同時であった。

博士は、手をおさえて、うしろへ身をひいた。彼の手から血がぼたりと床に落ちた。

「やあ君の手だったか。それは気がつかなかつた。がまんしてく
れたまえ」

頭目が、すぐ遺憾いかんの意をあらわしたので、一度に殺氣さつき立つたこの場の空気が、急にやわらいだ。

「おい戸倉。きさまが、しぶといから、こんな悶もん着ちやくが起る。
早く隠し場所をいつてしまえ。この黄金おうごんメダルの半分の方はど
こに隠して持っている」

頭目は、どこかにしまっていた黄金メダルの半分を再び左の指
でつまんで、戸倉の方へさしつけた。戸倉は、頭目をにらみつけ

たまま、口をいちもんじ一文字につぐんでいる。

「早くいうんだ。早くいえ」そのときだった。

とつぜん、この部屋のあかりが、一度に消え失せた。鼻をつままれても分らないほどの闇が、一同を包んだ。

あつと叫ぼうとしたおり折しも、

「動くと、撃つよ。動くな。あかりをつけると撃つよ。あかりをつけな」

と、かん高い女の声が、部屋の一隅から聞えた。

女は、この部屋にはいなかったはず。みんなはふしぎに思った。女の声は、一同が集つているところの反対側で、頭目の立っていた後方のようである。

「何者だ。名をなのれ」頭目の声が闇の中をつらぬいた。

「よけいな口をきくな。わたしや暗闇の中で目がみえるんだから、撃とうと思えば、お前さんの心臓のま上だつて、撃ちぬいてみせるよ。わたしや——」

と女が、えらそうなことをいつているとき、部下が固まつているところで、誰かが携帯電灯をぱつとつけた。

と、間髪かんぱつをいれず、轟然ごうぜんと銃声一発。

携帯電灯は粉微塵こなみじんになつてとび散つた。

「うーむ」どたりと人の倒れる音。

「誰でも、このとおりだよ。わたしのいうことをきかなければ…

…」

たしかに、彼女がやった早業はやわざにちがいない。それにしてもその怪しき女は、どこから、この部屋にしのびよったものか。ふしぎというより外ない。電灯が消えると同時に女の声が出たようである。それまでは、煌こうこう々と明かるかったこの部屋だ。その状況のもとで、どうしてこの部屋へ忍びこめるだろうか。まるで見えないガラス体のような女だといわなければならぬ。

「いよいよ、こっちの用事だが」と女の声はいやに落ちつき払っている。

「おい、頭目さん、お前さんの大切にしている黄金メダルの半分をあつさりわたしに引き渡しておくれ。いやとはいわさないよ。早く返事をしてもらいたいね。おやおや、お前さんはなんてえ情なさ

けない顔をするんだろう。わたしにや、紗の三重ベールなんか、あつてもないのと同じこと、お前さんの素顔すがおが、ありありと見えているんだ」

暗闇で、ものが見える目を持ってしていると自称じしようする女であつた。こゝろいわれては、四馬頭目もぺちゃんこだ。

「うそだ。見えてたまるものか」頭目の声がした。腹立たしさと恐怖とに、語尾がふるえて聞える。

「まあ、そんなことは放っておいて、おい、頭目。早く黄金メダルをおだしよ。おい、返事をしなさい返事を……」

頭目の声が、しばらくして聞えた。

「ばかをいえ。誰がだすものか」

すると、くくくくツと女が笑いだした。

「お前さんも間ぬけだねえ。そんなことをいう前にお前さんの頭の上を見るがいい。みんなも見るがいい」

「なにツ」頭目は上を見た。

「あツ、あれは……」彼の頭上一メートルばかりのところ、闇の中にもはつきり光ってみえる小さい物体があつた。しばらく目を定めてみると、それが例の黄金メダルの半分であることが、誰の目にも分つた。

「そんなはずはない」と頭目の声。

「あツ、無い。無くなっている、黄金メダルの半分が……。いつ、盗みやがったか」

「おさわぎでない。動けば撃つよ。わたしや、気が短いからね」

「何奴だ、きさまは」

「まっくらやみで、目が見える猫女と申す者でござる。ほらお前さんの大切な黄金メダルが動きだした」

そのとおりであった。猫女のいったように、黄金メダルは空中をゆらゆらと動きだした。

「手をおだしでない。一発で片づけるよ」

ふしぎふしぎ、黄金にかがやくメダルは空中をとぶ。一同は、あれよあれよと、その運動を見上げているばかり。

そのうちに、宙飛ぶ黄金メダルは、流星のようすーツ

と下に下りた。とたんに、扉がぱたんと音をたてて閉った。

「あッ」一同は首をすくめた。

と、頭目の大きな声が、出入口のところ爆発した。

「ちえッ。逃げられた。戸の向こうで、鍵かぎをかけやがった。おい明かりをつけろ。懐中電灯をつけろ。大丈夫だ。今の女は、ここからでていったんだ。そしておれたちは、この部屋に閉じこめられてるんだ」

頭目はわめきたてる。

そのとき、電灯がぱつとついた。眩まぶしいほど明かるい。一同は見た。頭目が、次の部屋との間の扉のハンドルを握って、うんうんいつているのを見た。

「おお、頭目」

「みんなこい。この扉をこじあけろ。こわれてもさしつかえないぞ」

と、頭目は扉を放れて、指をさした。

そこで部下たちは集って、扉へどすーんと体あたりをくらわした。二度、三度、四度目に扉の錠がこわれて、扉は向こうにはねかえった。

「それッ」と頭目を先頭に、部下たちが続いて、そこから次の部屋へとびこんでいった。

急に部屋はしずかになった。

残っているのは、瘦そうくつる躯くつ鶴つるのような机博士と、それからもう一人は、椅子車いすぐるまにしばりつけられた戸倉老人だけであった。

老人は、気を失っていた。

机博士は てんじょう 天井を仰いで、首をふつた。

「はて、ふしぎなことだわい。まさか妖怪変化ようかいへんげの仕業しわざでもある

まいに……」

と、不審の面持おももちで、両手をズボンのポケットに突込んだ。

深夜の怪音

さて、話は春木少年と牛丸少年の上に移る。

春木少年は、生駒いこまの滝たきの前で焚火たきびをして、その夜を過ごしたことは、諸君もご存じのはずである。

牛丸少年の方は、この山道にも明かるいので、闇の道ながらともかくも辿たどり辿たどつて、町まで帰りつくことができた。

牛丸君は、両親から叱しかられた。あまり帰りがおそかったので、これは叱しかられるのがあたり前である。

彼は、春木君が家へたずねてこなかったことを知り、念のために、春木君が起き伏している伯母おばさんの家へいった。

ところが、春木君はまだ帰ってこないので心配していたところだと、伯母まゆさんは眉まゆをよせていった。

それから大さわぎとなった。同級生や、その父兄が召集された。

その数が二十名あまりとなった。

一同は提灯ちようちんや懐中電灯を持ち、太鼓や拍子木ひようしぎや笛を持つて暗い山中へ登っていった。

「迷い児の迷い児の春木君やーい」世の中が進んでも、迷った子供を探す呼び声は大昔も今も同じことであつた。

「迷い児の迷い児の春木君やーい」

どんどんどん、どんどんどん。かあちかち、かちかちツ。

にぎやかに山を登っていった一行は、生駒の滝の前に焚火があるのを発見し、それに力を得て近づいてみると、当の春木君が火のそばで、いい気持にぐうぐう睡っているのを見出し、やれやれよかつたと、胸をなで下ろした。

二人は、もう一度叱られ直して、山を下り、無事にめいめいの家へはいった。

その翌日になると、二人のことは町内にすっかり知れわたり、学校からは受持の先生が見えるというさわぎにまでなつて、ふだんはのんき坊主の二人もすっかりちぢこまってしまった。

生駒の滝事件のことは、二人の口からもれたので、遂には警察署にまで伝わり、その活動となつた。二少年も証人として現場へ同行した。

機銃弾は発見されたが、血だまりは雨に洗われたためか、はつきりしなかつた。

ヘリコプターがとんできて、空中吊上げつりあの放れ業はなわざをやつたこと

は、牛丸少年の話だけで、それを証明するものがなかった。この次に、そういうものが飛んでいるのを見たら、気をつけることに申合わせができただけだ。

春木少年は、戸倉老人からゆずられた黄金メダルなどのことについては、遂にいわなかった。彼は、そのことについて牛丸に話すこともしなかった。彼は、このことについてゆつくりと、自分でできるだけの研究をしてみたいと思った。その上で、話した方がいい。時がきたら、牛丸にも話をするつもりだった。

なにしろ瀕死ひんしの戸倉老人が彼に残していったことばによると、黄金メダルの件は、非常な機密であつて、うっかりこれに関係していることを洩もらしたが最後、思いがけないひどい目にあうにち

がないと思われた。現に、あの好人物こうじんぶつの老人がむごたらしく瀕死の重傷を負っていたこと、それにつづいて牛丸君が見たとおり、老人がヘリコプターで誘拐ゆうかいされたそのものしきから考えて、これはうっかり口にだせないと、春木少年を警戒させたのだ。

だが、春木少年は、その謎を秘めた宝の鍵・黄金メダルの片われと、小文字でうずめられた絹きぬハンカチの焼けのこりを、いつまでも嚴封げんふうして机のひきだしの奥しまに収しまっておくことはできなかつた。それは三日目の夜に入つてのことであつたが、春木君は自分の勉強部屋にはいつて、ぴったり扉をしめて錠をかけ窓にはカーテンを引き、それから例の二つの宝の鍵の入った包を取出して、

机きじょう上のスタンドのあかりの下に開いてみた。ぴかぴか光る三日みかづ月形きがたの黄金片と、焼けこげのある絹ハンカチの一部とは、共に無事であった。

「ああ、ちゃんとしていた」

と、春木少年は自分の胸をおさえた。

「ふふふ。ぼくは、この間の事件から、いやに神経質になつたようだぞ。こんなものは、何んでもないんだ。おもちゃみたいなものだ。あの戸倉とかいった老人は、気が変になつていたんじゃないかなあ」彼は、今までと反対の心になつて、二つの宝の鍵をばかばかしく眺めた。

「だが、これはほんとの金かな」

彼は、黄金メダルを手にとつて撫なでてみた。なかなか美しい。そして重い。やっぱり黄金きんのように見える。黄金なら、これだけ売つても大した金になる。

（いつそ、売つてしまつてやろうか。売つてしまえば、めんどろなことはなくなる。それがいい、そのうち貴ききん金属ぞくしやう商しやうに、そつと見せて、値段がよければ売つてしまつてやれ）

そんなことを考えていたとき、夜の静けさについて空の一角から、ブーンとにぶい唸うなりが聞えてきた。

春木は、はつと目をかがやかした。

「飛行機が飛んでいる。まさかこの間のヘリコプターではないだろうが……」耳をすましていると、どうもふつうの飛行機の音と

はちがう。

「あツ、ヘリコプターだ。いけないぞ」

彼は、机上のスタンドのスイッチをひねって、室内をまっくらにした。そして手さぐりで、二つの宝の鍵を包んで、元のようにひきだしの奥へおしこんだ。

ヘリコプターの音は、だんだんこつちへ近づいてくるようだ。

春木少年は、急に恐怖におそわれ、がたがたとふるえだした。

「分った。ぼくの黄金メダルを奪いにきたんだ。それにちがいない」春木少年は、そう思った。

たいへんである。彼は生駒の滝の前で、あの黄金メダルを死守ししゅした戸倉老人が、賊のためどんなにひどい目にあつたかを思いだ

した。それからとつぜん滝の前へおりてきたヘリコプターが、倒れている戸倉老人に対して猛烈な機関銃射撃をやったあげくに、老人を吊りあげて飛び去ったことを思いだした。これは牛丸君から聞いたことだが、おそらくほんとうであろう。

どこまでも手荒いてあら賊どものやり方だ。最新式の乗り物や殺人の器械を自由に使いこなして、必ず目的を達しないではやまないと、いうすごい賊どもだ。

「ぼくなんか、とてもかなわないや。これはおとなしく黄金メダルを渡した方が安全だよ」

春木少年は、抵抗することの愚かさおろをさとった。だが、くやし
い。

「……待てよ。戸倉老人は、生命にかけて、黄金メダルを賊どもに渡すまいと、がんばったのだ。それをぼくがゆずり渡されたんだから、ぼくも生命にかけて、これを守るのがほんとうじゃないか」

少年の気が、かわって来た。すると恐怖がすうーっとうすれていった。

「よし。逃げられるだけ逃げてやれ」

春木は考え直した。そしていったんしまった黄金メダルと絹のきれとを再びとりだし、すばやくズボンのポケットにねじこむと、裏口からそつと外へでた。

ヘリコプターは、いよいよ近くに迫っていた。

信号灯しんごうとうか 標識灯ひょうしきとうか しろでないが、色電灯いろでんとうがついているの
が見える。

春木は、首をちぢめて、堀へいのかげにとびこんだ。二十日あまり
の月明つきあかりであった。姿を見られやすいから、行動は楽でない。
彼はヘリコプターから見つけられないようにと、堀ほりづたいに夜
の町をぬって、山手へ逃げた。

二百メートルばかりいくと、そこから向こうは急に高く崖がけにな
っていた。崖の上には稲荷神社いなりじんじやの祠があつた。このごろのこと
とて屋根はやぶれ軒は傾き、誰も番をしていない祠だつた。春木
は、その石段をのぼることをわざとさけ、横の方についている草
にうずもれた急な小道をのぼっていった。もちろん姿を見られな

いためだった。

崖の上へのぼりついて、彼はほつとした。ここなら、まず、大丈夫である。

というのは、ここは山の裾すそで、ひどい傾斜けいしゃになっている。稲荷神社のまわりには、古い大きい木がぎっしりとり囲んでいて、枝がはりだして隙間すきまのないほどだ。それに境内けいだいもごくせまい。ここなら、ヘリコプターが下りてこようとしても、翼つばさが山の木にさわって、とてもうまくいかないであろう。春木は、そういう推理にもとづいて、崖の上のお稲荷さんへかけあがったのである。

おそろしき事件

おそろしい事件が、この時には既に、^{すでに}あらまし終っていたのだ。今、その最後の仕上げが行われつつあった。

さて、それはどういう事件であつたらうか。

ヘリコプターがだんだんこつちへ近づいてくるので、春木は不安になった。ヘリコプターは、このままの方向で飛びつづけると、お稲荷さんいなりのうしろの山に、ぶつかるにちがいがなかった。春木は、自分がここにいることを、やっぱりヘリコプターに見つけられたかと思つたくらいだ。

ところがヘリコプターは、お稲荷さんの方までは飛んでこなかった。その途中にある河原かわらの上と思うあたりで、得意の空中足ぶみをはじめたのである。

その河原は、春木のいるところからは右手に見えていたが、その川は芝原水源しばはらすいげんち地ちのあまり水が流れていて、末すえは湊みなと川がわにはいるのだ。

「何をするつもりかなあ」

と春木は、こわごわ崖の上の木立のかげからのびあがってその方を注意していた。

すると、河原の向う岸に、四五人の人影が固まって歩いているのに気がついた。彼らは上流の方へ向って歩いている。が、とつ

ぜん彼らはひっかえした。影が長くなった。その先頭に、小さい影が一つ走っていた。

その小さい影は、ある一軒の家の石段にあがりかけた。とあとの群が、その小さな影の上に重^{かさ}なった。

人影の群は、ふたたび前のように、岸の上を上流に向って歩きだした。彼らは固まっていた。

そして小さい影は、彼らの頭の上にかつがれているらしかった。春木は、このとき、どきんとした。

「あ、あの家は牛丸君の家だ。……すると、もしや。あの小さい人影は、牛丸君ではなかったか」

はつきりした理由は分らないけれど、牛丸君も自分も、この間

からヘリコプターの賊と因縁いんねんがついて、なんだかいつも睨にらまれているような気がしてならなかつた。

だから春木は、すぐ牛丸君が誘拐ゆうかいされると、かんづいたわけである。そしてそれはほんとうに正しい観察であつた。

牛丸少年をかつぎあげた怪漢かいかんの一同は、それから間もなく白河原の中へ下りていった。そこには、おあつらえ向きにヘリコプターが上に待っていて、綱つなだか縄梯子なわばしごだかを下ろしてあつた。

彼らが、その梯子にとりついて、だんだん上へひきあげられていくのが見えた。ただひとり河原に残っていた人影があつたが、それは大きな人影であつて、牛丸君ではなかつたようである。このとき牛丸君は、あの戸倉老人のときと同じように、綱にくくり

つけられ、ヘリコプターの中へずんずん引きあげられているのに
ちがいない。

ヘリコプターは、この離れ業をたいへんすばしこくやってのけ
ると、早やぐんぐん上昇を始めた。

「ひどい奴だ^{やつ}」

春木は、むちやくちやに腹が立った。しかしどうすることがで
きようか。

相手は、自分たちが持っていない文明の利器^{りき}を使って、好きな
ことをやってのけるのだ。手だしができやしない。

ヘリコプターは、ぐんぐん舞い上がり、それから予想していた
とおり、山を越えて、北の方へ行ってしまった。

(もうおしまいだ。ああ、かわいそうな牛丸君よ。……しかし賊どもは、君を誘拐してつて、どうするつもりだろうか。君は、なんにも関係がないのに……)

春木少年はそう思って、すこしばかり心が痛んだ。自分の身替みがわりに、牛丸君が誘拐されたのではないかと気がついたからである。やっぱり、黄おうごん金メダル探しが目的なんだろう。

あのととき生駒の滝の前で、自分は既に黄金メダルを戸倉老人からゆずられ、そして老人のいうところに従って、ヘリコプターから見られないようにするため、岩かげにかくれた。

ところがそこに大きな穴があいていて、自分はその中へ落ちこんだ。

そのあとへ牛丸君がきた。そしてヘリコプターに乗っていた悪者どもから見られてしまったのだ。戸倉老人が誘拐されてつて、黄金メダルを調べられたが、持っていなかったもので、それではあの少年に渡したのではあるまいか、なにしろ戸倉老人は重傷であったから、倒れていた位置を動くことはできなかつたはずだ。そういう考えから悪者どもは牛丸君を今夜奪つていったのである。——と、春木少年はこのように推理を組立ててみたのである。

そのあとに、新しい不安が匍はいあがってきた。それは、「悪者どもが牛丸君を調べて、黄金メダルなんか知らないことが分つたら、悪者どもはその次はどうするであろうか。こんどは自分を誘拐にくるのではなからうか。いや、なからうかどころではない、

悪者どもは必ず自分を襲うにちがいない」と気がついたからである。

「いやだなあ。これはたいへんだ」

春木少年は身ぶるいした。どうしたら助かるだろうか。どうしたら安全になるであろうか。

それは警察の保護をもとめるのが一番よいと思われた。

「だが、待てよ」

警察の保護を受けるのはいいが、そうになると、あの黄金メダルおおよのことも公けに知られてしまう。すると戸倉老人の心に反することになりそうだ。また、せつかくここまで秘密にしてきたこの謎の宝ものを、むぎむぎと世間に知らせてしまうのは惜しい気がする。

る。それから始まって、全世界に知れわたると、われもわれもと宝探し屋がふえて、結局、春木自身なんかのところへその宝は絶対にくろげこんでこないであろう。

春木少年は、やはり人間らしい慾よくがあつたために、黄金メダルを警察へ引きわたすのは、もうすこし見合わすことにした。

「しかし、そうになると、どうしたら安全になるだろうか。自分の生命も安全、黄金メダルも安全、という方法はないものか」そう考えているとき、目の下の校舎の窓にぱつと明かりがついた。

それはスミレ学園の校舎であつた。スミレ学園というのは有名な私立学校であつて、下は幼稚園から、上は高等学校までのクラスの級を持つていた。どの組も人数が少く、先生は多く学費はかなり高価であつたが、ここで教育せられた生徒はたいへんりっぱであつたから、入学志望者は毎年五六倍もたくさん集つた。

あかり 灯のついたのは、室内運動館であつた。その二階の一室に灯がついたのである。運動をする場所は床から二階までぶつ通しになつてゐるが、その外にすこしばかり小さい部屋が一階と二階についていた。一階は運動具をおさめる室などがあり、二階は図書記

録室の外に、宿直室があつた。今はこの宿直室は体操の先生である立花^{たちばな}カツミ女史が寝泊りしていた。この先生は、列車に乗つて遠方から登校するので、翌日も授業のある日は、ここに泊つていく。

春木少年は、自分の学校の先生ではないが、立花先生を見おぼえていた。なにしろ女史は目につく婦人だつた。背丈^{せたいけ}が五尺五寸ぐらいある、すんなりと美しい線やかこまれた身体を持っていた。そしてととのつた容^{ようぼう}貌の持ち主で、ただ先生であるせいか、冷たい感じのする顔であつた。春木少年は、東京に住んでいたころ、近所にこの立花先生によく似た婦人があつたので、先生の顔はすぐおぼえてしまった。

立花先生のことを、このへんの子供は、タチメンとよんでいた。それは身体が長い銀色の魚タチウオに似ていて、先生は女だからメスで（この町ではメスのことをメンという）つづけていうとタチウオのメン、つまりタチメンという^{あだな}綽名がついたのである。

春木少年は、今ごろなぜ立花先生が起きたのであろうかとふしぎに思った。先生ではなく、他の人が灯をつけたのかとも思った。しかしそのとき先生の顔が窓ぎわにあらわれた。そしてちよつと外を見てから、急いでカーテンをひいた。それだけのことであったが、タチメン先生にちがいはなかった。

「そうだ。タチメン先生に、この黄金メダルを預つてもらおう。先生なら、女だけれど、体操の先生だから強いだろうし、秘密を

まもつて下さいといえ、承知して下さるだろう。そうすれば、
ぼくも黄金メダルも安全になるのだ」

春木は、そう考えついた。

彼は、そのつもりになつて、そこをでかけようとしたとき、急に事態がかわつた。というのは、川向うの牛丸君の家の前でさわぎが起つているのが見えたからだ。どうやら家の人々が外へとびだして、救いをもとめているようであつた。家の人たちは、今まで家の中で悪者どもにしばらくられていて、縄をほくくことができなかつたのであろう。

「これは、こうしてられない。ぼくもすぐいって、さつき見たことを家の人に教えてあげなくてはならない」

この方が急を要することだった。春木少年は走りだしたが、
もや戻つてきた。彼は、そこに聳^{そび}えている棕^{むく}の木の根方を、あり
あわせの石のかけらで急いで掘つた。

しばらくして、彼が手をとめると、根方には穴が掘れていた。
春木少年はポケットをさぐつて、黄金メダルと絹^{きぬ}ハンカチの燃え
のこりをだした。それからそれを鼻紙に包んだ。その包を、穴の
中に入れた。それから、土をどんどんかぶせた。そして一番上に
弁当箱ほどの丸い石を置き、それからまわりを固く踏みかためた。
「まあ、一時こうしておこう。でないと、牛丸君の家の前までい
つたとき、もしも悪者が残つていて、ぼくをつかまえてもしたら、
大切な宝ものをとられてしまうからなあ」

春木少年は、どこまでも用心ぶかかった。

そうなのである。油断はならないのだ。さつきヘリコプターが牛丸君をつりあげ、そして仲間をひっぱりあげて空へ舞いあがっていったが、あのととき河原に一人だけ残っている者があつたではないか。それは誰であるか分らなかつたけれど、もちろん悪者の仲間がちがいない。彼はそれからどこへいったか見えなくなつてしまつたが、いつひよつくり姿を現わすかしないのだ。あんがい近所の塀のかげにかくれて、牛丸君の家の様子を監視しているのかもしれない。そうだとすると、あそこへ大切な宝ものを持つていくのはやめた方がいいのだ——と、春木少年は考えたのである。

黄金メダルは春木少年の身体をはなれたので、彼は身軽みがるになつ

た。彼は崖の小道を、すべるようにかけ下り、牛丸君の家の方へ走っていった。

息せき切つて、牛丸君の家の前へいつてみると、はたしてそのとおりだった。牛丸君のお父さんやお母さんが気が変になつたようになつてさわいでいた。近所の人々も、だんだん集つてきた。そのうちにエンジンの音がして、警官隊が自動車にのつて、のりつけた。

牛丸君のお父さんの話によると、四名の怪漢かいかんがはいつてきて、ピストルでおどかしたそうである。強盗と同じだ。そして牛丸君をひつとらえると、ちよつと用があるからきてくれ、生命には別条ないから心配いらない、しかしいうことをきかないと痛い目に

あうぞ、といって、牛丸君を外へつれだしたという。家の人はピストルでおどしつけられ、縄でぐるぐる巻きにされていたので、牛丸君を助けることができなかつたということだ。

それから先のことは、春木少年がお稲荷いなりさんの崖の上から月明つきあかりに見ていたとおりだった。

「警察はもつと早くきてくれないと、だめだなあ」と、近所の人がいった。

「そうだ、そうだ。それに自動車ぐらいもつてきたんじやだめだ。相手は飛行機を使って誘拐するんだから、警察もすぐ飛行機で追っつかないと、いつまでたつても、相手をつかまえることができない」別の人が、そういった。

全くそのとおりであった。しかし警察の方では、そんなにきびきびやれない事情があるようであった。

春木少年は、牛丸君の両親に、お見舞だけをいって、さよならをした。この間のカンヌキ山のぼりのことをいわれるかと思つたが、両親ともそのことについてはなにもいいださなかつた。それよりも一刻も早く息子を取りかえしてもらいたいと警察の人にすがることには一生けんめいだったのである。

ひげづらおとこ 面の男の登場

崖がけの上のお稲荷いなりさんでは、春木少年が黄金メダルを埋うずめていつてしまった後、おかしなことが起つた。

それは、お稲荷さんの荒れはてた祠ほこらの中から、一人の人物が、のっそりとでてきたのである。

その人物は、まず両手をうんとのばして、

「あツ、あツ、ああーツ」と大あくびをした。

月に照らしだされたところでは、彼の顔は無精ぶしようひげでおおわれ、頭もばさばさ、身体の上にはたくさん着ていたが、ズボンもジャケツも外がいとう套もみんなひどいもので、破れ穴は数えられないほど多いし、ほころびたところはそのまま、ぼろが下っていた。

外套にはボタンがないと見え、上から縄でバンドのようにしばりつけてあつた。ほうろうしや放浪者であつた。

「さつきから見えていりや、あの小僧め、へんなまねをしやがつたぜ。いったい、あの木の根元に何を埋めたのか、ちよつくら見てもやろう。食えるものなら、さつそくごちそうになるぜ」くうふく空腹を感じていると見え、そのひげの男は舌なめずりをして、下へ下りてきた。そしてのつそり、崖の上のむく棕の木のところまでいった。

彼はすぐ埋めてある場所を発見した。そうでもあろう、春木少年が踏みつけていったすぐあとのことだから、気をつけて探せば、すぐ目にとまる。

「ははあ。この石が目印ってわけか」ひげ面男は石をけとばすと、

そこへしやがみ、両手を使って土をかきだした。間もなく彼は目的物をつかんで立ち上った。

「なあんだ、これは……」彼はあてが外れたという顔つきで、紙包を開いて中を見たが、よく正体が分らないので、それを持ったまま、祠の方へひきかえしていった。

祠の傾かたむいた屋根をくぐり、格子の中へはいると、御神体ごしんたいをまつつた前に、三畳敷じょうじきぐらいの板の間があり、そこに破れむしろが敷いてあつた。そこがこのひげ面男——姉川あねがわごろう五郎の寢室であつた。

彼は、むしろの上にごろんと寝ると、隅つこのところへ手をのばして、ごそごそやっていたが、やがてその手が、船で使う角かくと

灯をつかんできた。彼はマッチをすって、それに火をつけた。

この場所にはもつたいないほどの明かりがついた。その下で、彼は紙包を開いた。

すると、絹の焼け布片きれがでてきた。彼はそれを無造作むぞうさにひらいた。こんどは黄金メダルがでてきた。ぴかぴか光るので彼はびっくりした。それを掌てのひらにのせて、いくども裏表をひっくりかえして、見入った。

絹の焼け布片の方は、紙と共にこの男の手をはなれ、折から吹きこんできた風のため、ひらひらと遠くへころがっていった。もしもこの光景を戸倉老人や春木少年が見ていたとしたら、おどろいて後をおっかけたことであろう。

「何じゃ、これは」三日月型の黄金メダルは、姉川の掌の上でさんざん宙がえりをやったが、その正体はこのひげ面男に理解されなかったようである。

「ぴかぴかしているが、これは鍍金メッキだよ。それに半分にかけていちや、売れやしない。ああ、くたびれもうけか。損をしたよ」

ひげ面男は、黄金メダルを腹立たしそうにむしろの上に放りだすと、角灯をぱつと吹き消した。そしてごろんと横になった。しばらくすると、大きなびきが聞えてきた。空腹をおさえて、ひげ面先生は睡ってしまったのである。

それから数時間たって、夜が明けた。

ひげ面男の姉川五郎は、早起きだった。もつとも朝日が第一番

に祠の破れ目から彼の顔にさしこむので、まぶしくて寝ていられなかった。

彼は、むしろの上に起きあがって、たてつづけて大あくびを三つ四つやって、ぼりぼり身体をかいだ。それから何ということなくあたりを見まわした。すると、ぴかりと光ったものが、彼の充血した眼を射た。

「何？ ああ、昨夜の屑ゆうべくずがねか。おどかしやがる」

彼はひとりごとをいって手を延のばすと、むしろの上から黄金メダルをひろいあげた。そして朝日の下で、また裏表をいくどもひっくりかえして見た。

「鍍金にはできがいいわい。まさか、本ものの金じゃなかる

うね。おい屑がねの大將、おどかしつこなしだよ。おれはこう見えても心臓がよわい方だからね」

彼は黄金メダルを手にして、左右をふりかえった。角灯が目にはいった。それを引きよせ、その角のところ、黄金メダルを傷つけた。メダルは楽に溝がみぞきざみこまれ、下から新しい肌がでてきた。それを姉川五郎は、陽ひにかざして目を大きくむいて見すえた。

「おやおや。中まで金鍍金きんメツキがしてあるぞ。えらくていねいな仕上げだ。……待て、待て。これは、本ものの金かもしれんぞ。そんなら大したものだ。叩き売つても、一カ月ぐらいの飲み料ははいるだろう。善は急げだ。さっそくでかけよう」

姉川は、黄金メダルをポケットの中へねじこんだ。それから彼は、腰縄をといて、外套をぽんと脱いだ。それから手を天井井の方へ延ばして、天井裏をごそごそやって、そこに隠してあつた上衣うわぎをとりだして、それをジャケットの上に着た。それからもう一度天井裏へ手をやると、帽子をだしてきた。それをぼさぼさ頭にのせたところを見ると、型はくずれているが、船乗りの帽子ふなのだつた。それから彼は、賽銭箱さいせんばこの中から破れ靴をだして足につっかけズボンをひとゆすり、ゆすりあげてから、悠々と石段を下りていった。

こんな一大事が発生しているとは知らず、春木少年は八時ごろにお稲荷さんへのぼってきた。

昨夜、宝ものを椋の木の根方に埋めたが、埋め方がうまかったかどうか、それを検分するために、彼は朝早く崖をのぼってやってきたのである。

「ああッ！」彼の目は、すぐさま、異常を発見した。椋の木の根方はむざんに掘りかえされてある。春木少年は青くなつて、そこへとんでいった。

「やられた」土の上に膝をついて、掘りかえされた穴の中を探つてみたが、昨夜彼が埋めたものは、影も形もなかった。そばを見れば目印においた丸石が放りだしてある。彼はがっかりした。そこに尻餅をついたまま、しばらくは起きあがる力さえなかった。(失敗しまった。やっぱり、机の奥にしまっておけばよかつたんだ。

あわててもちだしたり、うっかりこんなところへ埋めたり、とんでもないことをしてしまった。せつかく戸倉老人が呉れたのに、おいしいことをした。……しかし誰がここから掘りだして持っていたのだろうか)

春木少年は、大がっかりの底から、ようやく気をとり直して立ち上った。

(なんとか取返したいものだ。まだ、絶望するのは早かろう)

少年は、推理の糸口をつかみ、それからその糸を犯人のところまでたぐっていくために、境^{けいだい}内をぶらぶらと歩きだしたが、そのとき生々しい足跡が祠の前からこつちへついているのを発見し、「これかもしれない」

と、緊張した。彼は祠の中をのぞきこんだ。

その結果、彼は姉川五郎の寝室があるのを見つけた。

「ぼくはうつかりしていた。ここにいた男に見られちまったんだよ」くやし涙が、春木少年の頬ほおをぬらした。いくらくやんでも諦あきらめきれない失敗だった。

もしや祠の中のどこかに黄金メダルをかくしていないであろうかと思ひ、彼は祠の中へはいあがつて、念入りにしらべた。だが、そんなものはあろうはずがなかった。ただ、彼は祠の破れ穴のところころに、絹の焼け布片がひっかかっているのを発見し、声をあげてよろこんだ。

黄金メダルとこれとの両方を失ったかと思つたが、焼け布片だ

けでも自分の手にもどってくれたことは、不幸中の幸であると思つた。この上は、この焼け布片は大切に保管し、二度とこんなことにならないようにしなくてはならないと思つた。姉川五郎は、黄金メダルを握つて、どこへいったのであろうか。

二つに割れている黄金メダルの一つは、こうして春木少年の手からはなれてしまつた。もう一つは、六ろくてんさんさい天山塞の頭とうもくしぼけ目四馬んじやく劍尺の手から猫ねこおんな女の手へ移つた。このあと、この二つの

貴重なる黄金メダルは、いかなる道を動いていくのであろうか。メダルの二つの破片がいつしよになるのは何時のことか。

それにしても、この黄金メダルに秘められたる謎はどういうことであらうか。事件はいよいよ本舞台へのぼつていく。

少年探偵なげく

まったく春木少年は、がっかりしてしまった。

もうなにをするのも、いやであつた。自分のすることは何一つうまくいかないことが分つた。彼はすっかりくさつてしまった。

瀕死ひんしの戸倉老人が、いのちをかけて、かれ春木少年にゆづつてくれた大切な黄金メダルの半ぺら！ あれが、今ではもう彼の手にないのだ。

(お稲荷さまだから、どろぼうから守ってくれると思っていたのに……)

境内けいだいの木の根元に、うずめたのが運のつきであった。誰かがさつそく掘りだして持って行ってしまった。

(きつと、あの祠ねおきに寝起ねおきしている男にちがいない)

春木少年は、あれからいくどもお稲荷さんの崖がけにのぼって、裏手からそつと祠をのぞいた。だが、いつ見ても、破れやぶごぎが敷きっぱなしになっているだけで、主人公の姿は見えなかった。

春木は、がっかりしたが、いくどでもくりかえしあそこへいつてみる決心だった。

黄金メダルを盗まれたことも、くやしくてならない大事件だつ

だが、それよりも町中にひびきわたった大事件は、
牛丸平太郎うしまるへいたろう
少年がヘリコプターにさらわれたことだった。

なにしろ、そのさらわれ方が、あまりに人もなげな大胆なふるまいで、親たちも近所の者も手のくだしようがなく、あれよあれよと見ている目の前で、ヘリコプターへ吊りあげられ、そのまま空へさらわれてしまったのだ。

警官隊の来ようもおそかった。またたとえ間にあつたとしても、やはりどうしようもなかつたにちがいない。飛行機を持っていない警官隊は、どうしようもない。

牛丸平太郎は、みんなにかわいがられていた少年だから、この誘拐ゆうかい事件の反響も大きかった。ことに、その前に春木君が山の

中で、行方不明になった事件のとき、牛丸君が誰より早くこれを知らせたことで、牛丸少年を知っている人は多かつた。

春木としても、一番仲よしの友だちを、そんなひどい目にされたので、くやしくてならなかつた。それで、ぜひ捜査隊そうさたいの中へ加えて下さいと、先生にまでとどけておいたほどである。

「ああ、そうか。それはいいね。この前は、牛丸君が春木君の遭難を知らせた。こんどはその恩がえしで、春木君が牛丸君を探しにいくというわけだね。まことにいいことだ」

と、受持の主任しゅにん金谷先生かなやは、ほめてくれた。

「先生。牛丸君は、なぜさらわれていったのでしょうか」
その時春木は、先生にたずねた。

「それがどうも分らないんだ。牛丸君の家は旧家きゆうかだから、金があると思われたのかもしれないな。そんなら、あとになつて、きつと脅迫きようはくじよう状じようがくるよ」

「脅迫状ですか」

「うん。牛丸平太郎少年の生命いのちを助けたいと思うなら、何月何日にどこそこへ、金百万円を持ってこい——などを書いてある脅迫状さ。しかしほんとは牛丸君の家は貧乏しているので、そんな大金はないよ。もしそう思っているのなら、賊の思いちがいさ」

金谷先生は、牛丸君の家の内部のことをよく知っているらしい。

「それじゃあ、なぜ牛丸君は、さらわれたんでしょうね」

「分らないね。牛丸君は、君のようにとび切り美少年びしょうねんだというわけでもないし……そうだ、君は何か心あたりでもあるんじゃないか。あるのならいつてみなさい」

と、金谷先生は春木の顔をじつと見つめた。

そのとき春木は、例の生駒いごまの滝たきの事件のことをいつてみようかと思った。あのときからヘリコプターにねらわれているのではないだろうかといいい出したかった。しかし春木は、それをいっただらあ、あの黄金メダルのことまでうちあけてしまいたくなるだろうと思つた。その黄金メダルは、今はもう彼の手もとにないのだ。すべてあれからあやしい糸がひいているように思う。それなら、ここで先生にうちあけてしまった方がいいのではないか。

だが、春木は、ついに、それをいいださずじまつた。

そのわけは、彼が口をひらこうとしたとき、そばを立花カツミ先生が通りかかったためである。この女の先生はスマレ学園につとめているが、方々の学校へもよく来る。そして体操の話をした、あたらしい体操や運動競技を教えていくのだ。

「やあ、立花さん」と、金谷先生が声をかけた。

「おや、金谷先生。こんなところにいらしたんですか」

と、立花先生は、そばへ寄ってきた。春木は、おじぎをして、二人の先生の前を離れた。そういうわけで、彼は黄金メダルまでの話をいいそびれてしまったのだ。

このとき春木には聞えなかったけれど、神さまは口のあたりに

軽い笑いをおうかべになり、悪魔はちよつと舌打ちをしたのであつた。なぜだろう。

絹きぬのハンカチの文句もんく

その夜にも二回、その次の日の朝にも三回、春木少年はお稲荷さんの祠を偵察ていさつした。

だが、彼が見たいと思つた浮浪者の姿を見ることはできなかつた。その浮浪者は、その夜はとうとうこの祠の中の寢床へはかえ

つてこなかつたのである。

（なぜ、帰つてこないのだろうか。ひよつとしたら、あの黄金メダルを売りにいって、お金がはいったから、帰つてこなかつたのではあるまいか）

春木少年の推理はするどく、かの姉川五郎の気持をある程度まで、ぴつたりあてた。

困こまつた。売つたのなら、その売つた先をいそいで探さないと手おくれになる。といつて、それを聞くには浮浪者が帰つてこない、聞くわけにいかない。彼はまたもや昨日の失敗がくやまれてくるのだつた。

（ぐずぐずしていると、ますます工合ぐあいが悪くなる！）

少年にも、そのことがはつきり分った。

「そうだ。ぼくは、なんというバカ者だったろう。盗まれるなら、あの黄金メダルに彫^ほりつけてあつた暗号文みたいなものを、べつの紙にうつしとっておけばよかつたんだ」

ああ、そう気がつくのが、おそかつた。

黄金メダルは、もう春木少年の手にはないのだ。まったく注意が足りなかつた。人に見せまい、大切に大切にしようと思つて、黄金メダルの暗号文もよく見ないで、しまつておいたのだ。

「ハンカチがある。あれにも字が書いてあつた。そうだ、あのハンカチも、いつ盗まれるか知れない。今のうちに、文句をうつしておこう」春木は、やっと今になって、本道へもどつた。しかし

彼は、本道へもどるまでに、二度も大失敗をくりかえしている。

少年は、その夜、例の焼けのこりの絹ハンカチを灯あかりの下にひろげてみた。

ざんねんにも、四分の一か五分の一ほどしか残っていない。

が、それでもこれは重大なる手がかりなのだ。

さて、読みかかったが、絹ハンカチに書かれてある文字は、細かい毛筆で、達者にくずしてあるため、判読するのがなかなかむずかしかった。

しかし少年は、その困難を越え、字引をくりかえし調べて、どうやらこうやら一応はその文字を拾い読むことができた。

いったい、どのような文句が、そこに書きつづられていたであ

ろうか。

十四行だけ残っていた。しかしその一行とて、行の終りまで完全に出ているわけでない。しかし行の頭のところは、みなでている。それは、次のような文字の羅列であつた。

へざ……………

たる……………

二つ合……………

蔵する宝……………

の開き方を知……………

り。オクタンとへ……………

したため協力せず……………
する黄金メダルの……………
のと暗殺者を送……………
斃^{たお}れ黄金メダルは暗……………
り、それより行方不明……………
ここにある一片^{ぺん}は才……………
せし一片にして余は地中……………
おいてこれを手に入れたる……………

「なんだろう。さっぱり意味が分らない」
春木少年は、ざんねんであった。

もしも生駒の滝のたき火で、こんなに焼いてしまわなかったら、一つの完成した文章が読めて、今頃は重大な発見に小おどりしているだろうに。

「いや、未練みれんがましいことは、もういうまい。この焼けのこりの文句から、全体の文章が持っている重大な意味を引出してみせる」彼は興奮した。くりかえし、この切れ切れの文句を口の中で読みかえした。彼は、考えて考えぬいた。頭が火のようにあつくなつた。

そのうちに、彼は、一つのヒントをつかんだように思った。

「この黄金メダルの半ぺらを一つずつ持っていた人間が二人ある。ひとりをオクタンといい、もうひとりをへざ……というのだ」

オクタンにヘザ何とかであるが、ヘザの方は名前の全部が分つていない。とにかく、この二人が黄金メダルを半ぺらずつ持つていたとしてこの文句を読むと、意味が通るのであった。

これに勢いを得て、少年探偵はさらに推理をすすめた。すると、第二のヒントが見つかった。

「あの黄金メダルを二つ合わせると、宝のあるところの開き方を知ることができるようになっているんだ」

第三行と第四行と第五行とから、これだけの意味が拾えたように思った。

もしこれが当たっているなら、黄金メダルの二個の半ぺらを手に入れた上で、二つを合わせてみなくてはならないのだ。メダルの

裏にきざみこんである暗号文字のようなものが、二つ合わせて読むと、完全な意味を持つようになって、宝庫ほうこの開き方を知らせてくれるらしい。

少年探偵は、いよいよ勢いづいて、その先を解析した。

第六行から第十一行までは、大して重要なことではないらしいが、そこに書かれてある意味は、

——黄金メダルの半ぺらずつを持ったオクタンとヘなにがしザ某とは、

仲がわるくて助け合わず、相手の持つ半ぺらを奪おうとして、暗殺者を送った。その結果、兩人のうちの誰かが死んだ。そして半ぺらは行方不明となった——

というのではなからうか。

「いや、それでは、兩人のうちの誰かが相手に暗殺者を向けて斃し、そして黄金メダルの半ぺらを奪つたものなら、その半ぺらはその者の所有となり、行方不明になるはずがない。これは意味が通じない。考えなおしだ」

いろいろと考え直したが、もうすこしで分りそうでいて、どうもうまい答がでなかつた。少年探偵は、しやくにさわつてならなかつたが、そのときはもうそれ以上に頭がはたらかなかつた。

それから最後の三行から、次のことを推理した。

——この一片、すなわち、戸倉老人の持っていた半ぺらは、オクタンが持っていた半ぺらであつて、自分、すなわち、戸倉老人は、これを地中から掘り出したものである——

どうやら、これだけのことが分った。

オクタンとヘザ某とは、いったい何者であるか、それが分らない。これは文章のはじめの方に、説明があつたのだろう。そのところが焼けてしまったために、とつぜんオクタンとヘザ某の名がでてきて、彼らが何者であるのか、その関係や、二人の時代が分らないのである。

後日になって明らかになつたことだが、このように解釈した春木少年の推理は、原文の意味の七分どおり正しく解いているのであつた。少年探偵としては、及第点であつた。

このとき以来、彼は、右の解釈を基^{もと}として、その後の活動をすることにしたのであるが、実はもう一つ、彼が考えたことがあつ

た。それは、

——ヘザ某は、オクタンの放った暗殺者のために殺され、ヘザの持っていた黄金メダルの半ぺらは行方不明となった。オクターンは自分の持っている半ぺらをたよりに、宝探しをこころみだが、うまくいかなかった。そして彼は、残念に思いながら死んでしまった。だから、世界的大宝物は、まだ発見されずにもとのところに保存されている——

まず、こんな風に推定したのだった。

だから、オクターンは、とても悪い奴やつ。ヘザ某は気の毒な人。そしてヘザ某の遺族か部下は、オクターンを恨うらんでいるが、彼らの手には、オクターンには奪われないで助かった黄金メダルの半ぺらが

ある。扇おうぎがた形をしたその半ぺらを持っている者があつたら、それはへざ某の遺族か部下に關係ある者だ——と春木少年は思った。このことが正しいかどうか、読者諸君には興味が深いであろう。なぜなれば、諸君は春木少年のまだ知らない事実——四馬劍尺や猫女のことなどを知っているのだから。

きれいな独房どくぼう

かわいそうなのは、自宅からヘリコプターにさらわれていった

牛丸平太郎少年だった。

彼がヘリコプターに收容せられたときには、気を失っていた。だから、あとのことはよくおぼえていない。

気がついたときは、固いベッドの上に寝ていた。おどろいて彼は起き直った。からだの方々痛い。

「おお、これは……」

明かるく照明された、せまい一室だったが、入口は扉とのかわりに、鉄の格子こうしがはまっていた。牢屋ろうやだった。ベッドは部屋の隅にとりつけてあって、腰かけの用もしていた。

「ぼくを、こんなところへいれて、どうするつもりやろ」

牛丸は、鉄格子のところへいって、それが開くかどうかためし

てみた。だめだった。鉄格子の外側には、がんじょうな錠前がぶら下っているのが見えた。

鉄格子の前は通路になっていた。そして正面には、壁があるだけだった。

どこか抜けだすところはないかと、牛丸少年は部屋中を見まわした。天井に小さい空気穴があいているだけだ。そこからであろうとしても人間にはできないことだった。小さい猫ならでられるかもしれないが、牛丸は猫ではなかった。

天井は、高かった。室内には、ベッドの外になんにもない。いや、一つあった。それは便器であった。

牛丸少年は、この部屋に永いこと、とめておかれた。ここでは、

時刻がさっぱり分らなかつたけれど、牢番らしい男がきて、鉄格子の窓から、食事をさしいれていったので、朝がきたらしいことをさとつた。

牢番は、五十歳ぐらいのじやがいものように、でくでく太つたおじさんだつた。牛丸が話しかけても、牢番男は首を左右にふるだけで、返事をしなかつた。

昼飯ひるめしを持ってきたときに、牛丸はまた話しかけた。牢番は同じように首を左右にふり、指で自分の耳と口とをさして、

(わしは、耳がきこえないし、口もきけないよ)

と、知らせた。夕飯ゆうはんのとき、牛丸が話しかけようとすると、

牢番は、こわい目でにらんだ。そして不安な目付で左右をふりか

えった。そしてもう一度こわい目をし、大口をあいて、牛丸少年をおどかした。

牛丸は、がっかりした。すべての望みのぞを失い、ベッドにうつ伏して、わあわあ泣いた。だが、誰もそれを慰なぐさめにくてくれる者はなかった。

疲れ切っていたと見え、その姿勢のまま、牛丸はねむってしまったらしい。

「起きろ。こら、起きろ、子供」

あらあらしい声に、牛丸はやっと目がさめた。

「さあ起きろ。頭目かしらのお呼びだ。おとなしくついてくるんだぞ」
若い男が、そういって、牛丸の手首にがちやりと手錠をはめた。

牛丸は引立てられて、監房かんぼうをでた。

前後左右をまもられて、牛丸少年は通路を永く歩かせられ、それからエレベーターに乗せられて上の方へのぼっていった。その道中に彼はたえずあたりに気を配ったが、それはなかなかりっぱな建物に見えた。彼はここがカンヌキ山のずっと奥深い山ぶところにかくされたる六天山ろくてんさんさい塞さいの地下巢窟そうくつだとは知らなかつた。「頭目。牛丸平太郎をつれてまいりました」

若い男は、頭目四馬剣尺が待っている大きな部屋へ少年をつれこんだ。

牛丸少年は、そこではじめて頭目なる人物を見た。

華麗に中国風に飾りたてた部屋の正面に、一段高く壇を築き、

その上に、竜の彫りもののあるすばらしい大椅子に、悠然と腰を下ろしているあやしき覆^{ふくめん}面の人物は、四馬頭目にちがいなかつた。

その左右に、部下と見える人物が、四五名並んでいた。秘書格の木戸の顔も、それに交っていた。机博士のほつそりとした姿も、その中であつた。頭目が、覆面の中からさげんだ。

「うむ。波^{なみ}はそこに控^{ひか}えておれ。木戸。その少年を前につれてこい。直接、話をしてみる」

若い男は、入口を背にして、佇^{たたず}んだ。

木戸が前にでていって、牛丸少年の肩をつかんで、頭目の前に引立てた。

「手荒らにはしないがいい」

頭目は木戸に注意をした。

「これ、牛丸平太郎。お前にたずねたいことがあつたから、ここまでしてもらつた。これからたずねることに正直に答えるのだぞ。もしうそをついたら、そのときはひどい罰をうけるから、うそはつくなよ」

太い威厳のある頭目の声が、牛丸の胸を刺した。

牛丸少年は、だまつている。彼は、頭目の顔の前にたれ下つて
いる三重のボールがふしぎで仕方がなかつた。

「おい、牛丸平太郎。お前は、戸倉老人から黄金メダルの半分を
うけとつたろう。正直に答えよ」

頭目はそういつて、牛丸の返事はどうかと、上半身を前にのりだした。牛丸少年は、それでもだまつていた。

頭目は少年が返事をしないので、機嫌をわるくした。彼は肩をふる、
慄わせ、

「さあ、早く答えよ。お前が戸倉老人から渡された黄金メダルの半分は、どこへ隠して持っているのか」

と、声をあらくしていった。

「ぼくにものを聞きたいのやつたら、聞くように礼儀をつくしたらどうです。昨日からぼくを罪ざいにん人のようにひどい目にあわせて、さあ答えよといつても誰が答える気になるものか」

牛丸は、はじめて口を開くと、相手の非礼をせめた。

「お前から礼儀のお説教を聞くために呼んだのではない。こつちからたずねることだけに答えればよい。それを守らなければお前の氣にいるような拷問ごうもんをいくつでもしてあげるよ。たとえば、こんなのはどうだ」

頭目が、椅子の腕木のかげにつけてある押おし釦ボタンの一つをおした。すると天井から、鍋なべをさかさに吊つたようなものが長い鎖くさりの紐ひもといっしょに、すーツと下りてきた。そして牛丸少年の頭に、その鍋のようなものがすつぽりかぶさつた。

「あ痛ツ」鎖はぴーんと張つた。そして鍋のようなものはしずかに持ちあがつた。と、それに牛丸の頭髮が密着したまま、上へひつぱられていくのであつた。

あの手この手

「痛い、痛い」牛丸少年は宙吊りちゆうづつになった。

痛い。髪の毛がぬけそうだ。もがくと、ますます痛い。牛丸は歯をくいしばり、ぽろぽろと涙を流した。

「これは拷問ごうもんの見本だから、そのへんで許してやろう。お前たちの年頃は、わけもわからずに生意気でいけない。そう生意気な連中には拷問が一番ききめがある」

頭目は、けしからんことをいつてから、拷問をとめた。鍋のよ
うなものは、牛丸の頭髪をはなして、鎖紐と共にがらがらと天井
の方へあがつていった。

日頃はのんき者の牛丸平太郎も、この拷問には参った。このよ
うな野蛮な責め道具を、さかんに持っているのだとすれば、うっ
かりことばもだせない。

「そこで、もう一度聞き直す。戸倉老人から渡された黄金メダル
の半分は、今どこにあるのか。さあ、すぐ答えなさい」

頭目の声は、以前よりはやさしくなった。やさしくなったが、
その口裏くちうらには、「こんど答えなければ本式に拷問してやるぞ」
との含みがある。返事をしないわけにいかない。

「ぼくは正直にいいますが、戸倉老人だの黄金メダルだのといわれても、何のことやら、さっぱり分りまへん。これはほんとです」

「なにイ……まだうそをつくか。それなれば——」

「いくら拷問されたって、今いったことはほんとです。今いうたとおり、なんべんでもくりかえすほかありまへん。それとも、ぼくからうそのことを聞きたいのやったら、拷問したらよろしいかな」

しやべっているうちに牛丸はしやくにさわってきて、又もやいわなくてもいいことまでいってしまった。

「知らないとはいわさん。それでは、証拠をつきつけてやる。戸倉老人をここに引きだせ」

頭目の命令によつて、戸倉老人がこの部屋へつれてこられた。車のついた椅子にしばらくつけられていることは、この前と同じだ。ひげ面をがつくり垂^たれて目を閉じている。

戸倉老人の椅子は、頭目の前で、牛丸少年といつしよに並べられた。机博士がつかつかとやってきて、戸倉老人を診察した。それはかんたんにするだ。机博士は自席にもどる。

「牛丸少年。お前の前にいるのが戸倉老人だ。この老人なら見おぼえがあるだろう。生駒の滝の前で、お前はこの老人から何を受取ったか。それをいっておしまい」

「この人、知りません。今はじめて会った人です」

牛丸は、そう答えた。彼は生駒の滝の前に倒れていたのがこの

老人かもしれないと思った。しかしあのときは、顔をよく見たわけでない。ヘリコプターから機銃掃射が始まったので、すぐ柿の木へかけあがったわけである。

「お前はどこまで剛情なんだろう。そんなに拷問されたいのか。それでは」

「待つて下さい。ほんとにぼくは、この人を知りませへん。うそやありません。この人に聞いてもろうてもよろしい」

牛丸少年は重ねて同じ主張をした。

戸倉老人は、さつきから下を向いたままで、目を開かない。牛丸少年の顔を見ようとしてもしないのであった。

老人の心の中には、今はげしい苦悶があった。それは今彼のそ

ばにいる少年が、春木清にちがいないと誤解していたからだ。死にゆく自分を介抱かいほうしてくれた親切に、あの黄金メダルを少年に贈ったが、それが崇たたつて、少年はこうして四馬剣尺のために自由を奪われ、ひどい責めにあつていと思えば、老人の胸は苦しさに張りさけんばかりであつた。老人は、この気の毒な少年の顔を一目でも見る勇気がなかつた。少年に何とあやまつてよいか、老人の立ち場はひどく苦しいのであつた。

「剛情者ごうじょうものが二人集つた」

と頭目は牛丸や戸倉老人のことをいつた。

「よし、それでは、のつぴきならぬ証拠を見せてやろう。おい波、あの写真を持ってきたか」

すると戸口に立っていた波が、ポケットから数葉すうようの写真をひっぱりだして、頭目のところへ持ってきた。

「ふうむ。これで見ると、あのときお前は現場にいた子供にちがいない。これを見よ」

頭目は、写真を牛丸に手わたした。

牛丸は、それを見た。そしてどきんとした。彼が生駒の滝の前まできたとき、ヘリコプターがまい下ってきたので、おどろいて柿の木にのぼった。そのときの彼の姿が、はつきりと撮影されているのであった。写真の中には、彼の顔をいっばいに引伸しうつしてあるものもあった。それを見ると、これは自分ではないということができないほど、はつきりしていた。

「どうだ。その写真にうつっているのはお前だろう。お前にまちがいなかろう」頭目は、こんどはおそれ入ったかと牛丸少年の面をむさぼるように見つめる。

「これは、ぼくのようです」

牛丸は、あっさりとしてそれを認めた。

「しかし、この柿の木にのぼっているのがぼくだとしても、ぼくは誰からも、何ももらいません。ほんとです」

戸倉老人が、このとき薄目うすめをあいた。そして牛丸少年の顔を、さぐるようにそつと見た。

（おお……）老人の顔に、狼ろうばいと喜びの色とが同時に走った。

（ああ神よ）老人は口の中で唱となえると、再びがっくりとなつて椅

子にうなだれ、目を閉じた。老人は、そばにいる少年が、春木清ではないのを知って、いままでのはげしい悩みなやから急に解放されたのであった。

そのとき頭目の、怒りにみちた声がひびいた。

「なんとという手際のわるいことだ。調査不充分だぞ。責任者は処し罰よぼつされる」

左右をふりかえって、頭目は部下を叱しかりつけた。

「この剛情者二人は、当分あそこへ放りこんでおけ」

そういい捨てて、頭目はうしろの垂れ幕たをわけて、その奥に姿を消した。異様な背高のつぽの覆ふくめん面巨人だ。牛丸少年は、感心して、頭目のうしろ姿を見送った。

（あの覆面の下に、どんな顔があるのか。早く見てやりたいものだ）

彼はこわさを忘れて、好奇心をゆりうごかした。

ばんこくこつとうしょう
万国骨董商

ここで話は、春木少年から姉川あねがわごろう五郎の手へ渡った半月形の黄金メダルの上に移る。

今、姉川五郎のことをくわしくのべるにあたるまい。なぜなれ

ば、彼はひどく酔払っていて、どうにもならない。彼の服装は、ぼろぼろ服と別れて、りゆうとした若い海員姿に変わっている。よほどたんまり金がいっぱいと見える。

彼がお稲荷いなりさんの境けいだい内の木の根元から掘りだした半かけの金き属片んぞくへんは、たしかに黄金製であつたのだ。彼はそれを、海岸通かいがんどお

りからちよつと小路にはつたところにある万国骨董商チャンフー号に売つたのである。主人のチャン老人は、孔子こうしのように長い口ひげあごひげをはやして、トマトのように色つやのよい老人であつた。老人は、姉川が持ってきたメダルを二万円で購入といつた。姉川はそれを聞くと十万円でないといやだといつたが、結局三万五千元でチャン老人は買い取つた。

大金をつかんで、うちようてん宇頂天てんになつて店をでようとする姉川に、うしろから老商チャンは声をかけた。

「こんなにかけないで、丸々満足なのがあつたら四割がたええ値で買いまつせ」

姉川は、ふふんと笑つたまま、店をでていった。

「ふふふ。まるでただのようなもんや。つぶしても十二万円には売れる。しかし惜しいもんや。らんぼうなやり方で、半分に切斷しよつた。中まで黄金かどうか見るつもりやつたんやろ」

老商はひとりごとをいいながら、黄金メダルをてんびん天秤の皿からおろし、こんどはそれを店のかざりまど飾窓の中にあるガラス箱の棚の一つの上ののせた。そのそばには、はんぱになつた貴金属製の装

身具が、所もせまく並べられてあつた。片っぽだけのひすいの耳飾りや、宝石がなくて台ばかりの金色の指環や、数の足りない真珠の首飾、さてはけばけばしい彫刻をした大小いろいろの指環や、古色そう然とした懐中時計をはじめ、何だか訳の分らない細工さいくも物や部分品が、そのガラス箱の中にひしめきあつていた。

それは、姉川五郎が黄金メダルを売りとばしてから三日目の昼さがりのことだつた。

その日は、ふしぎに例の三日月形の黄金メダルが客の目を吸いつけた。結局、その日黄金メダルにさわつたお客の数は三名であつた。

最初の客は、意外な人物、立花カツミ先生であつた。

その日、立花先生は、新しい体操の実演と打合会のために海岸通りの扇港せんこうビルの講堂で午前中を過した。それがすんで、外へでたが、そこで金谷先生といっしょになり、元町もとまちの方へ抜けて学校へもどることになった。そのとき万国骨董商チャンプーの店の前を通りかかったのである。

はじめ、金谷先生がその飾窓の前に足をとどめた。先生はめつたにこんなところへこないの、ガラス戸の中におさまっているいろいろの商品をも珍らしくながめた。立花先生の方は、そんなものにあまり興味がないらしく、すこし迷惑そうな顔で、金谷先生のうしろに立っていた。

その金谷先生が笑いだした。

「はははは。この店は、がらくた店なんだよ。ちよつと見かけはいいが、ろくでもないものばかり並べてある。あれなんか、金貨の半かけだ。金貨の半かけはおかしい。金貨にしては大きいからメダルかな。とにかく半かけでは買い手もあるまいに……」

立花先生の顔が、飾窓へよつてきた。

「立花先生。ほら、あそこにある金貨の半かけみたいなもの、あれはメツキですか、それとも本物の金ですか」

「さあ……」立花先生は、かすれたように声をだした。

「あれがもし本物の金だったら、あれだけあれば、うちの母のいれ歯もすつかり修理することができんだがなあ」

「もう、いきましようよ」先生二人は、老商チャンの飾窓から離

れた。そしてにぎやかな元町へでた。

半町ばかり歩いたときに、立花先生は金谷先生に、

「わたくし、忘れていた用事を思い出しました。これからちよつ
と行って参りますから、ここで失礼いたしますわ」

といった。そして二人は別れた。

立花先生は、すたすたとうしろへ戻つた。そして先生は例の方
国骨董商の店へはいつた。老主人チャンは、籠かごの小鳥えさに餌をやつ
ていたが、店の方をふりかえつて、びっくりした。珍らしい客きやく
人じんである。

「なにをお目にかけますようかな」

チャンは、もみ手をしながら、首をさげた。首を下げながら、

美しい客の面おもてから目を放さなかった。

立花先生は、黄金メダルの半ぺらを見せてくれといって、手にとってよく見た。それは先生の氣にいったようであった。そこで値段を聞いた。

「さよう。あんたさんのお望みですさかいに、大まけにまけまして、二十万円ですな。あれは純金に近いものでな、そのうえ、えらいゆいしよ由緒のあるもので、二十万円は大勉強だつせ」

二十万円だという。三万五千円で姉川五郎から買ったものが六倍の値段でふっかけられたのである。

「二十万円ですか。高いわねえ」

「それだけの値打は、十分におまんねん。その道の者なら、よう

知ってます」立花先生はしばらく唸うなっていたが、やがて老商チャンにいった。

「わたくし、ここに二十万円のお金を持っていないのです。それで今手つけ金として二万円おいてまいります。これから家へかえって、のこりの十八万を持ってきますから、それをわたくしに売ったものとして下さい」

「へえーッ。どうもありがとうございます。あの、二十万円で買いますか。よろしおます。二万円のお手つけ金。ここへちようだいいたしましょう」

チャン老人は、自分のおどろきを隠すのに骨を折った。十五万円ぐらいに値切るかと思いの外、いい値の二十万円で買うという

のだ。そんなことなら、もつと吹っかけておけばよかった。こんな質素ななりをしていた婦人のことだから、二十万円だといえ、びつくり仰天して、すぐさようならと店をでていくかと思いの外、とんでもないちがいだった。

その婦人客がそそくさと店からでていったあと、チャン老人は、黄金メダルを元のガラス箱の中に返した。

あとの二人の客

老商チャンは、またもとのように小鳥の籠に近づいた。

そして彼のかわいがついている小鳥に、餌をあたえはじめた。それが大方終りに近づいた頃、

「はい、ごめんよ」と、店へはいつてきた男があつた。背の高いりっぱな人物だった。日本人のようであり、また外人のようにも見える。

この紳士こそ、四馬剣尺の部下として重きをなす机博士その人であつた。

「ご主人。そのガラス箱の中にはいつている金貨の半分になつたようなものを、ちよいと見せてもらおう」

博士は、長い手を延して、ガラス箱の棚を指した。

「ああ、これですか」

老商チャンは、それを取り出して客に見せた。チャンは、立花先生と売約ばいやくが成立したことを忘れていたような態度で、気軽に三日月形の黄金メダルをだしてみせたのである。

「これはおもしろいものだ。惜しいことに半分になっている。ご

主人、これは本物のゴールドきん（金）かね」

「純じゆんきん金に近い二十二金ですわ」

「ふふん。で、値段はいくら」

「あまり売れ口がええものやないさかい、まあ大まけにまけて三十万円ですな」

「三十万円！ あほらしい、そんな値があるものか。ご主人、十

五万円ではどうだ」

「あきまへん。三十万円、一文も引けまへんわい」

「そうかね。それじゃこれから三十万円、なんとかして集めてこよう」

机博士はそういって、チヤンの骨董店をでていった。

その博士は、店先から五六歩離れると、肩をすくめて、ふふんと笑った。

「あの慾ばり爺め、まさかおれが、あの黄金メダルの裏表をあの店の中で、写真にとつてしまったことに気がつくまい。ふふふ」

そういって、机博士は、オーバーの釦ボタンに仕掛けてある秘密撮影用の精巧な小型カメラを、服の上から軽く叩いた。博士らしい早は

業^{やわざ}であつた。

「……だが、あの黄金メダルがあそこに売りにでていることを、頭目に知らせたものか、それとも何とかして、おれが手に入れておいたものか、さて、どっちにしたものだろうなあ」

博士は、海岸通りの方へ、長いコンパスで歩いていった。

第三の客がきたのは、それから三十分ばかりあとのことであつた。

その人は、外国の船員の服装をつけていた。髪も瞳も黒くて、日本人のようであつたけれど、顔色の赤いことや鼻柱の高いことなどから見て、スペイン系の人のようであつた。彼の顔立ちは整^{ととの}つていたが、どうしたわけか、おそろしい刀傷のあとが、額の上

から左眼を通り、鼻筋から、唇までに達していた。ものすごい斬り傷きずであつた。しかしその傷は、光線が彼の顔の上に、或る方向あから照らしつけるときに限り、非常にものすごく見えた。

「その半分のメダルを見せて下さい」

彼はおぼつかない英語で、そういつた。

老商チャンは、客よりは上手な英語で応対した。彼は、今日はこの黄金メダルに、妙に人気が集つているのに気がついて、上機嫌であつた。それと共に、彼はゆだんをしなかつた。

刀傷のある船員は、黄金メダルを何十ぺんとなく裏表をひつきりかえし、またチャンからかくだいきよう拡大鏡を借りて、念入りに全体をしら検べてみたり、てのひら掌にのせて重さを測つたりした。そのあとで、

「これいくらで売りますか」と、老商にたずねた。

「四十万円です」チャンは、こういうのは金持ではないから早く追おっばら払うにかぎると思つて、かんたんに返事をした。

「四十万円ですか。私、千二百ドルで買います。千二百ドルなら五十万円以上にあたります。あなた、いい商売します」

客はそういつて、ポケットから米貨の紙幣をチャンの前へ並べだした。チャンは、近頃こんなにびつくりしたことはない。

「待つて下さい。この品物は、実はもう売約ができていまして、さしあげかねます」

「いくらで売約しましたか」

「それは、あの……」老商チャンは、まさか正直に二十万円とは

いいだせなかつた。

客は、紙幣を並べおえた。

「私、五十万円に買う契約、さつき、あなたとしました。私、買います。五十万円の高値でこれを買う人、私より外にありません」
「よろしい。売りましょう」

チャンは、ついにそういった。二十万円に売るよりも五十万円に売った方が二倍半の大もうけだ。売約したあの婦人には、手つきの二万円の外に、あと五千円か一万円つけて返せば、文句はないだろう。そう思った老商チャンであった。

客は、黄金メダルの半ぺらを持って、店をでていった。チャンは、受取った紙幣をもう一度数えるのに熱中していた。

それから七八分あとのことだったが、万国骨董商チャンフー号の店先を通りかかった一人の少年が、不意に立ちどまって、さげび声をあげた。

「うわーッ。これは血やないか。店の奥から、えらいこと血が流れてきよるがな」

その声に、近所の人たちがおどろいてとびだしてきた。そしてチャンの店内へはいつて、老主人の名を呼んだ。

チャンの返事はなく、ただ籠の中で、小鳥がチチチと鳴いていた。

「どうしたんやろか、チャンさんは……」

「あつ、こんなところに倒れている」

店の奥に、老商は朱あけにそまって倒れていた。心臓の上にピストルで撃つたらしいひどい傷あとがあった。そしてそのまわりには、服の上に焼け焦げが丸くできていた。もちろんチャンは絶命していた。誰が、いつの間に、老商をこんなに冷い死骸しがいにしてしまったのであろうか。

迷宮めいきゆう入りか

かわいそうな万国骨董商チャン老人殺しのニュースは、たちま

ちこの港町のすみずみまでひろがった。

「なんというむごたらしいことをする犯人だろう。あの老人は家族もなく、さびしく小鳥と住んで、あの店をやっていたのに、ああ気の毒だ」

老人を見知っている人々の中には、こういつてその死をいたむ者もいた。

「チャン爺じいさんは、あれでそうとうなもんだよ。こつちが売りに持っていた品物は二束にそくさんもん三文に値ぎりたおす。それをあとで磨きにかけて、とほうもない高値で、外国人などに売りつけるんだ。足もとにつけこむのは、得意中の得意さ。あんまりもうけすぎるから、こんどみみたいな目にあうんだ」

そういつて、にくまれ口をきく者もいた。

「いや、それは商売上手しょうばいじょうずというものだ。そんなことでなにも爺さんは殺されることはないんだ。ああして殺されたのは、爺さんがひどいこととして集めた宝石の中に、おそろしい呪いのろのかかっているダイヤモンドがあつたんだ。それは元、インドの仏像ぶつぞうのひたいにはめこんであつたのを、ある悪い船のりがえぐり取つて、盗んでいった。そしてそれをチャン爺さんに売りつけた。するとインドの高僧こうそうが船のりに化ばけてはるばる取返しにきたんだ。爺さんはすなおに返さなかつたもんだから、あのようにな、えいツと刺し殺された」

「ちがうよ。ピストルで撃たれたんだ」

「あ、ピストルか。ピストルでもいいよ」

「ほんとかい、その話は」

「つまり、そうでもあろうかと、わしは考えたんだがね」

「なんだ。ひとが事件に熱中しているのをいいことにして、うまくかついだね」

「とにかく、あの爺さんは、叩たたけばほこりがでる人物だ。犯人は永久に分らないよ」

たしかにそのとおりで、犯人の目星めぼしがさつぱりつかないので、この事件を担当している、秋吉警部あきよしけいぶはいらいらしていた。

彼は、チャン老人の絶命の三十分あとへ現場へついて、さつそく捜査の指揮をとったのであるが、血の流れている店内は、事件

発見者の少年のしらせで駆けつけた近所の人たちによって、すっかり踏みあらされていた。犯人をつきとめるための証^{しやうこ}拠が、これではつかめない。警部は困ってしまった。

それに、チャン老人は、店内にひとり住んでいたもので、当時の店内の様子を証言する者がいなかった。向う三軒両隣はあるけれど、今日はチャン老人が殺害されると分っているなら、老人の店に出入りする人物に注意を払っていたであろうが、そんなことはあらかじめ分っていなかったので、誰も正確に出入りの人物を証言する者がなかった。おそらく犯人は、そういう事情をのみこんでいて兇^{きやうこう}行したのであろうと、秋吉警部は考えた。

店内をしらべて、何が盗み去られたかを調査した。

その結果が、またはつきりしないのであつた。なにしろたくさんのこまごました物がある。その品物の目録もくろくなどはなかつたから、何と何とがなくなつたんだか分らない。

金庫は閉つていた。この中を調べたが、これもまたはつきり分らない。金庫の中には、日本の紙幣やアメリカの紙幣などがしまつてあつた。これだけが有金ありがねせんぶ全部であつたのか、それとも犯人はその一部を盗んでから、金庫を閉めて逃げたのか、どつちとも分らなかつた。

かれ秋吉警部には興味の無いことであつたが、読者には興味のあることがらを、ここで一つ述べておこう。それはアメリカの紙幣で千二百ドルがそっくりそこに残つていたことである。これは

犯人がどういう種類の人物であるかを判断するのに、一つの参考となる。——秋吉警部は、気の毒にも、そのような資料をつかむ機会にめぐまれていないのだ。

そこで警部の注意力は、もつぱらチャン老人の致命傷ちめいしやうと彼の死んでいた場所とその身体の恰好かっこうにこそがれた。

ピストルで心臓のまん中を見事に撃ちぬかれたのが、老人の死因だった。老人は声もたてずに死んだのであろう。

ピストルは老人の胸に向けられ、その銃口は老人の服にびつたりとふれていたにちがいない。その状況で、ピストルは発射されたのだ。だから銃口のあたっていた服には穴があいており、その穴のまわりの服地は、焼やけ焦こげになっていた。

ピストルの弾丸^{たま}は、背中をうちぬき、うしろの壁かざりをつきぬけ、壁にめりこんでいた。それを掘りだして調べてみたところ、そのピストルは、よく普通に見かけるブローニングやコルトのものではなく、口径^{こうけい}のずっと小さい特殊のものだった。それは多分ピストルの形をしないで、他の物品に似せて作つてあるもののように思われた。たとえば万年筆の形をしたピストルだとか、扇子^{せんす}の形をしたピストルだとかを、暗殺者はよく持っているが、そんな風なものにちがいない、そういう物品に似せるためには、どうしても弾丸の口径を細くしなければならぬ。自然^{しぜん}、火薬も少量しか使えないので、そういうピストルは、殺す相手の身体にぴったりとつけて発射しないと、弾丸が身体の中へはいらない。

「犯人は、ただもの只者じやない。チャン爺さんを殺すことなんか、にわとり鶏の首をしめるほどにも感じなかつたんだらう」

警部は、そう思つてりっぜん慄然とした。

老人は、帳場の台をへだてて、客と向いあつていたらしい。それから老人は、奥へゆこうとして身体をすこし曲げた。そのときすばやく犯人が握つているピストルが老人の心臓を服の上からねらい、ただ直ちに引金がひかれたのにちがいない。老人の死顔には苦悩のあとも恐怖の表情もなく、おだやかな顔であつた。そしてそのままそこに倒れると傷口からは血がとめどもなくふきだし、ついに店前まで流れていったのだと思われる。

それから犯人はどうしたか。それがさっぱり分らない。何か目

星をつけてきたものがあって、それを取出して、すばやく逃げうせたものか、それとも老人を斃たおしただけで、すたこら逃げだしたもののか、なんとも分らない。このへんで秋吉警部の捜査はゆき詰つてきたのであつた。

しかたがないので、警部は、各署や水すいじょうしよ上署までに通告して、チャン老人殺しに関係あるあやしい人物があつたら知らせてもらいたいとたのんだ。こんな方法では、運をたのむようなものだ。しかし証拠物が集らないし、事件の目撃者もあらわれないのだから、こんなことでもする外ほかなかつた。

水上署には、外国船員にも気をつけてくれるように特に依頼した。だが、外国船員にあやしい者があつても、これを検挙するま

でに持つていくことは容易なことではなかった。

秋吉警部はだんだんやつれていった。そして事件は迷宮入りらしく思われてきた。

もしも、チャン老人が殺される日、あの店をたずねた客たちが名のつてでるなら、警部は有力な手がかりをつかんだであろう。しかし誰も名のつてでるものはなかった。むりもない。かかりあいになるのを恐れてのことだ。

かなや
金谷先生しやべる

海岸通り よこちよう 横丁の老骨董商殺しのニュースは、その翌朝には、新聞記事になっていた。

春木少年や牛丸少年の組をあずかっている金谷先生も、この新聞記事を読んだ。そしてすぐ気がついた。

「ははあ。あの店だ。昨日 きのう 飾 かざり 窓 まど をのぞきこんだが、金貨の割れたのを、れいれいしく飾ってあった、あのがらくた古物商だ。

あの家の主人が殺されたんだな。それを分つていれば、もつとよく顔を見ておくんだったのに」

と、先生はすこしばかり残念であつた。先生は登校すると、この話をとくいになつて教員室にしゃべり散らした。

「白いひげを長くたらしめた爺さんなんですよ。いかにも小金をためているという風に見えましたね。そういえば、福々ふくぶくしい顔な
んだけれど、どことなくきついところがあつたな。やっぱり自分
の悲惨な運命が、人相にあらわれていたんですよ」

こんな風に話すものだから聞き手の先生がたは、もつとくわしいことを聞きたがつた。

「いや、それだけのこと。ぼくは、中へはいつて見ようかと思つたんですが、連れの立花たちばな先生がいやな顔をしているので、それはやめましたよ。あのときはいつていれば、もつと諸君におもしろい話ができただがなあ」

金谷先生がそういうと、きき聞き手の先生たちはみんな笑つた。

そこへ立花先生がはいつてきた。

「まあ、みなさん、なにをそんなにおもしろがっていらつしやるんですの」と、にこにこしてたずねた。

「あはは。金谷先生が、例の殺されたチャンという万ばん国こく骨こつ董とう商しょうの店を、昨日のぞいたというんです」

「まあ、いやなことすわ」

と、立花先生は、美しい眉まゆをひそめた。

「金谷先生は、あの店主が殺されると分っていたら、店の中へはいつて、しげしげと見てくるんだったなどというもんだから、みんなで笑っていたところなんです」

「気味のわるいお話は、もう聞きたくありませんわ」

「金谷先生のいうことに、連れの立花先生がうしろにこわい顔をして立っているものだから、ついにはいるのをあきらめたといつてますよ」

「えッ」と立花先生はかたい顔になつて金谷先生の方に向き直つたが、すぐ顔をやわら和げ、

「金谷先生。よけいなおしやべりをなさるものじゃありませんわ。かかりあいがあると思われて、警察へひっぱりだされるようなことがあつたら、つまらないじゃありませんの」と、かるくたしなめた。

「まいった。これは一本まいりました。今までのおしやべりは取消しだ」

と、金谷先生はすっかり悄気しよげてしまった。それがまたおかしくてたまらないと、同僚たちは腹をかかえて笑った。

金谷先生は、てれくさくなって、ひとりその座を立つて、運動場へでていった。運動場では、早く登校した生徒たちが、元気にはねまわっていた。

「金谷先生」先生は、自分の名前をよばれて、はつとわれにかえり、その方を見た。

四人の少年が、そろって、前へ近づいた。その中には春木少年の顔が交まじっていた。その外に、小玉君こだま、横光君よこみつ、田畑君たばたの三少年がいた。

「どうしたの。いやに改まっているね」

と、金谷先生が受持の学童の顔を見まわした。

「先生。ぼくたち四人は、少年探偵団を結成しようとして約束したんです。それで、先生に少年探偵団の顧問こもんになっていただきたいのです」少年たちの話は意外な申入れだった。

「少年探偵団だって。それはいつたい、なんの目的で結成するかね」

「まず第一の目的は、ぼくたちの級友である牛丸君を一日も早く救いだしたいことです」

「それは警察がやってくれる。君達が手をださなくてもいい」

「でも、警察だけにまかせておけないと思うんです。なにしろ、今になっても、警察はすこしも活動をしてないようですからね」

「それは相手が手ごわいから、準備のためにそうとう日がかかるんだらう。君たちがでかけていってもだめさ。相手が強すぎるからね。返り討ちになるよ」

先生は、少年たちが、きつと落ちこむにちがいない悪い運命を思つて、その企くわだてに反対した。だが、少年たちは、そんなことでは尻しりごみしなかつた。春木少年は、言葉をつづける。

「第二の目的は、世界にまれな宝さがしに成功することなんです」
「なんだつて。世界にまれな宝さがしとは……」

「先生。牛丸君がかどわかされたことも、実はこの宝さがしに係けいがあると思うんです。そしてほんとうは、ぼくが連れていかれるはずのところ、賊ぞくはまちがつて牛丸君を連れていったんだと思

うんです」

「君のいつていることは、さっぱりわけが分らない」

「それはこの事件のはじまりからお話しないと、お分りにならないのです。実はこの前、牛丸君とぼくと二人でカンヌキ山へのぼりましてねえ……」と、それから生駒いこまの滝たきの前で戸倉老人にめぐりあい、黄金おうごんメダルの半かけと絹地きぬじにかいた説明書をもらったことから、メダルを失ったことまで、残りなくすべてのことを金谷先生にうちあけた。

先生はおどろいて、はじめは「ほう」とか「おもしろいね」といつていたのが、終りには腕をくみ、身体をかたくして、「ふん、それからどうした」とか、「それはたいへんだ。で、どうした」

とか、さかんに力んでたずねた。

「これが焼け残った絹のハンカチの一部です」

と、春木少年が金谷先生の手になんかを渡したとき、先生の緊張は頂ちようてん点に達した。

「なるほど。これはほんものだ。えらいことになったものだ」

先生はそこで頭をひねって、しばらく沈黙したが、やがてあたりへ気をくばり、低い声でいった。

「春木君。先生は昨日、君がとられたという黄金メダルの半ぺららしいものを、海岸通りの横丁の骨董店の飾窓の中に見かけたよ」

「ええッ。先生、それはほんとうですか」

「ほんとうかどうか、とにかく君が今話をしたみかづきがた三日月形の黄金メ

ダルというのによく似ていた。君の話では、お稲荷いなりさんのお堂に住んでいた男が、あの店へ売ったんじゃないかな」

「あッ、それにちがいません。先生、その店はなんといい店ですか。どこにありますか。教えて下さい。これからぼくはすぐ行って、取返してきます」

こんどは春木少年の方が、大昂奮してしまった。

「待ちたまえ、春木君。その店の老主人は昨日何者かのためにはピストルで殺されてしまったんだよ。今朝の新聞を見なかったかね」

「ああッ。そうか。すると今朝の新聞にでかでかと大きくでていたチャンフー号主人殺しというのはこの店ですね」

「そうなんだ。だからね、今はその筋で殺害犯人を見つけようと

鶉うの目鷹たかの目でさがしているから、君なんかうつかりいくと、たちまち捕えられて、容疑者になつてしまふよ。そしたら、いつ娵し婆やばへでてこられるか分りやしない」

先生がおそれるわけは、もつともであつた。しかし春木少年は、警察にこの話をしてもいいと思つた。そして店の飾窓にあつたその黄金メダルを、自分にかえしてもらふには、早く話をした方が有利だと考へた。

この考へを話すと、先生は困つてしまつた。

（しまつた、とうとうまたおしやべりをしすぎた。さつきあんなに立花先生からいましめられていたのに、それを忘れて又しやべつた。下手をすると、自分は参考人か容疑者ようぎしやとして警察へ引つ

ばられるかもしれん。これは困ったことになった。先生の悄気かたはひどかった。

きびしい尋問じんもん

「頭目かしら。いったいどこへ行ってたんです。この二日というものは、頭目を探るので、大骨を折りましたぜ。しかも連絡はつかないじまい。骨折り損のくたびれもうけです」

四馬劍尺しばけんじやくが、どつかと腰をかけた頭目台とうもくだいの前へ行って、こ

の山寨さんさいの番頭格の木戸が、うらみつらみをのべたてた。木戸は、よほど骨を折ったものと見える。

「ふふん」四馬は、かるく笑っただけであった。

「こんどからは、なんとかたしかな連絡の道を用意しておいていただかないと、万一のときにわしは、この山寨を持ち切れませんよ」木戸は久しぶりに腹を立てているらしい。

「大丈夫だ。万一のときは、おれがとびこんでくるから、心配はいらねえ」

「こつちから知らせたいことがあっても、それができないとすれば、結局頭目の大損害じゃないですか」

「すると、なにかおれに知らせたいことがあったんだな。それは

何だい」

「わしではないんです。机ドクトルが、何か見つけてきたんです。それが三日前のことで、ドクトルは町へいったんです」

「フーン。三日前のことか」

頭目は、ベールの中で、日を逆さかにかぞえているようであった。

「チャンフー殺しのあつた日のことだな」

「そうです。あの日の午後、ドクトルは息せき切ってここへ戻ってきましたな、『頭目はどこにいる』と食いつくようにいうんです。どうしたのかと訊くと、『一刻も争うことだ、頭目の耳に入りたいことがある』という。なんだと聞きかえすと、『黄金メダルの半ペらが、海岸通りのある店の飾窓に売りにでている』とい

うんです。わしはおどろきましたね」

「それからどうした」頭目は気色ばんで、その先の話をさいそくした。冠かんむりの下のベールがゆらゆらと動く。

「それから頭目探しです。みんなをかりたてて、あらゆるところを探しまわりましたね。ところがだめなんです。机ドクトルからは、『まだか、まだか』と、きついさいそく。困りましたね。それで三日間、得うるところなしです」

「ばかだなあ。そんなものが見つかれば、なぜすぐに買いにいかないんだ」

「おつと。それはいわないことにしてもらいましょう。この山寨では、四馬剣尺頭目が命令しないことは何一つ行えないきびしい

おきてになつてゐるんです。これは頭目、あなたが作ったおきてですよ」

「よし、そんならよし。じゃあ、机博士をここへ呼んでくれ」

「はい」木戸がでていくと、やがて机博士がいれかわつて細長い身体をこの部屋にあらわした。彼は木戸とちがつて落ちつきはらつていた。頭目の前までいって、卓たくをへだてて、四角い椅子に腰を下ろした。

「ご用ですかな」

「今、木戸から聞いたが、三日前に、海岸通りのある店で、黄金メダルの半ぺらを見つけたつて」

「偶然に見つけましたよ。さつそく頭目に知らせようと骨を折つ

たんですが、残念にも、頭目に運がなかつたな」

「本物かい」

「さあ、私は本物と鑑定しましたね。それも頭目がこの間まで持っていた半ぺらではなくて、その相手になる半ぺらでしたよ。三日月形をして、がいこつ骸骨の顔が横を向いているようでした」

「お前は、それを手にとつてみたのか」

「手にとつてみましたとも。万一、にせ物では頭目に知らせてお叱りをこうむるばかりだから、てのひら掌てのひらにのせて比重をあたつてみました。たしかに純度の高い黄金でできていることにまちがひなし。そこで値段を聞いたたら、三十万円というんです。そのいんごうじじい因業爺いんごうじじいのチャンフーという主人がね」

「三十万？」頭目はちよつとことばをとめたあとで「三十万円にちがいないか」

「ちがいなし。しかしなぜ頭目は、そんなことを聞くんです」
「とほうもない高値だから」

「ふふン」と机博士は、けいべつをこめた笑い方をして、

「しかしこれが例の宝庫へ連れていってくれる案内者なんだから、三十万円はやすいと思うがなあ」

「あの店の商品としては高すぎるんだ、そして君はどうした」

「どうしたもあるもんですか。さつそく山寨へかけ戻つて、頭目に知らせるよう大さわぎを始めたんです。いったい頭目は、どこへいったんです」それに答えないで、頭目はぴしやりとことばを

机博士に叩きつけた。

「お前は、チャンフーの店前で、なにか手品をやりやしなかつたか」

「手品ですつて。とんでもない。私は、手術ならやりますが手品はやりませんよ」そういつて机博士はうそぶいた。

二人の間に、しばらく沈黙があつた。

と、とつぜん博士は口を開いた。

「チャンフーを殺したのは私じゃありませんよ。あんな老ぼれを殺す理由なんか、私にはありませんからね。……それより頭目。

早くあの店へいつて黄金メダルを持ってきたらどうです。頭目が今まで持っていたのは猫ねこおんな女にに奪われちまつたんだし、さびし

いですからねえ。あれが一つ手にはいれば——」

「やめろ。あの店にはもう黄金メダルはないんだ。チャンを殺した犯人が持っていったのか、それとも……」

「それとも」

「まあ、それはいうまい」

「頭目。はつきりいつて下さい。私が盗んできたとしてもいうのですかい」

「おれは知らない。今日までかかって、いろいろと調べたが、手がかりなしだ」

頭目は、いつになくがっかりした調子でいった。

監房^{かんぼう}生活

その後、牛丸平太郎少年は、監房の中におしこめられたままになつていた。あれ以来一度も頭目の前にもひきだされないうし、またその手下^{てした}のためいじめられもしなかつた。むしろ牛丸少年は、山寨の人々から忘れられたようになっていた。

たいくつで、やり切れない牛丸少年であつた。三度の食事が待ちどおしかつた。その食事は、口がきけず耳のきこえない男が、きちんきちんとはこんでくれた。「小竹^{こたけ}さん」と呼ばれることもあつた。

とにかく小竹さんが顔を見せてくれるのが、牛丸少年にとって、

一日中の一番うれしいことだった。少年は小竹さんに対し、親しみの表情を示したが相手の小竹さんにはそれが感じられたことはない。いつも寝ぼけているような間ぬけ顔であった。牛丸少年は、たいくつに閉へいこう口しながら、一つの願いを持つようになった。それはいつか頭目の前へいっしょに呼びだされた戸倉老人と、話しあうようになりたいという望みであった。

あの老人も、たしかにこの地下牢のどこかの一室におしこめられているはずだった。それはいったいどこだろう。そしてどうしたらあの老人と連絡がとれるだろうか。牛丸少年はそれを宿題として考えはじめると、すこしもたいくつでなくなった。ただし、この宿題の答は、かんたんにはでてこなかった。

「戸倉老人の監房は、もう一階下にあるんだな」やつとこの答が少年の頭の中に浮かんできた。それは小竹さんが食事をはこぶときの行動で、それと察したのである。

なぜかというところ、小竹さんが食事を持ってくるときは、それを手さげ式の金属製の岡持おかもちに入れて持ってくる。そして牛丸少年の監房の前に止まって、食事をさし入れる。それから小竹さんは、ずんずん奥へ歩いていくが、小竹の足音と岡持のがちやがちや鳴る音が、やがて階段を下っていくのが分る。それから五分ほどすると、小竹さんは引返してきて、牛丸の監房の前を通りすぎると、これによって考えると、戸倉老人は、もう一階下の監房に入られているらしい。

(一階下にあのおじさんが入れられているんだったら、ぼくと話をするのはちよつとむずかしいことになる)

少年は、ざんねんに思った。

しかしなにかうまい方法を考えつくかもしれないと、その後も頭をひねって、監房の前の交通に注意を怠おこたらなかつた。

机博士が、朝早く一度、前を往復する。しかし牛丸少年のところへは寄らない。どうやら博士は、階下したの戸倉老人を診察にゆくように思われる。老人は、ずっと身体がよくないのであろう。あの日の夕方、食器を下げるために、小竹さんがまわってきた。いつものように頬ほおかぶりをし、その上にうす茶色の、かたのくずれた鳥打帽をのせていた。彼は、監房の鉄格子てつこうしをとんとんと叩い

て、牛丸少年に早く食器をだせときいそくした。

牛丸は、食器を両手に持って、入口までいった。そして鉄格子の向うに待っている人物と顔を見あわせて、おどろいた。

「しいッ」相手は、唇へ指を立てて、しずかにするようにと注意した。頬かぶりに烏打帽の姿はいつも見なれた小竹さんの姿だったが、顔はちがっていた。ひげだるまのような戸倉老人であったではないか。

「あッ、あなたは、どうしてここへ……」

「しずかに、わしは君に聞きたいことがあって、危険をおかしてここへやってきた」

と、老人はそれから岡持を床へおき、顔を鉄格子につけて早口

で牛丸君に話しかけた。そのときの話は、主に春木少年のことであった。だが老人は、彼が春木に渡した黄金メダルのことについては一言もいわなかった。老人の知りたいのは、春木君の安否であつたようである。

だが老人は、牛丸少年の話から考えて、春木少年の身の上に危険があることを悟つた。それで春木君に警告するために、なんとか方法を考えたいと、これは牛丸君にも話した。

「ぼくをここから逃がして下さい。そうすればきつと春木君に、あなたの言伝ことづてをつたえます」

牛丸はそういつた。老人は考えておくといい、その場を去つた。彼は奥へ引返し、そして階段を下りていつた様子である。

それからしばらくすると、彼はもう一度牛丸の監房の前へやつてきた。だがそれは戸倉老人ではなく、本物の小竹さんであった。牛丸は、おやおやと思つた。そして疑問が一つ、ぴよんと湧わいてでた。

（おかしいぞ。戸倉老人は、この口がきけず、耳のきこえない小竹さんに、どういう方法で話を通じて、小竹さんに変へん装そうするこゝとを承知させたのだろうか）

全くふしぎなことだ。

ひよつとすると、小竹さんは、わざとよそおっているのではあるまいか。そう思つた牛丸少年は、空からになつた食器を渡しながら、小竹さんに話しかけた。すると小竹さんは、首を左右に振り、耳

と口とを指さし「自分は口がきけず耳がきこえない」と身ぶりです語つて、すぐ立ち去つた。

「ふーン。やっぱり小竹さんは、ほんとに口と耳が不自由なのかしら」

牛丸少年は、ため息をついた。

その後も、牛丸はしんぼうづくよく、毎回小竹さんに話しかけた。だが小竹さんの態度は同じことであつた。

ところが、それから三日目に、思いがけないことが起つた。

それは夕食後、小竹さんが食器をあつめにきたときのことだつた。牛丸少年が、食べ終つたあとの皿二枚とスープのコップとを、小さい窓口から小竹さんに渡そうとしたとき、あツという間に皿

は牛丸の手をすべって——いや、牛丸少年は皿を小竹さんに渡し終ったつもりだったから、手をすべらせたのは小竹さんの方であろう——皿は少年の監房の床に落ちて、小さな破片になってとび散った。牛丸は青くなつた。今にも小竹さんから、すごい形ぎようそ相うでにらみつけられて怒られるだろうと思つた。

小竹さんは、そうしなかつた。彼はかぎをだして、監房の戸を開いた。そしてしずかに中へはいつて、破片をひろいだした。破片を岡持の中へ拾っているのだつた。牛丸はおだやかな小竹さんの態度にますます恐きようしゆく縮して、彼もまた一生けんめいになつて破片を拾つた。

しばらくしてそれは終つた。小竹さんはそのまま立ち上り、外

へでた。そして入口に錠をかけりて立ち去った。その小竹さんのおだやかさに、牛丸は始めたいへんに叱られると思っただけに非常に意外で、小さい窓口から小竹さんのうしろ姿を見送っていた。

そのときであった、彼はうしろから、かるく背中を叩かれた。

おどろいた、このときは！ この監房には自分の外に誰もいないのだ。だから少年はびっくりして、その場にとびあがったのだ。ふりかえった。

「あッ」

「しずかに！」 白いきれを頭からすっぽりかぶり、すその方まで長くひいた怪物かいぶつが、子供の声をだした。その白いきれがとれ、

中から少年の顔がでた。

「あッ、春木君！」

「牛丸君。よくぶじでいてくれたね」

「ぼくを助けにきてくれたんやな。こんなあぶないところへ、よくきてくれたなあ」二人は、ひしと抱きあい、頬と頬とおしつけて涙をとめどもなく流した。

どうして春木少年は、このおそろしい山寨にもぐりこんだのか。また、小竹さんが、なぜ春木少年を、そつとこの監房の中へすべりこませたのか。

そのような春木少年の冒険ものがたりは、その夜くわしく、牛丸君に語られた。

また、牛丸君の家がその後、どうなっているかということや学校の話、警察の話、チャン老人殺しの話など、春木君が牛丸君のために話してやることは多かつた。

牛丸君の方でも、この山寨に連れてこられてからこつちのことについて語ることが少くなかつた。

それらのことがらの中で、読者がまだ知らない話をここで述^のべたいのであるが、今はそれができない。というのは、今ちようど、机博士の身の上におそろしい危難が迫っているからである。その方を先に記^しさなくてはならない。

畏^{わな}くらべ

黄金おうごんの糸で四頭とうりゆうの竜りゆうのぬいとりをしたすばらしくぜいたくなカーテンが、頭目台とうもくだいのうしろに垂たれている。

台の上には、頭目用の椅子が一つおかれているだけで、人の姿はその上にない。いやこの部屋には今誰もいない。

垂れ幕の奥では、かすかな音が、ときどき聞える。

頭目たまひめが、この夜更よふけに、なにか仕事をしているのであろうか。

もう只今ただいまの時刻は、その山塞やまづみの人々ならどんな呑のんだくれの若者ねだこも寢床ねどこについて、高いびきを一時間もかいたはずであつた。午

前三時だ。ここ山塞やまづみも、丑満時うしみつどきを越えた真夜中である。では、

誰たれであらうか。黄竜こうりゆうの奥の間で、ひっそりと物音をさせてい

るのは？

それこそ机博士であつた。

博士ただひとりだ。博士は、眉まゆをつりあげ、額ひたいに青筋あおすじを立て、真剣になつて、黄竜の間で家探やさかしをしている。

机の引出もあけた。戸棚もみんなあけて調べた。秘密の大金庫も、壁からくりだして、すっかりあけて調べた。ありとあらゆるじゆうき什器や家具を調べ、今は、壁をかるく叩かいてまわっている。どこかに彼の知らない極秘の隠かくし場所があるかもしれないと思つたからだ。だがみんな失敗だつた。

(無い。なんにも無い。黄金メダルに関するものは、こんなところへはおいておかないのかな)

博士は無念に思つて、唇をかんだ。

（たしか、この前、この部屋へ黄金メダルをしまうのを見たのだ
が……あれは、たとえ猫ねこおんな女にに奪われたにしろ、あの頭のする
どい頭目のことだから、メダルの写真とか、関係書類とかを、ち
やんと保存してあるにちがいないんだが、どうも見あたらないな
あ）

机博士は、チャンフー号の店で、秘密に撮影した三日月形の方
の黄金メダルの半ぺらの写真を持っている。もし頭目の部屋に、
頭目が猫女にとられた、扇おうぎがた形の方の半ぺらの写真を持ってい
るなら、それを手に入れたと思つた。そして両方をつきあわせ
てみるなら、この黄金メダルの秘密も解とけるにちがいないと考え

たのだ。(なにも、生命をまことにして、本ものの黄金メダルを手にいれないで、写真さえあれば、たくさんなのだ。そこに彫りつけてある暗号を解きさえすれば、大宝庫だいほうこの場所が分るにちがいない。おれは頭目やくしやなどより、一枚役者が上なんだ」と、博士は思っている。

だが、いよいよ探してみると、ここぞと思つた黄竜の間に、思う品物がないのである。博士はくやくしてならなかつた。腕組うでぐみをして考えこんだとき、

「手をあげろ。おうちやくもの横着者めと、はげしい叱り声しかが、入口の方からひびいた。いつの間にか黄竜の幕をかきわけ、四馬頭目の巨き体たいが、ながそで長袖ながそでから愛用の毒棒どくぼうをつきだしている。

「うッ！」博士は青くなつて、さつと両手をあげた。あの毒棒は、押釦ボタン一つおすと、一回に十本の錐きりが、さきにおそろしい毒をつけたまま、相手の身体にぐさりとつき刺すのであつた。その毒の調合をしたのは、机博士自身であつたから、その猛毒については誰よりも博士が一番よく知っている。だから博士が青くなつて両手をあげたわけだ。

「この間から、どうもお前の様子がへんだと思つていたが、この部屋でいつたい何をしようと思つていたのだ」

頭目は落ちつき払つた中に、憎にくしみのひびきのはつきり分る声で、博士をきめつけた。

博士は、口をかたくつぐんでいた。

「いうんだ。いわないと、こいつがとんでいく。お前がよく知っている恐ろしい毒矢どくやがくraitたいか、それともいつてしまうか」

「黄金メダルの半分の写真でもお持ちなら、ちよつと見せていた
だきたいと思つたのです。それだけです」

博士は、ついに返事をした。

「それだけだつて。ふふん」と頭目は皮肉ひにくに笑つて、

「しからは、お前はチャンフーのところから、三日月形の半ぺら
を持ってきたんだな。いや、ちがうとはいわせない。そうでなけ
れば、おれが持っていた半ぺらの方を見たいなどという気を起す
はずがない」

そうではないと、博士は一生けんめいに弁明した。だが、博士

の弁明が真剣になればなるほど、頭目はそんなことが信じられるか、とはねつけた。そしてついに、

「そうだ。これからお前の部屋へいこう。この部屋でやったおりのことを、おれはお前にやりかえしてやる。部屋のことをみなひっくりかえして、そうさが総探しをやつてやる」

「あッ、それは……頭目。許して下さい」

博士の態度が一変して、気が変になつたように見えた。が、すぐ博士は元にかえつて、そのような乱暴は思い止とどまつてくれと哀あいが願んした。

「ならん。お前の部屋へゆくんだ。先へ歩け。命令をきかねば、毒矢をぶつ放すぞ」

もう仕方がなかった。机博士は、しおしおと歩きだした。その背中に、頭目が毒矢銃をぴったりとおしつけた。

「自業自得だ。頭目をだしぬこうなんて、反逆行為だ。反逆行為の刑罰はどんなものだか、知っているだろう」

向うを向いて、重い足をひきずって進む机博士の顔には、ふしぎな笑みが浮んでいた。

（今にぬにもものを見せてくれる。その時になって腰をぬかすまいぞ。へん、おれの作った罫の中にわざわざおはいり下さるのだ。四馬剣尺の化けの皮を、今にひんむいてくれる）

博士のひそかなる気味のわるい笑いは、もちろん頭目には見えるはずもなかった。その頭目もまた、ひそかなる笑みを口のあた

りに浮べていたのだ。

（見ろ。こんどというこんどは、陰謀屋いんぼうやの机博士に致命傷ちめいしやうをくらわせてやる。きさまは、自分のわる智慧の中に、自分でおぼれてしまうのだ。それにまだ気がつかないとは、きさまもあんがい頭がよくないて）

狐きつねと狼おおかみの化かし合いだ。どつちが狐で、どつちが狼か。それはしばらく見ていなくては、きめかねる。

ついに机博士は、自分の部屋の扉を開いた。そのとき彼は、自分のうしろに異様な気配いようを感じたので、はつとしてふりかえろうとした。

「ふりかえるな。向うを向いている」頭目が大声で叱りつけた。

博士はぎくりとして、首を正面へ向けかえた。……が、今ふりむいたときにちらりと見たことだが、頭目のそばにもう一人背の高い人物がいたように思った。

「早くはいれ」机博士は背中をつかれた。

そこで室内へ足をいれた。室内は、暗室あんしつになっていた。ただ桃色ももいろのネオン灯とうが数箇、室内の要所にとぼつていて、ほのかに室内の什器や機械のありかを知らせていた。

「部屋を明るくするんだ。これじゃ暗すぎて、なんにも見えない」頭目がそういった。

(待っていました！)

と、博士は、心の中でおどりがかった。

「はい。今、明るくします。ちよつとお待ちなすつて」

「へんなまねをすると許さんぞ。おれはお前のそばをはなれないから、そう思え」

頭目が部屋の中へ足を踏み入れた。

「大丈夫です。へんなまねなんかしません。そこに油だらけの機械がありますから、けつまずかないようにして下さい。今すぐスイッチをひねりますから、ちよつと——」

博士はぐんぐん奥へはいつていった。そして壁ぎわに置いてある四角い機械のうしろへまわった。博士の顔には、またもや気味のわるい微笑が浮かんだ。

（今だ。化けの皮をはいでやるときがきたぞ。覚悟しろ）かくご

博士はスイッチを入れた。それこそこの間中から博士が考案し、組立てていた大きなエックス線装置であつた。これは広角度にエックス線を放射して、人間の身体全体を照らし、そして部屋のまんな中にぶら下げてある、幅二メートル高さ三メートルの大きな蛍けいいこうまく、光幕こうまくにその透視像とうしぞうをうつしだすようになっていた。これは、いつも覆面ふくめんをしている頭目を、エックス線で照らして、その正体を見てやろうという陰謀であつた。そして思いがけなく、早くその機会がきたのだ。頭目の方からこの部屋へ足をはこんで、はいつてきたのだ。こんないいことはない。机博士は興奮をおさえきれない。

さつと、蛍光が、幕面を照らした。

実にたくみに、頭目の全身の透視像が幕面に写った。着衣や冠の輪廓りんかくがうすく見える中にありありと黒く、むざんな骸骨がいこつすが姿たがうつしだされた。これが頭目の骨格こつかくなのだ。

「あッ」頭目は気がついた。

手にしていた毒矢のはいった棒銃をふりあげた。その恰好かっこうが、そのまま幕にうつった。おそろしい骸骨が、生きているように動き、いかりに燃えて棒をふりあげたのだ。そのすさまじい光景は、筆にも画にものせられないほどだった。

ガーン。毒矢の棒は博士の方へとんできた。と、室内の電灯が全部消えた。完全な暗黒となった。そしてつづけさまに、いろいろな器物のこわれる音がした。

机博士の声はしなかった。また頭目の声もしなかった。

博士は、おそろしいものを見たのだ。

頭目の骸骨像によつて、頭目の正体は、世にも奇怪なものであることが判明した。それはたしかに小さな男だった。その小さな男が、足に一メートル位もある高い棒をつけて立っているのだ。

その上に裾すそを高くひいた中国服を着ている。こうしてエックス線で透視してみないかぎり、頭目の秘密が明かるみへだされることはなかったであろう。

四馬頭目の正体は、小さな男だったのか。

この部屋に、このおそるべき光景を見た者が外にもう二人いた。それはその前にこの部屋に忍びこんでいた春木少年と牛丸少年と

であつた。二人はおそろしさに、もう生きた心地もなかつた。さて、まつくらがりになつたこの部屋のおさまりは、いったいどうなるのであろうか。

ひみつ
秘密の抜け穴

(われらの首領というのは、小男であつたのか！)

机博士は、その意外に心をうたれ、危険の中に、しばらくぼんやりしていたほどだ。

彼は、首領がもつとほかの人物であると思つていたので、その予想は、エックス線を首領にあびせた結果、すっかり思いちがい

であることが証明された。

(だが、どうもまだ、ふにおちないところがある。いつぞや、ひそかに懐かいちゆうでんとう中電灯を首領の顔の下に近づけて、覆ふくめん面ベールの中にある顔をちらつと見たことがあったが、あのときの首領の顔は、目鼻立のよくととのつたりっぱな顔であった。女にも見まがうほど美しい顔であったが……)

と、机博士の頭の中には、答がわり切れないで、ぐるぐる渦うずをまいていた。さつき、エックス線で首領の顔をてらしつけ、首領があつとひるむところを、すばやく前へとびだしてあのベールをかかげて、首領がどんな素顔をしているか、それをたしかめればよかったのだ。だがそれをしなかった。不覚ふかくのいたりだ。もつと

も、そんなことをすれば、首領は一撃のもとに自分を毒針どくばりでさし殺したかもしれない。これだけのことを考えるのに、永くかかっていたわけではなく、危険の下に首をちぢめている机博士の頭の中を、電光のように走った思いであつた。

がらがらツと、またもや器物がなげつけられ、机博士の頭の上に降ってくる。そして首領のあらあらしい息づかいが、だんだん近くによつてくる。

（あぶない。このままでは殺される。どうかして逃げだしたい。
穴あなぐら倉へつづくあの下り口まで、うまくたどりつけるだろうか。
下り口の戸を開くまで、死なないでいるかしらん）

博士が思いだしたのは、この部屋の東よりの隅すみに、地下の穴倉

へつづく下り口があることだった。これは博士が、他の者に見せたくない器械や材料などをかくしておくために作った秘密の物置であつて、この山寨では彼以外に知る者はなかつた。その穴倉の中には、さらに、抜け道があつて、それをくぐつていくと、山寨の外へでられるのだ。もつともそこは、けわしい崖がけの上にあつて、そこから街道へ下りるには、特別の道具がないとだめであつた。そのかわりに、このけわしい崖の上に開いた抜け道は、他の者の目につくような心配は、まずないものと思われ、机博士は十分自信を持っていたのであつた。その抜け道のコースへ、とびこみたい。下り口のところまで、無事にゆきつくかどうか。

(やつつけろ)

もうこうなれば、運を天にまかせる外ないと、机博士は決心をかためた。二カ所や三カ所に傷をこしらえるのは覚悟の上で、博士はくらがりを手さぐりで、横にはつていった。

なんでも、やってみることだ。荒れる首領の攻撃は、机博士の身体の移動のあとを追っかけてはこなかった。やっぱり、元のところに博士がかくれていると思ひ、がらがらツどすんどすんと、しきりに重いものがなげつけられていた。だから机博士は、反つて危険を抜けることができ、うれしさに胸をおどらせながら、下り口のところにはまっている揚あげ戸どをひきあけることができた。すこしは音がした。しかし室内はどんがらどんがらやっている最中であつたから、すこしぐらいの音は相手に聞えそうもなかつ

た。博士は、してやったりと、揚げ戸の下へ身体をもぐらせた。足の先に、階段がさわった。もう成功である。彼は、すっかり中へはいった。そして、揚げ戸を静かに閉めた。誰も追いつてくる様子はなかった。博士は、ほっと安心の一息をついた。

ここまでくれば、ぎやくざつしや 虐殺者の手をのがれたようなものだ、と机博士は思った。彼は手と足で階段をさぐりながら下りていった。階段を下り切った。そこに厚いカーテンが二重に張ってあった。その向こうが物置の相当広い部屋になっているのである。博士はカーテンをおして中へはいった。中は、まっくらだった。

「おやツ。今日は電池灯でんちとうが消えている」

そこには、いつもは電池灯がついていて、室内を照らしていた。

これは停電に関係なく、いつでもついている電灯であつた。それが今日は、運わるく消えている。どこか故障をおこしたのであるうか。そう思いながら、机博士は、鼻をつままれても分らない闇の中を、手さぐりで足をひきずりながら五六歩もすすんだであろうか、そのとき大きなおどろきが、彼を待ちうけていた。とつぜん彼の両の手首が、何者かによつて、ぐつとにぎられたのであつた。

「ほほほ、待っていたよ、博士さん」

闇の中に、たしかに女にちがいない声であつた。何者？

おお、
猫ねこおんな女

「誰だ、君は！」博士は度肝どぎもをぬかれて、かすれた声で、やつとこの短いことばを相手にぶつつけた。

「あたしかね。あたしは『猫女』さ。どうぞよろしく」

「えッ、猫女……」机博士のおどろきは、五倍になった。

「猫女が、なぜこんなところに——」

「大きな声をおだしでないよ。上では、あのとおり大ぜいさんが集っているんだよ」なるほど、上では大ぜいの足音がいりみだれている。きつと首領がみんなを呼び集め、姿を消した自分の行方を探しているのにちがいない。

「きゆうくつだろうが、手をうしろへまわしてもらいましょう」

猫女はおそろしく力強かった。机博士の手をかんとんにうしろへねじり、がちやりと手錠てじょうをはめてしまった。

「君は、私をどうしようというんだ」

猫女は、首領から黄金メダルの半ぺらを奪ったことがある。すると、猫女は首領の敵だ。自分も今は首領の敵になっている。それならば、猫女は自分と手をにぎって、味方同志になってもいいのだと思う。「猫女よ、なぜ私をいじめるんだ」といいたい、机博士だった。

「お前さんからもらいたいものがあるのさ。すなおに渡してくれないことは分っているから、こつちでお前さんの身体しんたい検査いけんさを行うわよ」

「なにッ。なにがほしいんだ」

机博士が不安なひびきのある声でたずねたのに対し、猫女はこたえなかつた。そしてくらがりの中で、博士の身体をしらべていた。室内には、電灯でんとうはついていないし、猫女は懐中電灯かいちゆうでんとうさえ使わない。全くのくらがりの中で猫女は、どしどし自分の仕事をすすめていく。猫女は、猫のように、くらがりの中でも目がきくらしい。それに気がついて、机博士の不安はつのがつた。

「ああ、これなのね、お前さんが鬼の首をとったように思って喜んでいたのは……」

とうとう猫女は、目的物を探しあてたらしく、博士の下着のポケットから、小さいひとまきのフィルムを取出した。

「それはちがう。それは何でもない」机博士は、最後の努力をした。だが、猫女はそのフィルムを返そうとはしなかった。そしてなお尚もつづいて身体検査をやりとげたあとで、

「さつき見つけたフィルムは、こつちへもらったよ。お前さんは器用なことをやってのける人だよ。チャンフーを殺したのも、お前さんじゃないのかい」と、博士をからかった。

「とんでもない。私がチャン老人を最後に見たときは、彼はこれから百年も長生きをするような顔をしていた。あの慾じじいばり爺を殺したのは、私ではない」

「ふん。なんとでもいうがいい。でも、あたしはチャンフーの身内でもなんでもないから、お前さんに復讐ふくしゅうしようとは思わな

い。が、お前さんがやったかどうか、神さまが知っておいでだよ。だからさ、これから神さまのおさばきを受けるように用意をしてあげるよ」

猫女は、へんなことをいった。机博士が、その言葉の謎をとこうとしていると、いきなり目かくしをされてしまった。もちろん猫女の仕業しわざだった。ぎゆうぎゆうと二重に目の上をしばってしまった。机博士は恐怖におそわれ、それについて抗議をした。と、口の中へハンカチだか何だかを突っこまれた。あつとおどろいていると、口の上をぐるぐると布でまかれてしまった。もう声が出せない。猫女の手ぎわのよいことはおどろくばかりだった。

それから猫女は、机博士の身体に、ロープをぐるぐるまきつけ

た。それがすむと女は博士の腰のところを叩いて、

「さあ、お歩きな。お前さんのこしらえておいた抜け穴から外へでるのだよ」

なんでも知っている猫女だった。なんとというすごい奴だろうと、ものがいえない机博士は、くやしさとおそろしさに、からだをふるわせるばかりであった。

歩いて、穴の外へでた。ひやりと涼しい風が首すじに吹きつけたので、それと察した。いやまだある。眼かくしの布の下に、ほんのすこしばかりの隙すきがあつて、外の明るさが感じられた。これはさつき目かくしをされるときに、机博士は、顔をうんとしかめたのだ。その上に目かくしをされ、あとでしかめ面つらを元に直すと、

すこし目かくしがゆるくなる。これは前から博士が知っていた術である。今うつすらと、足許あしもとの方の明るさが見える。明るさだけではなく、物の形が見えないものかと、博士は目かくしの下で、しきりに目をくしゃくしゃやってみた。

しばらく彼のところを離れて、向こうでなにかやっていた猫女が、このとき博士のそばへもどつてきた。

「さあ、こっちへおいで」博士は又歩かされた。ごつごつした岩の上を歩かされた。崖がけの端はしまでいくらかも距へだたっていない。足を踏みはずしてはたいへんだ。

「そこでストップ。さて、これから二三秒の間、息をとめているがいいよ」

猫女が、妙なことをいった。机博士は聞きかえしたかったが、ものがいえない。それで一生けんめいに目かくしの隙間すきまから、何でもいいから見えるものを見たいと努力した。

岩かどが見えた。

(あッ、おれは今、崖の端に立っている！)

机博士は戦慄せんりつした。たいへんだ。足を踏みはずせば、崖下に落ちていって、骨をくだいて人生にさよならを告げなくてはならない。あぶない。「助けてくれ」と博士はさげんだが、もちろん声がでるはずもない。

「今になって、じたばたするんじゃないよ。早いところやってしまうからね」

猫女が机博士の方へ近づいた。何をするのかしら。その時に彼は、目かくしの隙から、猫女の服の一部を見た。足も見た。スカートは、濃い緑色の服地でできていて、短いスカートだった。その下に長くのびた形のいい脚があつた。二本とも揃そろつていた。うすい肌色の長靴下をはいている。そして靴は短たんぐつ靴。スポーツ好みの皮とズックでできているあかぬけのした若い婦人向きの靴だった。それだけを一目で見た机博士は、猫女の腰から上が見えないことを残念に思った。

しかし緑の服、長く遅たくましい二本の脚、肌色の長靴下に、若い婦人向きスポーツ好みの短靴——というところから想像されることもない猫女の人がらだった。彼女のことばつきよりも、ずっと上

品な服装ではないか。一体何者であろうか。どんな顔つきの女であらう——と、そこまでを一瞬間に考えたとき、彼の身体はとつぜん「えいッ」と突きとばされた。

(うッ)と、苦悶くもんのさけびも声も口のうち。

彼の足は、すでに崖の端を離れた。宙にうかんだ彼の身体！

ああ、机博士の生命は風前の灯同様である。死ぬか、この変り者の悪党博士？ それとも悪運強く生の断崖だんがいにぶら下るか？

ごつたがえす山塞さんさい

二少年は、どうしたろうか。

机博士の暗室あんしつにもぐりこんでいた春木清と牛丸平太郎は、思いがけなくも博士対首領のすさまじい争闘そうとうを見た。机博士が首領にあびせかけたエックス線が、首領の正体をがいこつの小男として、緑色の蛍光幕へうつしだした。その怪奇も見た。そのあとで、はげしい器物の投げ合いで、室内はまつくらとなり、その部屋にとどまっていることは大危険となった。

「この部屋からでようよ」

「うん。今ならでられるやろ」

春木と牛丸とは、小犬のようになって、すばやく部屋からとびだした。

「あッ。ちよつと待った。しいッ」

牛丸は、春木よりも一足早く外へでたが、とたんにおどろいて、身を引いた。そしてうしろにつづく春木をおしもどした。彼は、廊下ろうかの向こうに人影を認めたからであつた。

その人影は、牛丸がとびだすのと、ほとんど同時に、廊下の角かどを曲まがつたので、牛丸はその人物のうしろ姿をほんの一瞬間見ただけであつた。その人物は背が高く、長いオーバーを着ていたように思った。正確なことは分らない。はつきり見たのはその人物の片方の足だけだつた。水色のズボンをはいた長い脛すねであつた。そしてスポーツごのみの派手な短靴をはいていた。

スポーツごのみの短靴がはやると見える。そうではないであろ

うか。

(誰であろう、今向こうへいった人物は?)

と、牛丸は首をひねった。しかし彼は、その人物を追いかけていくつもりはなかった。向こうへいつてくれて結構けっこうであると思つた。このすきに、早いところ逃げてしまふのだ。

「さあ、走るんや。今のうちなら、地下牢ちかろうの方へ引きかえせる」牛丸は春木をうながして、廊下を縫うようにして走つた。彼は山塞の地理を研究して知っていた。運もよくて、彼は春木と共に、元の地下牢の方へ走りこむことができた。

そこには、戸倉老人が待つていた。

老人は、牢番ろうばんの小竹と身体をくつつけ合つていたが、少年た

ちがはいってきいたので、離れた。小竹さんは猿ぐつわをかまされ、手足はぐるぐるまきにされ、椅子にしばりつけられてあつた。小竹さんの目だけは自由に動いていた。いつもの睡ねむそうなにぶい光の目ではなく、いきいきとした目つきで、みんなの顔を見ていた。恨うらめしそうでもなく、いかりにもえている様子もなかつた。

「それじゃ、わしたちはでかける。あとは頼みます。これから毎日、あんたの無事を祈る。短たん気をおこさぬようにな」

と、戸倉老人は、小竹の肩をかるく叩いて、眼に涙をうかべた。すると小竹は、二三回あごをしゃくつてみせた。

「早くゆきなさい」と、いそがせているようだ。これで見ると、戸倉老人と小竹との間にはひそかなる了りようかい解があることが明ら

かだった。小竹がしばらくられたのも、二人合意ごういの上のことであるにちがいない。

そこで戸倉老人につれられ、春木と牛丸の二人は、山寨を逃げだした。どういくと抜け道にでられるか、そのことは戸倉老人がよく知っていた。要所要所の扉をあける鍵もちやんと持っていた。あける前に、警鈴けいれい用の電気装置をうまく処しよ分ぶんすることも、やはり老人が知っていた。

それより牛丸少年がおどろいたのは、老人が元気いっぱいだったことである。牢の中でも、首領の前へ呼びだされたときでも、老人は一步も歩けない重病じゅうびょう人のように見えた。それは、わざと重病人の風をよそおっていたのにちがいない。

しかし老人が、いくら巧みにたく抜け道から抜け道をたどって逃げたにしろ、わるがしこい四馬劍尺しばけんじやくの張つてある網の目をすべてくぐりぬけることはできないはずだった。だがすばらしい幸運が、老人と二少年とを助け、一度もへまをやらないで山寨の脱出に成功した。その幸運というのは、ちょうどこのとき山寨の中は、机博士事件でごつたがえしていて、要所要所の見張りはおろそかになつていたのだ。

なにしろ、おそろしいでき事だった。

町まで使いにいつて、ちようど山寨の近くへもどつてきた一味いちみの一人が、ふと目をあげたとき、妙なものを見つけた。身体をぐるぐる巻きにされた一人の人間が、崖がけから横にでている電柱のよ

うな長い棒の先から吊り下げられ、ぶらんぶらんと揺れているであつた。

「うわツ、あぶねえ」

その使いの者は、仙場の甲二郎せんば こうじろうという男であつたが、彼はびつくりして胆きもをひやし、その場へどすんと尻餅をついたくらいだ。見ていると、ますます人間は揺れ、今にもロープが棒の端からとけ、吊り下げられている奴は崖下へまっさかさまに落ちていきそうだ。甲二郎は、気が落ちつくのを待つて立ち上ると、こんどは駆かけ足でもつて、山寨へとびこんだ。そしてこの変事へんじを知らせたのである。もちろん、棒の先に吊り下げられて、ぶらんぶらんしていた人間は、机博士にちがいがなかつた。猫女の姿は、どこにも

見えない。

甲二郎の知らせで、さつきから机博士の行方ゆくえを探していた団員たちは、それというので、山寨からとびだして、崖の上を見上げた。

「うわははは、たいへんだ。見ちやおれん」

「たしかに机博士だ。早く下へ網を張れ」

「おい、首領に報告したか」

「知らせたとも。今ここへ、首領もでてくる、といってた」

こんなさわぎが起っていたから、二少年と戸倉老人の脱出は、あんがい楽に行われたのだ。そしてみんなが網を張れたの、崖の上へ行ってそつと綱をひいてみるだの、竹ばしごを組んで二人ば

かり登って助けろだのとさわいでいる間に三人の脱走者は反対方向の山へまぎれこんでしまったのである。

生命いのちがけの脱出

二少年と戸倉老人とは、たがいに助けあつて、山また山をわけて逃げた。

本道ほんどうへでると、六天ろくてん山塞さんさいの悪者どもに見つかるおそれが

あるので、道もないところを踏み分け、わざわざ遠まわりをして逃げた。山のことは、さいわいにもこの土地生れの牛丸少年がたいへんくわしいので、方向をあやまるようなことがなかった。山

塞を抜けてたのが、朝の八時ごろであった。それから太陽が一番高くなる正午に近くまでの約四時間を、三人は強^{きようこう}行して逃げた。

腹が減^へつてならなかったが、戸倉老人はさすがに用意がよく、腰につけてきた包みの中から、チョコレートとビスケットを出して、二少年に分けあたえた。おいしかった。谷間の水にのどをうるおしながら、三人は、あらたな元気をふるい起し、それから又もや苦しい行進をつづけた。

牛丸少年の考えでは、思い切つて西の方へ迂回^{うかい}し、タヌキ山から山姫山^{やまひめやま}の方へでて、それを越えて千本松峠^{せんぼんまつとうげ}へでるのがいいと思つた。しかしそこまでゆくには、今日いっぱいではだめだ。

どうしても明日までかかる。今夜は山姫山のどこかで野宿するほかない。

千本松峠へでれば、あと四時間ばかり下って、しばはらすいげんち芝原水源地の一番奥の岸につく。そこへゆけば、水道局の小屋もあるし、うまいくくと巡じゆんかい回かいの人がきているかもしれない。あとは心配ない。とにかく問題は、千本松峠へでるまでのところにある。方角はたぶんまちがえないですむと思うが一同の体力がつづくかどうか、きつとヘリコプターをとばして追跡してくるであろう、四馬剣尺の一味の目を、うまくのがれることができるかどうか、その二つにかかっているのだ。

牛丸少年は、今日のうちに山姫山までたどりつかねばならぬと

いう計画を他の二人に話し、その日の午後は、とくに前後に気をくばりながら、できるだけ強行進きようこうしんをつづけてもらった。午後二時ごろと思われるときに、果して空の一角にブーンと爆音が聞え、やがてヘリコプターが姿をあらわした。

「そろきたぞ。動いちやいかん。ぜったいに動くな」

戸倉老人が、叱りつけるようにいった。

このとき三人は、背の低い熊笹くまざさのおい茂しやめんった山の斜面を下りているところだった。いじわるく、身をかくすに足る大木もない。そこで熊笹の中にうつ伏したまま、岩のように動かないことにつとめた。空から見下ろすと、背中がまる見えのはずであった。だから今にもだだブーンと、機関銃のはげしい掃射そうしやをくうこと

かと生きた心地もなかった。

いいあんばいに、ヘリコプターは、こつちへ飛んでくる途中で、とつぜん針路しんろを北へ曲げたので助かった。よもやこんな西の方まで逃げてきているとは思わなかったのであろう。きわどいところであった。

ヘリコプターが追いかけてきたのは、その一回だけであった。タヌキ山を駆け下り、しばらく沢について歩き、それからいよいよ山姫山へのぼりだした。

こののぼりの二時間が、一番苦しかった。険しい斜面しやめんで、木の根につかまって、すこしずつのぼっていくのであった。枯れ葉に足をとられて、せつかくのぼった斜面を、ずるずるとすべり落

ちて、大^{おおぞん}損することもあった。またぐちやりと気味のわるい、山びるをつかんで青くなつたことはいくたびか分らない。腹は減り、のどはかわき、目は廻つた。もうこのへんでへたばつて声をあげようと思つたこともたびたびであつた。しかし自分が弱音^{よわね}をはいては、他の二人をがっかりさせると思い、齒をくいしばつてがんばつた。みんながそうしたものだから、山姫山の嶮^{けん}もついに征服して、やがて地形は、わりあい^{そくちよう}にゆるやかな斜面となつた。そして山姫山の頂上にある、測地用^{そくちよう}の三角点のやぐらが、夕陽^{ゆうひ}を背負つて、によつきりと立つているのが見えてきた。三人は、疲れ^{つか}を忘れて足を早めた。

山姫山の頂上に小屋があつた。三角点のすぐわきのところであ

る。これは陸地測量隊りくちそくりようたいがかけていった小屋で、もちろん無人のときの方が多い。その空き小屋あごやに三人ははいつて、その夜はここで一泊することにした。

夕食の時刻がきているが、その用意はなかった。ただ戸倉老人は、チョコレートチョコレートの残り残りと、それから三枚のするめを持っていて、それをかじつて、飢えうをしのいだ。

日が暮れだした。もうでもよかろうと、三人は小屋の外にでて、下界をながめた。はるかに芝原水源地が、ひょうたん形をして湖面こめんがにぶく光っている。明日の行程こうていでたどりつく目的地の湖尻こじりの小屋が、豆つぶほどに見える。

(ここままでくれば、もう大丈夫だ)

と、三人が三人とも、そう思った。入日の残光が急にうすれて、夕闇が煙色のつばさをひろげて、あたりの山々を包んでいった。と、東の空に、まん丸い月が浮きあがった。満月だ。三人は危険の身の上をしばし忘れて、ほのぼのと明るい月に向きあっていた。

その夜、戸倉老人は、春木少年から黄金メダルに関するこれまでの話を聞き、少年が思いがけない苦勞をしたことに深い同情のことばをかけた。そのあとで老人は二少年から問われるままに、海賊王デルマがこしらえた黄金メダルの二片について、彼の知っているだけの秘話を月明の下で物語った。

「わしも、デルマの黄金メダルの秘密について、全部を知ってい

るわけではない。もし全部を知っているものなら、こんなところにぐずぐずしていないで、さつそく宝を掘りあてることに夢中になつてゐるはずじゃ。正直なところ、わしはデルマの黄金メダルの秘密については、おぼろげながらその輪廓りんかくを多少聞きかじつてゐるにすぎない。かんじんの秘密は、どうしても例の黄金メダルの二片を集めた上でないと解とくことができないのじゃ。だからわしの話も、あんがいつまらんことなのじゃ」

と、老人は二少年の熱心な顔を見くらべた。

「この前、春木君に渡した絹きぬハンカチは火に焼けて、三分の一しか残らなかつたそうじゃが、わしはその文句を宙そらでおぼえている。ちよつとこの紙に書いてみよう」

そういつて老人は、ポケットから、チヨコレートを包んであつた紙をだし、そのしわをのばした。それから鉛筆の短いのを取り出し、その先をなめるようにして次のような文章を書いた。

かっこで囲んだところは、春木君の手にのこつた焼けのこりの部分に残つていた文字である。

——この黄金メダルは二つの破片

より成るものにして、スペインの海

賊王デルマが死の床において、彼の

部下のうち最も有力なるオクタンと

(ヘザ)ールとに各々一片ずつを与え

- (たる)ものなりと伝う。この破片を
(二つ合)わせたるときはデルマの秘
(蔵する宝)庫の位置およびその宝庫
(の開き方を知)ることを得るよしな
(り)。オクタンとへ)ザールは仲悪かり
(したため協力せず)、互いに相手の有
(する黄金メダルの)一片を奪わんも
(のと暗殺者を送)りしたため、兩人共
(斃^{たお}れ黄金メダルは暗)殺者の手に移
(り、それより行方不明)になりたり
(ここにある一片はオ)クタンの所蔵^{しよぞう}

(せし一片にして余は地中) 海某島ぼうとうに

(おいてこれを手に入れたる) ものなり

「まあ、こういうことなのじゃ。実はもう一枚このあとに絹ハンカチがあるのじゃ。これはわしが春木に渡すひまがなかったもので、六天山塞のきびしい取調べのとき、うまく見つけられないですんだものだ。それはわしの靴の中にしまつてある。これがそう
だ」

そういつて戸倉老人は、右の靴をぬぎ、踵かかとのところをしきりにいじっていたが、そのうちに踵のところかかとに小さな四角い穴があった。その中からひっぱり出したのが、絹ハンカチのもう一枚だつ

た。それに次のような文句が書いてあつた。

——ちなみ因に海賊王デルマは、かつて日

本にも上陸したることありと伝う。

彼は大胆にして細さいしん心、経けいりん綸とに富むと

共に機械に興味を有し、よく六千人

の部下を統とうぎよ御せり。また彼の部下へ

ザールは、デルマが去りし後も一年

有半日本とどまに停り、淡路島あわじしまとその対岸たいがん

地方を根城ねしろとして住みしが、日本人

には害を及ぼすことなかりしたため彼

を恐ろしき海賊と知る者なかりし由よし

なり。彼は義ぎに固かたく慎しん重ちゆうにして最も

デルマに愛せられたり。オクタンは

剛ごう勇ゆうにして鬼神きじんもさけるほどの人物

なりき。

「どうだね。今読んだ文章の意味が分ったかね」

戸倉老人は、そういつて二人の少年の顔を見くらべた。

「分ったような、分らないような、どっちだか分らない」

と、春木がいった。すると牛丸が笑った。それにつられて老人も笑った。春木も、なんだかおかしくなつて、いっしょに笑った。

「それじゃ、もう一度話に直してしやべろう。結局ここに書

いてあるとおりのことなんだが……」

と、老人は、ことばに直して、同じことを復習して聞かせた。

もちろん、ハンカチに書いてあるよりはくわしかった。しかし要領うりよう

領うりようは同じことであつた。

「……あの黄金メダルの半ぺらを、わしが手に入れたときは、わしはある汽船に船医せんいとして乗組んでいて、たまたま地中海を通つたのだ。そのときわしの乗っていた汽船が舵器だきに故障を起したので、その某島へ寄つて修理をやつた。そのために前後五日間そこに仮泊かはくしていた。その間に、わしははからずも黄金メダルを手に入れたのじゃ。……どうしてそれを手に入れたか。そのことは、

宝探しには直接関係のないことじゃから、おしやべりしないでおくよ」

老人は、そういつてことばを結んだ。なにかいいにくいことがあるにちがいないと、春木はそう思った。

とにかく、おどろくべきことだ。

今までは、一片いっぺんの屑くず金かねにすぎないではないかと軽く見ていたが、こうしていわれいんねん因縁いんねんを聞くと、海賊王デルマの死霊しれいが籠こもっているように気味のわるい品物に思えた。

「惜しいことをしました。あれを盗まれてしまつて、まことに残念です」春木は、ほんとに残念でならなかつた。

「まあ、よいわい。わしが自由の身になつたからには、なんとか

して取戻す方法がないでもないのじゃ。うまくいったら、君たちにも知らせてあげる。しかしこのことは、他の人には絶対秘密にしておくがよいぞ」

「はい」

と春木はこたえた。しかし、彼はこのことを他の人々にもしゃべってしまったことを思い出して、苦しかった。もつともしやべったのは、金谷^{かなや}先生と四人の少年探偵の級友と、それからここにいる牛丸君だけにではあつたが……。

「おじさんは、そのメダル探すあてがおまんのやな」
牛丸少年がたずねた。

「うむ。まあ、そういう見当じゃ」

「どこだんね。骨董店こつどうてんやおまへんか。海岸かいがんどお通りの方の骨董店とちがいますか」牛丸は春木から聞いたチャンフー号の店の話を思い出して、あてずっぽうながら、いつてみた。

「ほう」と戸倉老人は目を丸くした。「そんならその店の名をいってみなさい」

「万ばんこくこつとうしやう国骨董商のチャンフー号ですやろ」

すると戸倉老人は卒そつとう倒せんばかりにおどろいた。チャンフー号の事件については、春木は牛丸には話したが、戸倉老人にはまだ話をしてなかったのだ。

「どうしてそれを知っているのか」

「あそこの店には、なんの品でもおますさかいにな。しかしもう

あそこは頼みになりまへん。主人が殺されましたさかい」

「なんという？」

「チャンフーという老主人が、この間ピストルで殺されましたん。まだ犯人はつかまらんちゆう話だす。春木君から、ぼく聞いたんです」

「ばかばかしい。そんなことがあるものか。はははは」

と、とつぜん戸倉老人が笑いだした。

「なんで、おかしがつてんだね」と牛丸が、げげんな顔で聞きかえすと、戸倉老人は、こういった。

「チャンフーが殺されるなんて、絶対にそんなことは有り得ないのじゃ。お前さんたちはだまされている」

どうしたのであろうか。春木少年は、びつくりして老人の顔をながめやった。戸倉老人は、へんなことをいいだしたものである。それとも、老人の笑うには、なにかしつかりした根拠こんきよがあるの
であろうか。

戸倉老人が元気になって、事件はまたもやいつそう怪奇な方向へすべりだした。しかし中天には、明々めいめい皎皎こうこうたる大満月が隈なく光をなげていた。

燃えあがる山塞さんさい

戸倉老人は妙なことをいいだした。

「チャンフーが殺されるなんて絶対にそんなことはあり得ないのじゃ。お前さんたちはだまされているのだ」

戸倉老人はそういつて笑うのだ。

その笑いは、いかにも確信があるもののようにであった。

しかし、戸倉老人はどうしてそのようなことがいえるのだろうか。

老人はいままで六ろくてん天山塞さんさいの地下の密室におしこめられていた

のではないか。ちかごろ町に起つたでき事について意見をのべる資格はないはずだ。

それにもかかわらず、牛丸や春木の言葉をてんできこうともせず、あくまで、チャンフーの生きていることをいいはるには、何かたしかな根拠のあることなのだろうか。老人にありがちな、い

ったんこうと思ひこんだら絶対に、ひとの言葉をきこうとしない、かたくなさからであらうか。

それはさておき、山姫山やまひめやまの頂上にある陸地測量隊りくちそくりようたいの山小屋に一夜をあかすことになった、戸倉老人と春木、牛丸の二少年は、それから間もなく背すりあわせて寝ることになった。

秋ももうだいぶ更ふけている。夜の山小屋は寒かった。毛布もなにもない山小屋で、三人は背すりあわせて、なかなか瞼まぶたがあわなかつた。山小屋のなかには、炬がきつてあり、たきものの用意もしてあつたが、うっかりそんなものを燃もすことはできないのだ。

燃せば、火がでる。煙もたとう、ヘリコプターの眼がこわいのである。怪あやしいとみれば、あいてのみさかいもなく、機関銃の雨

をふらせる連中なのだ。

「仕方がない、このまま寝よう。なにすぐ夜があけるさ」

寒さも、飢えも、疲労にはうちかてなかった。それから間もなく三人は、うとうとしはじめたかと思うと、やがて、前後もしらず、ぐつすりと眠りこんだ。

それから、どのくらいたったのか。

ふたつにわれた黄金メダルや、スペインの海賊王や、さてはまた、かくされた大宝物だいほうもつについて、ふしぎな夢をみていた春木少年は、ふいにはツと眼をさました。夢のなかでなにやら、異様な物音をきいたからである。

いや、それは夢ではなかったのだ。げんにその物音はまだつづ

いている。パチパチと何かはぜるような音——春木少年はギョツとして、上半身じょうはんしんをおこしたが、そのとたん、ドカーンとものすごい音が、夜の空気をふるわしたかと思うと、山小屋がグラグラと大きくゆれた。

「なんだ、あれは……」

戸倉老人も、その物音に、ハツと床ゆかのうえに起きなおった。

いちばんノンキな牛丸平太郎までが眼をさまして、

「なんや、なんや、いまの音……」

寝呆ねぼけまなこをこすりながら、顔中を口にして、ううんと大おお

欠伸くびをした拍子ひょうしに、またもやドカーン。

「わーっ」牛丸少年はうしろへひっくりかえった。

「おじさん、六天山ろくてんやまの方角ですよ」

「よし、外へでてみよう」

戸倉老人はさきに立ってでかけたが、何思ったのか、

「いや、ちよつと待て」

と、春木少年の肩をとってひきもどした。

「おじさん、ど、どうしたんですか」

「あれ……あの音をお聞き」

戸倉老人の顔は、するどい刃物はもののようにひきしまっている。

その声に、春木と牛丸の二少年も、ギョツとして耳をすましたが、と、どこからか聞えてくるのは、ブーというかすかな唸りうなごえ声。

ヘリコプターなのだ。東のほうから、しだいにこちらへ近づいて

くる。

牛丸平太郎はガタガタと胴ぶるいをした。

「おじさん、まだ、ぼくらを探しているのでしょうか」

「さあ？」戸倉老人が、首をかしげたときである。またもや、ドカーンと物もの凄すごい音がして、山小屋がグラグラとゆれたかと思うと、東の窓がパツと明るくなった。

「あつ、わかった。山寨に何かあったんだよ、それで、一味のものが、ヘリコプターで逃げだしているのだ」

パチパチと物のはぜるような音は、ますますはげしくなっていく。ドカーン、ドカーンと、爆発するような音が、ひっきりなしにつづいて、東の窓はいよいよ明るくなってきた。

ブーン、ブーン——竹トンボをまわすような唸^{うな}りは、しだいにこちらへちかづいて、やがて、山小屋の上空までやってきた。と、思うと、

ダダダダダ！ すさまじい音を立てて、機関銃がうなりだした。山小屋の周囲の岩石に、機関銃の弾丸^{たま}が、あられのように跳^はねつかえる。

「あ、危い！」三人はパツと床に身をふせる。

「お、おじさん、見つかったのでしうか」

春木少年の声もさすがにふるえていた。

しかし、あいては、たしかにここという確信があつたわけでもないらしく、ひとしきり機関銃の雨をふらせると、そのままゆう

ゆうとして、西のほうへとび去った。

「ひどいやつだ。いきがけの駄賃だちんとばかりに、機関銃をぶっぱなしていきおった」

「いくらか臭くさいとにらんだんですね」

「そやそや、ひよつとすると、このなかかも知れんと思うてうちよつたんや」

三人とも汗びっしりである。いまさらのように、兇悪きょうあくむざ無残んなやりかたに、腹の底まで凍こおるような気持ちである。さいわい、三人とも怪我がなかったからよかったようなもの、もうしばらく、機銃掃射をつづけられたら、どんなことになっていたのかわからないのだ。それを考えると、三人はゾツとして顔を見合みあわ

せた。さて、それから間もなく、ヘリコプターの爆音が、西の空
 に消え去るのを待つて、三人が山小屋から外へとびだしてみると、
 東のかた、六天山の上空には、炎々たる焰ほのおがもえあがっていた。
 パチパチと木のもえさける音、ドカーン、ドカーンとひっきり
 なしに聞える炸裂音さくれつおん、そのたびに、蒼白あおしろい閃光せんこうが、パツと焰
 と煙をつらぬいて、阿鼻叫喚あびきようかんの地獄絵巻じごくえまきとはまったくこのこと
 だった。

戸倉老人と春木、牛丸の二少年は、呆然ぼうぜんとして顔を見合せた
 が、それにしても、どうしてこんなことになったのであろうか。
 それをお話するためには、話を少し、もとへ戻さねばならぬ。

首領かしらの両脚りょうあし

裏切者の机博士が、猫女ねこおんなのはる綱にひっかかって、あわれ断崖だんがいのうえから、いのちの宙吊りちゆうづぶをやらされたことは、諸君も知っていられるとおりである。

町へ使いにいった、仙場甲二郎せんばこうじろうという男が、この宙吊りを発見するのが、もう少し遅れたら、さすがの悪党博士もどうなっていたかわからない。おそらく、綱は棒からはなれて、博士はまさかさまに谷底へついらくし、柘榴ざくろのようにはじけていたかも知れないのだ。

しかし、さいわい、仙場甲二郎の注進ちゆうしんによつて、山塞さんさいの

なかは大騒ぎになった。誰も博士が首領にたいして、あのような裏切行為をはたらいたことは知らないからよつてたかつて、やつと博士を、崖のうえへひつぱりあげた。

このときばかりはさすがの机博士も、よつほど肝きもをひやしたと見えて、青菜あおなに塩しおのようにげんなりしていたが、それでも、いうことだけはいい。

「いや、地獄の一丁目までいつてきたよ。は、は、は、とんだお茶ちやぼん番ばんさ」

「先生、じよ、冗談じゃありませんぜ。いったい、誰があんなことをしたんです」

「猫女だよ」

「猫女あ……？」
波立二なみたつじがとんきような声をあげた。

「猫女といやあ、いつか首領の手から、黄金メダルの半ペラをうばっていった……」

「そうそう、あいつだ。あいつが暗闇のなかからとびだして、をしをあんな眼にあわせおったのだ。あいつはほんとに闇のなかでも眼が見えるらしい」

さすがの荒くれ男も、気味悪そうに顔を見合せた。

「それじゃ、先生、あいつがまた、この山塞へしのびこんだというのですかい」

「そのとおり、あいつはまるで空気のように、どこからでもこの山塞へしのびこむのだ。ひよつとすると、まだそこらの闇にしの

んでいて、だしぬけにズドンと一発……」

「いやですぜ、先生、気味の悪い。いかにあいつがすばしっこい
たつて、にんじゆつつか忍術使いじやあるまいし……」

「いや、そうではない。あいつは暗闇のなかで、眼が見えるくら
いだから、忍術も使うかも知れん。だつて、考えてみる。いつか
の晩だつて、電気が消えたと思つたら、そのとたんあいつの声しばとうもく
四馬頭目のうしろで聞えたじやないか。それまでこうこう皎々と電気がつ
いていたんだ。いったい、どこからいつの間に首領かしらの椅子のうし
ろまで、忍びこんできたんだ。それ、即ち忍術をつかう証拠だ」
「いやですぜ、先生、変なことはいいつこなしに願いましよう」
「いや、変なことではない。いずれにしてもあんな妙なやつが、

ひよこひよこ出入りをするようじゃ、この六天山塞ろくてんさんさいもさきが知れているな」

仔細しさいらしく首をひねる机博士の顔色に、さすがの荒くれ男たちも顔見合せた。相手の性しょうがわかっておれば、たとえ鬼おにでも蛇じゃでも、おそれをなすような連中ではないが、闇のなかから声ばかり、姿も形もわからないとあつては、浮足うきあし立つのも無理ではなかつた。ひよつとするとそこらの闇にひそんでいて、猫のように眼をひからせているのではないかと思うと、襟えりもと元もとから、冷たい水をブツかけられるような気持ちだった。

口では元気なことをいつてるものの、さすがに、あのようないのちの宙吊りをやらされた机博士、その日は一日ゲツソリ参っ

て、自分の部屋で休んでいたが、きて、その晩のことである。仙
場や波立二たちと話をしていると、そこへ木戸きどという男がいそぎ
足でとびだしてきた。

「おい、おまえたちは何をぐずぐずしているのだ。首領がお待ち
かねだ。早く机博士をつれてこんか」

木戸は一同を叱りつけておいて、机博士にちかづいた。

「先生、あんた首領になにをしたんです。首領はカンカンにおこ
つてますぜ」

首領——と、きくと、机博士の顔色はさつと鉛なまりいろ色いろになった。

「いやあ……別に……ちよ、ちよつと悪いたずら戯ずらをしてみただけさ」

「なんだか知りませんが、首領をおこらせることが、どんなこと

だか、おまえさんもよく御存じのはずだ。いずれ、ただではすみませぬ。さあ、おいでなさい。おい、みんな、机博士をにがすな」木戸の言葉に一同は、バラバラと机博士をとりかこんだ。こうなつたら、袋のなかの鼠ねずみも同然、机博士は急にガタガタふるえだした。首領のおそろしさは、知りすぎるほど知っている机博士なのだ。

「さあ、先生、それじゃお気の毒でも、いつしよにきてもらいましようか」屠所としよにひかれる羊ひつじとは、このときの机博士のようなのをいうのであろう。よろよると、足下あしもともさだまらぬ机博士を、荒くれ男が左右から、ひつたてるようにして、やってきたのは首領しゅりやうの待っている特別室。

首領の四馬劍尺しほけんじやくは、あいかわらず竜りゆうの彫物ほりもののある、大きな椅子に坐っていた。身のたけ六尺にちかく、ビール樽だるのように肥ふとったからだは横綱よこづなもはだしで逃げだしそうな体格だ。顔は例によつて、三重のヴェールによつてつまれているが、そのヴェールがブルブルとふるえているところを見ても、いかに首領がおこっているかわかるだろう。

土色になつて、コンニヤクのようにブルブルふるえている机博士は、首領のまえの椅子にひきすえられた。

「机博士」首領四馬劍尺の声は、つめたく、落着きはらつていた。これは首領のいかりが、いかに大きいかという証拠なのだ。四馬劍尺はいかりが大きければ大きいほど、つめたく落着きはらうの

である。

「おまえは昨夜、このわたしにどのような無礼をはたらいたか、よくおぼえていような」

「首領、お許しを……」

「黙れ！」

首領は大喝だいかつした。からだがいかりでブルブルふるえた。

「獅子身中の虫ししんちゅうとは、机博士、おまえのことだ、おまえは盗ぬすび人のようにわたしの部屋へしのびこんだ。しかし、それは許し

てやろう。いかにおまえがコソコソと、机や戸棚をひつかきまわしたところで、秘密をうばわれるようなわしではない。だが……」
と、首領はギリギリと歯ぎしりをして、

「どうしても、許しがたいのは、それからあとのお前の所業だ。しわざおまえはエックス線で、わたしの正しょうたい体を知ろうとした。この神聖なわたしの正体を！」

首領はわれがねのような声を張りあげて、両手をふりあげ長い袖のなかで、拳こぶしをブルブルふるわせた。土色になった机博士の顔には、ビツシヨリと汗がうかんでいる。

「さあ、いえ、おまえは何を見たのだ。エックス線で透視して、おまえはいつたい、どのようなものを見たのだ」

「首領、ごめんを……そればかりはごめんください」

「ならぬ、いえ！ みんなのまえでいってみろ。おれの正体がどのようなものであったかいてみる！」

首領の声が、広い部屋にとどろきわたって、山彦やまびこのように反

響こした。

「首領かしら……それでは、いつてもかまいませんか、みんなのまえで

……」

机博士の瞳に、チラと、狐のように狡猾ことうかつなあざ笑いがうかんだ。

「構わぬ。いえといえは、早くいえ！」

「それじやいまいましよう。首領、あなたは小男なのだ。あなたの、その大きなダブダブの中国服は、その小男をゴマ化かするための煙えんま幕まくなのだ。あなたは足に、一メートル位の棒をつけて、大男に見せかけているが、じっさいは、小男なのだ！」

「一瞬^{いっしゆん}、

部屋のなかは、シーンとしばらくかえった。あまり意外な机博士の言葉に、木戸も、波立二も、仙場の甲二郎も、呆^あ気にとられてポカンとしていた。

(この、横綱のような大男の首領が小男……?) 机博士は気が変になったのではなからうか。突然、爆発するような笑い声がおこった。首領の四馬剣尺だ。首領は腹をゆすつて笑った。笑って、笑って、笑いころげた。

「机博士、それがおまえが見たところか。このおれが小男……? おい、机博士、おまえの眼はたしかか、いやさ、おまえのエックス線に狂いはないのか」

「断^{だん}じてわたしは見たのだ。わたしのエックス線には狂いはない

のだ。おまえは、棒でつき足した……」

そのとたん、四馬剣尺は脚をあげて、いやというほど、博士の向う脛すねを蹴けりあげた。机博士はあまりの痛さに、あつと叫んでとびあがったが、すぐに、木戸と波立二におさえつけられた。

「机博士、この脚が棒だというのか。わたしの脚が棒だというのか。さわってみろ。たった一度だけ許してやる。さわってみろ！」

机博士は首領のまえにひざまずいて、おそろおそろ、首領の両脚にさわってみた。そのとたん、つめたい汗が、つるりと博士の額からすべり落ちた。

ああ、これはなんとしたことだ。首領の両脚は、たしかに温い血のかよった、人間の脚にちがいがいなかった。

人間金庫

机博士はゲツソリとやつれた顔で、椅子のなかにうまつている。いつぺんに十も二十も年をとったように見える。

ああ、わからない。昨夜エックス線で見たときには、たしかに首領^{かしら}は、長い棒のつき脚をした、小男だった。しかるに、いま、中国服のうえからさぐった首領の両脚は、まぎれもなく、血と肉からできたたくましい人間の両脚だった。これはいったいなんとしたことだろう。おれは気が変になっているのではなからうか。

「そうだ、おまえは気が変になっているのだ」机博士の考えを見

抜いたように、首領かしらがズバリといいあてた。

「おれを、この四馬剣尺を裏切ろうなどという考えが起ることか
らして、おまえはもう気が変になっているのだ。だが、まあいい。
これで、おまえのバカげた疑いは晴れたであろう。それでこれか
らおれの用事だ。おい机博士、だせ！」

首領の声が、雷かみなりのようにとどろいた。気落ちしたように、ボン
ヤリしていた机博士は、その声に、ビリビリと体をふるわせた。

「な、な、なんですか。なにをだせというんですか」

「白ばくれるな。おまえはチャンフーの店で、黄金メダルの半ペ
ラを、手にとって調べてみたといったな。おまえのような狡猾こうかつ
な男が、金がないからといって、そのまま、かえると思われるか。

おまえはきつと、小型カメラで、メダルの両面を撮影してきたにちがいない。そのフィルムをここへだせ」

机博士の顔に、そのときまた、チラと狡猾なあざわらいの影がうかんだ。

「なるほど。さすがは首領だよ。えらい眼力だよ。感服したよ。たしかにわたしはメダルの両面を撮影してきたよ」

「よし、よくいった。それじゃ、それをここへだしてもらおう」
「ない、とられた」

「とられた？ 誰に？」

「猫女ねこおんなに……首領、おまえさんは利口りこうだよ。眼はしが利きくよ。しかし、猫女はおまえさんより一枚上手だ。さつき、抜穴ぬけあなのな

かで、まんまと、猫女にまきあげられたよ。あっはっは、猫女はいつか、おまえさんからメダルの半分をまきあげたね。そして、こんどは他の半分の両面を、撮影したフィルムも手に入れたのだ。だいほうもつ大宝物は猫女のものだよ。あっはっはっは」

首領はギリギリ歯ぎしりした。いかりで肩がブルブルふるえた。

「木戸、波立二、そいつの身体検査をしてみろ！」

げんか言下に木戸と波立二が、机博士の身体検査をしたが、むろん、フィルムはでてこなかった。

「首領、なにもありません」

「足らん」首領は地団駄じだんだをふみながら、雷のような声でどなった。

「身体検査のしかたが足らん、そいつを素っ裸にして調べてみる

んだ」

「素っ裸に……?」

どういうわけか、素っ裸にしろときくと、机博士の顔色がにわかにかわった。

「じよ、じよ、冗談でしょう。首領かしら、服のうえからおさえても、フィルムを持っていないかくらい、誰にでもわかります。

なにも裸にしなくたって……」

狼狽ろうばいして、しどろもどろになる机博士を、四馬剣尺は三重のヴェールのしたから、ひややかにながめていたが、やがて、せせら笑うようにいった。

「机博士、面白い話をきかせてやろうか」

「面白い話……？」

「そうだ。とても面白い話だ。おまえが聞くと、喜ぶと思うんだ。

ほら、こつとうしよう骨董商のチャンファーが殺された日のことよ。おまえが

黄金メダルの半分を見つけて、まんまと両面の撮影に成功して、

ひきあげてからのことだ。間もなく顔に、恐ろしい刀かたなきず傷のあ

る、スペイン人か日本人かわからぬような、外国の船員服をきた

男が、骨董店へやってきたのだ。そして、そいつがいくらで買っ

たのかしらんが、黄金メダルの半分を買ってでていったんだ。と

ころが、すぐそのあとへまた、あのメダルを買いにきたものがあ

ったんだ。かりにこの人物をXとしておこう。Xは骨董商のチャ

ンファーからいまでていった、船員風の男が、ひとあしちがい

黄金メダルを買っていったということを聞くと、急いで、そのあとをつけていったんだ。どうだ、机博士、面白い話じゃないか」

机博士はおびえたように眼をみはって、きつと首領の三重ヴェールを見つめている。額にはビツシヨリと汗。

「ところが、スペイン人か日本人かわからぬような、顔に大きな傷のあるその男は、間もなく、かいがんどお海岸通りのホテルへ入っていた。Xもすぐそのあとからつけて入った。船員風の男は二階の隅すみのとある一室へ入っていった。Xは廊下のすみから、その部屋を見張っていたが、すると、ものの十五分もたたぬうちに、その部屋からでてきた男がある。おい、机博士、それが誰だったか知っているか」

机博士は、椅子の両腕を、くだけるばかりに握りしめている。

からだガクガクふるえて、眼玉がいまにもとびだしそうだ。首領はヴェールの奥でせせらわらって、

「あつはつは、その顔色じゃ知っていると見えるな。そうだ、その男というのは机博士、おまえだったのだ。しかも、おまえがでていったあとで、Xが部屋をのぞいてみると、そこには誰もいなかった。つまり、顔に大きな刀傷のある男とは、机博士、おまえだ、おまえだったのだ。おまえは黄金メダルの半ペラを見つけた。しかし、おまえのその姿で買いとれば、いずれ、チャンフーの口からそれがわかるにちがいない。そう考えたおまえは、外国の船員に変装して、黄金メダルを買ったのだ。顔の大きな刀傷は、で

きるだけ、素顔すがおをかえるために、絵具えのぐでかいた贗物にせものだったんだ。どうだ机博士、面白い話じゃないか」

首領かしら四馬劍尺は、大きな腹をゆすつてわらった。机博士は、まるでおいつめられた野獸やじゅうのような顔をして、三重ヴェールを見つめていたがやがてキーキー声をふりしぼって叫んだ。

「わかった、わかった、わかったぞ」

細い指を、首領の鼻さきにつきつけると、

「問うに落ちず、語るに落ちるとはこのことだ。チャンフーを殺したのはXだ。そして、Xとは首領、おまえのことなのだ」首領はしかし、せせらわらって、

「バカをいえ。おれがこの大きな図体で、町を歩いていたらどん

なに人眼をひくことか……聞いてみる、チャンフーの店は、野中のなかの一軒家じゃあるまいし、隣もあれば、近所の眼もある。横綱よこづなのような大男が、あの日、チャンフーの店の近所をあるいていたかどうか、誰にでもきいてみる」

自信にみちた首領のことばに、机博士はいつぺんにペシヤンコになつた。

「それ、木戸、波立二、なにをぐずぐずしている。そいつを早く、裸にしないか」

言下げんかに、木戸と波立二が、机博士をとりおさえた。そして水ガモのように細いからだで、キーキー声をあげて抵抗する机博士を、またたくうちに素っ裸にした。

博士は猿さる股またひとつになつて、コンニヤクのようにブルブルふるえている。そのからだを、三重ヴェールのおくから、きつと見つけていた四馬剣尺は、ふいに、椅子の腕をたたいてわらつた。

「あつはつは、さすがは机博士だ。人間金庫とは考えたな。おい、左の肩にあるその傷口はどうしたのだ」

机博士はあつと叫んで左の肩をおさえた。しかし、それはおそかった。左の肩に、少し盛りあがつた傷口は、まだ新しくて、生々しかった。

四馬剣尺はギラリと、せいりゆうとう青竜刀をぬき放つと、

「机博士、おまえはわざと左の肩に傷をつけ、そのなかに黄金メダルの半ペラをおしこみ、そのうえを縫ぬい合あわしたのだろう。いま、

おれが、その金庫をひらいてやろう」

四馬剣尺は、青竜刀をひっさげて、ゆらりと椅子から乗出したが、そのときだった。あわただしい足音がちかづいてきたかと思うと、

「首領、たいへんです。たいへんです。警官がおおぜい押し寄せてきました。誰か内ない通つうしたやつがあるんです。抜け道という抜け道は、全部包囲ほういされておりますぞ」

悲痛な声だった。

首領かしらはそれをきくと、思わず青竜刀をポロリと落した。

チャンフーの双生児ふたご

ろくてんさんさい
六天山塞のおおとりもの
の大捕物は、たちまち港町の大評判になった。

何しろ、六天山からカンヌキ山へかけて、三日三晩、焼けつづけたのだから、附近の騒ぎはたいへんだった。

「なんですか。このあいだの晩の、あのものすごい物音は……？」

「あああれですか。あれはねえ、なんでも六天山のなかに山賊さんぞくが住んでいたんだそうですよ。それが警官に包囲されたので、山塞にしかけてあつた爆弾に火を放つたんだっていいですよ」

「へへえ、山賊がねえ。そして、その山賊はとっつかまつたんですか」

「ところが、泰山たいざん鳴動めいどうして鼠ねずみ一匹でね。つかまつたのは雑魚ざこ

ばかり。大物はみんな逃げてしまったという事です」

「それは残念なことをしましたね。しかし、警察も、あれだけの騒ぎをやりながら、どうしてそんなヘマをしたんでしよう」

「それや、仕方がありませんよ。向うはヘリコプターとかなんとかいう、竹トンボの親方みたいな、飛行機をもっているんだからかないません」

「なるほど、それで高跳びたかとをしたというわけですか」

「おや、しやれをいっちゃいけません」

などと、町の噂うわさはたいへんだったが、いかにもこの噂のとおり、四馬剣尺の一味のもので、主だった連中はほとんど逃げた。

木戸と波立二、それから仙場甲二郎の三人は首領の命令で、机

博士をしばりあげ、それをヘリコプターにつんで逃げた。

そのあとで、首領の四馬剣尺は、かねて仕掛けてあつた爆弾に火をはなち、いづくともなく姿を消した。だから、警察が大騒ぎしてとらえたのは、あの小竹さんはじめ、数名の下っぱばかりであつた。

それにしても四馬剣尺はどこへ逃げたか？

根城ねじろとしていた六天山塞を焼きはらつて、かれらは解散したのであろうか。いやいや、そうは思われぬ。あの執しゅうねん念ねんぶかい四馬剣尺のことだ。いつかはまた、きつとあの偉大いだいな体に乗出して、何事かをやらかさずにはおくまいが、ここではしばらくおあずかりしておいて、春木、牛丸の二少年のほうから話をすすめていこ

う。

あやう

危く四馬劍尺の魔手ましゆからのがれた、春木、牛丸の二少年は、つ

ぎの日、山をくだると、そこで後日ごじつを約して戸倉老人とわかれた。

そして無事にわが家へかえりついたが、そのとき、牛丸平太郎のお父さんやお母さんが、どのように喜んだか、春木少年に対して、どのように感謝したか、それらのことはあまりくだくだしくなるから、ここでは書かないでおくこととする。

さて、それから当分、二人の身のうえに、別に変ったこともなく、毎日、楽しく学校へ通っていた。学校では、二人はすっかり英雄にまつりあげられ、みんなからさかんに話をせがまれた。ことに少年探偵を結成しようとしていた、小玉君こだまや横光君よこみつ、それ

に田畑君たばたなどは、春木少年ひとりにだしぬかれたことをくやしがつて、こんど何かあつたら、きつと自分たちも、仲間に入れてくれとせがんだ。春木、牛丸の二少年はむろんそれを承しょう諾だくした。こうして幾日か過ぎた。春木、牛丸の二少年の身しん辺べんには、依然として平穩へいおんな日がつづいた。いずれ落着いたら、便りをよこすといつていた戸倉老人からどうしたものか音沙汰おとさたがなかつた。ところがある日、春木少年が学校へいくと、牛丸平太郎がまじめくさつた顔をしてそばへ寄つてきた。

「春木君、ちよつと。……」

「牛丸君、なあに」

「妙なことがあるんや。ほら、あの万ばん国こく骨こつ董とう商しょうな」

「うんうん、チャンフーの店か」

「そやそや、あの店がまた、ちかごろひらいたんやぜ。ぼく昨日、海岸通りへ使いにいったついでに、あの店をのぞいたところ、表がひらいていて、ちやんとそこに、チャンフーが坐っているやないか。ぼく、びっくりして、胆きもつ玉たまがひっくりかえった」

「馬鹿なことをいつちやいけない。チャンフーはピストルで撃たれて、死んだはずじゃないか」

「そやそや、それやのに、そこにちやんと、チャンフーがいるんや。どう見てもチャンフーにちがいないのや。ぼく、てつきり幽霊かと、おっかなびっくりで近所のひとにきいてみたんやが、なんと、店にすわっているのは、チャンフーやのうて、チャンフー

の双生児ふたごの兄弟で、チャンウーちゅうのやそうな」

「へへえ、チャンフーには双生児の兄弟があつたの」

春木少年は眼をまるくした。

「そやねんて。いままで、横浜にいたんやそうやが、兄弟のチャンフーが殺されて、あとをつぐもんがないさかい、わざわざ横浜からやつてきて、店を相続したんやそうな。双生児とはいえ、それからよう似とる。近所でも、まるでチャンフーさんが、生きてかえつたようやというてるぜ」

春木少年は、しばらく、だまつて考えていたが、やがて考えぶかい調子で、

「ねえ、牛丸君」と、声をかけた。

「なあに、春木君」

「いつか戸倉老人はへんなことをいつたねえ。チャンフーが死ぬなんて、そんなことはありえないことじゃと……」

「そうそう、いうた、いうた。あら、どういうわけやろ」

「さあ、ぼくにもそこのところがよくわからないんだが、ひよつとすると、あの言葉と、チャンフーの双生児、チャンウーとなにか関係があるのじゃないかしら」

「うん、うん、なるほど」

牛丸平太郎は牡牛おうちのような鈍どんじゆう重じゆうな表情でうなずいた。

「それで、どうだろう。チャンウーというのを、ぼくらの手でさぐってみたら。……戸倉老人は、なにか変ったことがあったら、

なんらかの方法で通信するといっていたが、いまだに、何もいつてこない。それでぼく、このあいだから、腕がムズムズして仕方がないんだ。だって、このままじゃ、蛇へびの生なまごろ殺ころしてみたいで、気が落着かないじゃないか」

「そら、ぼくかて同じことや」

「そうだろう。だから、今度はこつちから積極的にでてみようと思うんだ。といつて、さしあたり、どこから手をつけてよいかわからないから、まず、チャンウーの店からさぐってみたらと思うんだが、どんなもんだろ」

「うん、そいつは面白い。それにきめたッ」

牛丸平太郎が、躍おどりあがってよろこんでいる姿を見つけて少年

探偵団の、小玉、横光、田畑の三君が、何事なにごとならんとかけつけてきた。そこで、春木、牛丸の二少年が、いまの話語ってきかせる、三人とも有頂天になってよろこんだ。

「よし、それじゃ、今日、学校がひけたら、みんな、海岸通りへいってみようじゃないか」

と、相談一決したが、この少年たちがチャンウーの店を偵察して、いったいどのようなことを発見するだろうか。

大花瓶だいかびん

さて、こちらは少年たちの話題にのぼった、海岸通りの万ばん国こく

こつとうどう
骨董堂である。

今日も今日とて、チャンウーが、店さきに坐つて、スツパスツパと水煙管みずぎせるを吸っていた。なるほど、孔子さまのように長いあごひげを生やして、トマトのように血色のよい顔をしたチャンウーは、殺されたチャンフーにそっくりだった。ただ、ちがつているのは、チャンフーは眼鏡をかけていなかったが、双生児のチャンウーは、黒い大きな眼鏡をかけている。あんまり似ているといわれるので、あるいは区別をつけるために、わざとそんな眼鏡をかけているのかも知れない。

チャンウーは眠そうな眼をして、さつきからぼんやり店に坐っていたが、どうやら客もないらしいと考えたのか、ノロノロ立っ

て、おくの間へ入っていった。そして、なかからピンとドアに鍵をかけると、これはいったいどうしたことか、いままで眠そうな眼をしていたチャンウーの顔色が、急にいきいきしてきた。眼鏡のおくでふたつの瞳が、にわかキラキラかがやいた。

チャンウーは、油断なくあたりを見廻すと、壁にかかったスペインの帆はんせん船をかけた、油絵の額がくをはずした。それから、壁のどこかを押すと、そこにパツクリ小さい孔あながあいた。金庫なのだ。かくし金庫なのだ。

チャンウーはもういちど、鋭い眼であたりを見廻すと、やがて金庫をさぐって、なかから小さいビロードばりの箱を取りだした。そして、金庫をとじ、額をもとどおりにかけおわると、大事そう

にビロードの箱を持って、机のまえまでやってきて腰をおろした。それから、眼鏡をかけなおし、ビロードの小箱のバネを押すと、ピンと蓋ふたがひらいて、なかから現れたのは、おお、なんと、黄おうご金んメダルの半ペラではないか。

チャンウーは、もういちど素速すばやい視線をあたりに投げると、うんと深いいきを吸い、それからくいいるように、その半ペラに見入っていた。それはたしかに、海賊ゲルマのこした黄金メダルのうち半はんげつ月形けいの部分である。

しかし、これはいつたい、どうしたというのだろう。半月形はんげつのその半ペラは、戸倉老人から春木少年の手にうつり、のちにひげづら男の姉川五郎に掘り出されて、骨董商チャンフーに売られ、

さらにそれを、机博士が買いとつて自分の肩の肉のなかに、かくしておいたはずではないか。

そうすると黄金メダルというのは二つあるのだろうか。

それはさておき、チャンウーは鉛筆片手に、字引きと首つびきで、黄金メダルの裏面りめんにかいてある、スペイン文字の翻訳ほんやくをはじめた。だいぶまえからやっていると見えて、はじめのほうは、スラスラいく。それはだいたいつぎのとおりであつた。

わが秘密を

とする者はいさ

人して仲よく

り聖骨を守る

のあとに現われ

メダル右破片

何しろ、メダルが半分しかないから、ここまで翻訳してみても、さっぱり意味がわからない。これからしても、どうしてもメダルの他の半分、おうぎがた扇型の半ペラがなければならぬわけである。

チャンウーは残念そうに、黄金メダルの半ペラを見つめていたが、また思いなおしたように、鉛筆をとりなおして、翻訳をつけていったが、そのとき、店のほうで人の足音がした。

チャンウーはそれをきくと、あわててメダルをビロードの箱に入れ、壁のかくし金庫におさめると、翻訳しかけていた紙を、クチャクチャにかみくだいて、それから何食わぬ顔をして、店のほ

うへでていった。

店へきた客は、立花カツミ先生であつた。

立花先生はチャンウーの顔をみると、ギョツとしたように眼をみはつたが、すぐ気がついてにっこり笑つて、

「ああ、びつくりした、あなたがあまり亡くなつたチャンフーさんに似ているので、あたし幽霊かと思ひましたわ。そうそう、あなたとチャンフーさんは双生児ですつてね」

「そう、わたしとチャンフー、双生児の兄弟、あなた、チャンフー、知っていますか」

「ええ、以前いちど、この店へきたことがありますので、……チャンフーさん、お気の毒なことをしましたわね」

「そう、弟、可哀そう、なんとかして私、犯人さがしたい」

「いまにきつとわかりますわ。警察でもほっておきはしませんもの。あたしだって、いちどお眼にかかった御縁ごえんがありますから、心当りがあつたらお知らせします」

「ありがとうございます。ときに、今日は何か御入用ですか」

「いえ、実は、今日は買物にきたんじゃないのです。反対にこの店で買っていたきたいものがございました……」

「はあ、結構です。品と値段によつては、なんでもいただきます」
「そう、じゃ、ちよつと待つて……」立花先生はいったん店をでていったが、すぐ、ひきかえしてきたところを見ると、二人の男をつれており、その男たちは高さ四尺、直径一尺五寸もあるよう

な、大花瓶をかかえていた。

男たちがその大花瓶を、店のほどよいところへおろしてでいてくと、立花先生はチャンウーのほうをふりかえり、

「買っていただきたいというのは、これですの。これは父があなたのお国を旅行した際、北京ペキンで買ってきたもので、あたしとしては手離しにくいものですが、急に金のいることができましたので……」立花先生は、さすがに恥しそうに顔をあからめ、もじもじしていた。

「なるほど、これは立派な花瓶、値段によっては買いましょう」チャンウーは花瓶のおもてを、なでたり、さすつたりしていたが、ふと、なかをのぞいてみて、妙な顔をして眉まゆをしかめた。

「おや、この花瓶、なかがつまってますね」

「そうなのです。父が買ってきたときからそうなっているんです。だから父はこの花瓶のことを、開あかすの花瓶などと笑ってました。が、……きつと、なにかわけがあつて、花瓶をつめてしまったのでしようね」

チャンウーが不思議に思ったのも無理ではない。その花瓶は首のところまでセメントがつめてあつて、叩くとコツコツかたい音がした。チャンウーは、しばらく考えていたが、

「いや、これは珍しい花瓶です。しかし、これくらい大きな花瓶になると、花を飾るよりも、花瓶自身が飾りものです。で、いくら御入用ですか」

「まあ、それじゃ買ってくださいますの。実は、……」

と立花先生が金額をきりだすと、チャンウーは笑って、

「それは高い。なかのつまった花瓶なんて、やっぱり疵物きずものも同様ですから、その半分ぐらいでなくちや……」

「あら、半分はひどいですわ。もう少しフンパツしてくださいな」と、しばらくおしもんどう押問答をしていたが、いったい、どれくらいで折れあつたのか、それから間もなく骨董商の店をでていく立花先生の顔色をみると、いかにもうれ嬉しそうな微笑がうかんでいた。

チャンウーはそのうしろ姿を見送って、それから、不思議そうに首をかしげ、しばらく見事な大花瓶を、なでたりさすつたりしていたが、やがて表のドアをしめると、奥のひと間へひっこんだ。

もう日が暮れているのである。

怪人現れる

チャンウーの店の隣は、四階建のビルディングになっていて、一階は貿易促進展覧会の会場になっているが、二階からうへは貸事務所かしじむしよになっている。

ところが、都合のいいことには、その三階に、少年探偵団のひとり、小玉君のお父さんの事務所があつた。

少年探偵団の一行五名は、学校がひけると、海岸通りへ出向いていって、なにくわぬ顔で、チャンウーの店のまえを通つたが、

「なんだ、ここなら、お父さんの事務所のとなりじゃないか」

と、小玉君がささやいたので、それじゃお父さんをお願いして、しばらくその事務所の片隅かたすみをかりようということになった。

そこで五人の少年は、三階にある小玉商事会社の応接室へあがつていったが、ますます都合のよいことには、その応接室はチャンウーの店のがわにあり、窓からのぞくと万国骨董商が眼の下に見えた。

「ああ、こいつは都合がいいや。小玉君、なんとかしてお父さんに、しばらくこの部屋をかして下さるようお願いしてくれたまえ」

「いいとも。ぼくのお父さんは、たいへん物もの分わかりのいいひとだ

から、きつと承知してくださるよ」

やがて、応接室へでてきた小玉氏というひとは、いかにも物分りのよさそうな紳士であつた。小玉氏は息子の小玉少年から話をきくと、はじめは眼をまるくして驚いていたが、一同がかわるがわる熱心にお願いとすると、

「なるほど、それじゃいつか牛丸君を誘拐ゆうかいした、六天山塞ろくてんさんさいの山賊のゆくえをさぐるために、チャンウーの店を監視かんしするとうんだね」

「そうです。そうです。ぼくらは警察に協力して、一日も早くあの山賊をとらえたいのです」

春木少年が、熱心にお願いとすると、小玉氏はにこにこ笑つて、

「よしよし、いや、いまどきの少年、すべからくそれくらいの勇気がなければならぬ。いいとも、君たちの頼みをきいてあげよう。しかし、ここに条件がある」

と、いつて、小玉氏はつぎのような条件をだした。

まず、第一に、自分たちがまだ子供であるということをよく心こころえ得て、決して危あやうきにちかよらぬこと。第二に、何か変つたことを発見したら、すぐに警察へ報告し、みずからは手だしをしないこと。第三に、夜九時までみんな揃つて帰宅すること。

「わかりました。お父さん。ぼくたちは決して、お父さんに御心配をかけるようなことはしません」

春木少年が一同を代表して断だんげん言すると、小玉氏はにこにこ笑

つて、

「よしよし。それじゃ、今夜から監視をはじめのだろうが、君たち、飯はまだだろ。それじゃ、前まえ祝いわいに夕飯を御馳走しよう」と、親切な小玉氏は、五少年をひきつれて、近所の中華料理店へいって夕飯をふるまつた。

「それじゃ、君たちの成功をいのるよ。しかし、くれぐれもいつとくが、自分たちがまだ子供であることを忘れちやいかんよ」小玉氏から激げ励きと忠ちゆう告こくをうけて、中華料理店のまえでわかれた五少年が、すでに日の暮れた路みちを、ビルディングのほうへかえつてくると、そのとき、万国骨董商のなかからとびだしてきた婦人があつた。

「あつ、あれは立花先生じゃないか」春木少年がいちはやく、先生のすがたを見附けて注意すると、

「そうだ、そうだ。立花先生だ。先生は、なんの用があつて、こんなところへきたんやろ」

牛丸平太郎も不思議そうな顔をしている。小玉、横光、田畑の三少年もギツクリとしたような顔を見合せた。しかし、幸い立花先生は気がつかなかったらしく、男のような足どりで、スタツスタツと黄昏たそがれの闇のなかに姿を消した。

「どうも変だね。ぼくはまえから、立花先生を変だと思つていたんだよ」

春木少年はあるきながら、考えぶかそうに呟つぶやいた。

「変て、どういうふうにな？」小玉少年がききかえした。

「だってね、このまえ、チャンフーが殺された日にも、立花先生は万国堂のまえを通りかかって、飾窓をのぞいたというんだろ。そして、そのとき、飾窓のなかには、黄金メダルの半ペラが飾ってあったんだ。しかもそのつぎの日、金谷先生がそのことをしゃべると、立花先生、とてもいやな顔をしたという話だよ」

「うん、そういえば、立花先生はよく学校を休むね。それにどこへいくのか、ときどききしゆくしや寄宿舎からいなくなるという話だよ」田畑少年がいった。

「よし、それじゃ、明日から手分けして、誰かが立花先生を監視することにしようじゃないか。監視なら、子供にだってできるも

の」横光少年の言葉だった。

「うん、それがいい。いずれ、明日になったら、誰が立花先生の監視にあたるかきめよう」

こうして、また、新しい探偵の方針がたつたので、一同は、満足して、三階の応接室へかえつてきた。窓から見ると、チャンウーの店から、ほの暗い光がもれている。

「あ、見給え。チャンウーの店には天窓てんまどがあるよ。あそこから覗のぞけば、店の様子がよく見えるにちがいないよ」

「そうや、そうや。ほく、ひとつあの屋根へおりてみようか」

牛丸平太郎が、ハリキつて、窓からからだを乗りだすのを、春木少年はおしとどめ、

「いや、ちよつと待ちたまえ。もう、しばらく、あたりが暗くなるまで待とう」

それから一時間ほど待つと、あたりはすっかり暗くなった。チヤンウーの店の天窓からは、あいかわらず、ほのぐらい光がもれている。

「春木君、もう、そろそろ、ええやないか」牛丸平太郎は、さつきから、腕がムズムズしているのである。

「そう。もうそろそろいい時刻だね。ところで、誰が偵察にいくか、これは公平を期^きしてくじ引きということにしよう。ひとりじや心細いから二人一組となつていくことにしようじゃないか」

春木少年のこさえた、五本のこよりを引いた結果、牛丸少年と

春木君がいくことになった。ほかの少年たちは失望したが、これまた、あとでどんな役があるかも知れないからと慰めて、いよいよ、春木、牛丸の二少年が、偵察にいくことになった。

ちようどいいあんばいに、このビルディングの側面そくめんには、火事などの場合にそなえて、非常梯子ひじょうばしごがついている。その非常梯子は、チャンウーの店のすぐそばをとおっており、その間、半間はんげとはなれていない。春木、牛丸の二少年は人眼をさけるために、窓から外へでて、軒蛇腹のきじやばらをつたつて非常梯子にとびうつつた。それはかなり冒険だったけれど、身の軽い二少年には、大してむずかしい仕事でもなかった。

非常梯子をつたつて一階おけると、すぐ眼の下にチャンウーの

店の屋根がある。二少年は猿のように身軽にその屋根にとびうつた。屋根はかなりの傾斜けいしゃだが、身のかるい少年には、天窓のところまで這はつていくのは、大してむずかしい仕事でもなかつた。天窓には厚い針金入りガラスがはまつている。それは昼間、採さいこ光うをよくして、陳列品ちんれつひんをひき立たせるためである。

ふたりが天窓まで這つていつてなかを覗くと、ほの暗い電灯のなかに、珍奇ちんきな仏像ぶつぞうや、奇怪な大時計や、古めかしい鎧よろいなど、さまざまな骨董品が、ところせまきまでにならんでいた。そして、店の一隅ひとすみに、さつき立花先生がもちこんだ、あの大花瓶だいかびんもおいてあつた。

春木、牛丸の二少年は、息をころして、このあやしくも、風変

りな店のなかを覗いていたが、ふいに春木少年がギユツと力強く、牛丸少年の腕をにぎった。

「ど、どうしたの」

「しっ、静かに！ あの大花瓶をござらん」

押しころしたような春木少年のささやきに、牛丸平太郎もなげなく、花瓶のほうへ眼をやったが、そのとたん、ゾツとするような恐ろしさが背筋をながれた。

ああ、見よ！ 大花瓶につめてあったセメントが、ポツカリ中から押しつけられると、その下から、ニユーツと一本の腕がでたではないか。

「あっ！」牛丸平太郎は危くあやう叫び立てるところを、急いで口に蓋ふた

をした。

大花瓶のなかに誰かいるのだ。そしてそいつがいま、花瓶のなかからでてこようとしているのだ。

二少年の胸はドキドキ躍った。額からビツシヨリと汗が流れた。二人は夢中になって、天窓のわくにしがみつき、眼を皿のようにしてチャンウーの店をのぞいている。

大花瓶のなかからは、また一本の腕がでた。そして、二本の腕は、しばらく花瓶のふちを握ってモガモガしていたが、やがて、かるわざし軽業師のように、ヒヨイと花瓶のふちへ這いのぼったのは、ああ、なんとということだ！

それは世にも不思議な小男ではないか。

小男は全身に、縫いぐるみみたいな黒い服をびったりつけていた。そして、頭には服にぬいつけた三角型のトンガリ頭巾ずきんをスツポリかぶり、顔には大きな仮面かめんをつけていた。だから、顔はサツパリ見えなかったが、その気味悪さといったら、筆にも言葉にもつくせないほどだった。

小男は猿さるのように花瓶のふちにしゃがんだまま、しばらくあたりをうかがっていたが、やがて、ひらりと音もなく床ゆかのうえにとびおりた。

春木、牛丸の二少年は天窓のうえから、手に汗握って、この様子を見つめているのである。

奇怪な男と猫ねこおんな女

ああ、奇怪なる男、猿のような男——

いつか机博士が、六ろくてんさんさい天山塞の頭目とうもく、四馬劍尺しばけんじやくの姿を、レントゲンで透視とうししたことがあったが、それは脚にながい竹馬をゆわえつけた小男であった。ところがそののち机博士が、頭目の脚にさわってみたところ、それは竹馬などではなくて、まぎれもなく人間の脚であった。

机博士は、矛盾むじゆんするふたつの発見にびつくりしたが、今宵こよいチヤンウーの店にしのびこんだのは、まぎれもなく、小男。してみれば、机博士のレントゲンに狂いはなく、四馬劍尺の正体は、や

はり脚に竹馬をゆわいつけた小男であろうか。しかし、そうだとすると机博士がさわってみた四馬剣尺の脚は、なんと説明すべきだろうか。

それはさておき、床へおりた小男は、しばらくじつとあたりの様子をうかがっていたが、やがて壁のそばへ這いよると、ポケットから取出したのは三十センチくらいの棒である。それはちようど、管^{かん}絃^{げん}楽^{がくだん}団の指揮者^{しきしや}が使う指揮棒^{しきぼう}のようなものだった。

おやおや、あんなものを何にするのだろうか。と、春木、牛丸の二少年が、屋根のうえから固^{かた}唾^{たず}をのんで見ているとは、もとより知らぬ小男、しばらくその棒をひねくりまわしていたが、してみるとみるみる棒はのびて、三メートルほどの長さになった。

わかった、わかった、その棒は、伸縮自在の魔法棒なのだ。それにしても、そんな棒を何に使うのかと見ていると、小男はその先端せんたんに鉤かぎのようなものをとりつけた。

おやおや、変なことをするわいと、なおも二人が一生懸命、天窓にしがみついてみると、小男はその鉤かぎ棒で高いところにあるメイン・スイッチをひっかけて切ってしまった。とたんに、家中の電気という電気が消えてあたりはまっくら。

春木、牛丸の二少年は、思わず顔を見合せた。

すると、そのとき闇やみのなかから、店をつつきっていく足音がきこえたかと思うと、ガチャリと鍵をひらく音。やがて、ドアが薄目にひらいて、誰やら店のなかへしのびこんだが、すぐドアがし

まったので、その姿はよく見えなかった。

「男がドアをひらいて、誰かを呼びこんだんやな」

「そうだ。男は仲間をしのびこませるために、大花瓶のなかに、いままでかくれていたんだよ。それにしても、忍びこんだのはどういうやつだろう」

二人がこんなささやな囁きをかわしているとき、したでもチャンウーが、なんとなく怪しいあや気配けはいに気づいたのか、懐中電気を片手に持って、奥のドアから現れた。

「誰かいるのか」とたんに轟ごうぜん然とピストルが鳴ってチャンウーの手から懐中電気が、木こっ葉は微塵びじんとくだけで散った。

「あ、だ、だ、誰だ！」

「ねこおんな猫女よ」

「な、な、なに、猫女……」

と、闇のなかでチャンウーの声が大きくあえいだ。

「ええ、そう、暗闇のなかで、ちゃんと眼の見える猫女よ。逃げても駄目。ちよつと相談があつてやつてきたんだから、おとなしくしていて頂ちようだい戴。バカ！ 何をする！」

またもや、ズドンとピストルの音。あつという悲鳴ひめいとともに、何やらゴトリと床に落ちる音がした。

「ほ、ほ、ほ、だからいわないことじゃない。闇の中でも眼の見える、猫女だといつてるじゃないの。ポケットからピストルをだそうとしたって、ちゃんと見えているんだから」

春木、牛丸の二少年は、顔見合せて驚いた。それじゃ猫女という女、ほんとに闇の中でも眼が見えるのか。

「さあ、これであたしのいうことが、嘘うそじゃないってわかったでしょう、わかったらおとなしくしておいで。待つてあげるから、早く右手に繃ほうたい帯たいをしておしまい。ほらほら、そんなに血が流れているじゃないの。ああ、やつと繃帯ほうたいができたわね。それじゃ、奥の部屋へいきましよう。ここじゃ話もできないから」

「いったい、話つて、何んのことだ」

「黄金おうごんメダルのことよ」

「黄金メダル？ お、黄金メダルってなんのことだ」

「ほ、ほ、ほ。白ばくれたつて駄目。こっちは何度もいうように、

闇のなかでも眼の見える猫女よ。おまえがいまどんな顔をしたか、ちやんと知ってるよ。これ、よくお聞き。おまえのふたご双生児のチャンフーは、いつか姉川あねがわごろう五郎という男から、黄金メダルの半ペラを買いとった。そして、それから間もなく、顔に大きな傷のある、スペイン人みたいな男に、黄金メダルの半ペラを売りつけたが、そのメダルはにせもの贋物だったんだよ。だから、この店にはまだ、本物のメダルがあるはずなんだ。それをここへだしておくれ」

「しかし、それやア、チャンフーの買ったのが、贋物だったんじゃないかったのか」

「お黙り！」猫女は鋭い声で、

「こっちはちやんと調べがいきとどいているのよ。姉川五郎とい

う男にも当たってみて、そいつがどこで黄金メダルを手に入れたかわかっているんだ。それはたしかに贋物じゃなかったのよ。チャンフーは本物をどこかへしまいこんで、贋物を飾窓に飾っておいたんだ。さあ、ここでは話ができない。奥へ行ってゆつくり話をつけようじゃないの」

それからしばらく、チャンフーと猫女のおしもんどう押問答をする声がつづいていたが、やがて、猫女のピストルにきようはく脅迫されて、チャンフーは奥の一間へ入っていった。それにつづいて猫女が入っていくと、ボタンとドアのしまる音。話声はそれきり聞えなくなつて、チャンフーの店は墓場のような暗さ、静けさ。

春木、牛丸の二少年は、ほおつと顔を見合せた。

「春木君、猫女で、すごいやつやな」春木少年はそれに答えず、しばらくは何か考えていたが、やがて低い声で、

「ねえ、牛丸君、いまの猫女の声ね、君、あれに聞きおぼえがあるような気がしなかった？」

「えつ、さあ、ぼくは気がつかなんだが、誰の声に似ていたんやね」

「いや、君が気がつかなかったとすれば、ぼくの思いちがいだろう。だけど牛丸君、さっきの小男はどうしたんだろうねえ」

「さあ。あいつも奥へ入っていったんやないやろか」

二人がそんなことを囁ささやいているとき、奥の部屋から苦しそうなうめき声もれてきた。チャンウーの声なのだ。しかも、世にも

苦しそうなうめき声……。

春木、牛丸の二少年は、ぎよつとしたような顔を見合せた。

「春木君、大変や、チャンウーが拷問されてるんやないやろか」

「そうだ、そうだ、牛丸君、さっきの部屋へかえろう」

「さっきの部屋へかえつてどうするんや」

「警察へ電話をかけて、お巡りさんまわにきてもらうんだ。さっき小

玉君のお父さんにいわれたろう。自分が子供であることを忘れちゃいけないって。だからお巡りさんに電話をかけて猫女と小男をつかまえてもらうんだ」

二人は、そつと、チャンウーの店の屋根からすべりおりると、ビルディングの非常梯子を、脱兎だつとのごとくかけのぼっていった。

空かける悪魔^{あくま}

春木、牛丸君たちの、少年探偵団が電話をかけたとき、ちようどさいわい、警察にいわせしたのは秋吉警部^{あきよしけいぶ}。

秋吉警部を諸君もおぼえてられるだろう。チャンパー事件の担当者だが、その事件が進展せず、どうやら迷宮^{めいきゆう}入りをしそうな模様に、業^{ごう}を煮^{にや}していたおりからだけに、少年探偵団からの電話をきくと、こおどりせんばかりによるこんだ。

「よし、それじゃこれからすぐいく。ときに君たちは何人いるんだ」

「はい、少年探偵団は同志^{どうし}五人であります」

「それじゃね、みんなで手分けして、万国堂ばんこくどうの周囲を見張つていてくれ。しかし、くれぐれもいつておくが、よけいなことに手をだすな。われわれがいくまで待つているんだぞ」

「承知しょうちしました。できるだけ早くきてください」

電話をきつて春木少年、警部の言葉を一同につたえていたが、何思つたのか、急にはつと顔色をかえた。

「どうしたの、春木君、何かあつたの？」

横光君が不思議そうに訊たずねるのを、しつとおさえた春木少年。

「牛丸君、あれ……あの物音……？」

「なんや、あの物音……」

牛丸平太郎もギョツとして、春木君といつしよに耳をすませた

少年たちはギョツとしたように、暗闇のなかで顔見合せたが、「それにしても、いまごろどこへいくつもりだろう」

と、田畑君が訊ねた。

「ひよつとすると、万国堂めざしてやってくるかも知れないよ。牛丸君。横光君」

「春木君、なんや」

「君たち二人は万国堂の表のほうを見張ってくれたまえ。それから、小玉君と田畑君は、万国堂の裏口の見張りをしてくれたまえ」

「よっしゃ。わかった。しかし、春木君。君はどうするんや」

「ぼくはここにのこつて、この窓から万国堂を見張っている。もうそろそろ、警部さんがくる時分だから、みんな早くいってくれ

たまえ」

「よつしや、春木君、気をつけたたまえよ」

「だいじょうぶ」

「大丈夫、君たちこそ気をつけたまえ。警部さんがくるまで、むやみに手だしをするんじゃないよ」

「わかった。わかった。さあ、みんないこう」

牛丸平太郎を先頭に立てて、四人の少年がバラバラとビルディングからとびだしていったあとには、春木少年がただひとり、暗い応接室にとりのこされた。窓のそばによつてみると、ブーンブーンというヘリコプターの爆音は、いよいよこちらへちかづいてくる。下をみると、万国堂はあいかわらずまっくらだ。ああ、いま、万国堂の奥では、どのようなことが行われているのであろう

か。

春木少年は爆音のちかづく空のかなたと、万国堂のくらいてんま天窓どとを、手に汗にぎって見くらべていたが、ちようどそのとき、警部の一行が到着したらしい。

万国堂の表と裏から、けたたましくドアを叩く音たたとともに、

「開ける、開ける、ここを開けんか」

と、怒号どごうする声がきこえた。

「ああ、有難い、警部さんがやってきた……」春木少年はにわか
に気のゆるむのおぼえたが、そのとき空のかなたから忽然こつぜんと
して現われたのは、見覚えみおぼのあるヘリコプター、しかも進路は万
国堂の方向である。折からの半月はんげつを翼つばさにうけて、ゆうゆうとし

てこちらへちかづいてくる。

下では警部の一行が、万国堂の表と裏からしきりにドアを叩いていたが、なかから返事がないとみるや、もうこれまでと、ドアをぶっこわしにかかった。しめた！ もうこうなれば袋の中の鼠ねずみも同然、あの奇怪な小男も猫女も、逃出すみちはどこにもないのだ。

春木少年はほつと胸を撫なでおろしかけたが、いやいや、安心するのはまだ早いと気がついた。気になるのはあのヘリコプターだ。ひよつとするとあのヘリコプターは、小男や猫女を、救いだしにきたのではあるまいか。

そうなのだ。やっぱりそうだったのだ。ヘリコプターはチャン

ウーの店のうえまできると、ピタリと虚空こくうに停止して、しきりに地上を偵察している。

と、そのとき、万国堂のドアが破れた。バラバラと表と裏から、警部の一行が乱らん入にゆうする。おそらく少年探偵団の同志たちも、いつしよになってとびこんだことだろう。

だが、警部たちがとびこんだのとほとんど同時に、万国堂の天窓がガチャンとこわれた。そして、そこからモゾモゾ屋根へはいあがってきた人物をみたとき、春木少年は胆きもつ玉たまがでんぐりかえるほど驚いたのである。

ああ、なんとということだ。天窓の下から這はいだしてきたのは、横綱のような大男ではないか。裾すそのひきずるような中国服を着て、

頭には花笠はながさのような冠かんむりをかぶっている。その冠のふちには、三重のヴェールが垂たれていた。

「あつ、四馬剣尺しばけんじやく！」春木少年は、心の中で思わずさげふと、くらい窓のすみでふるえあがった。

春木少年はいままで一度も、四馬頭目にあつたことはない。しかし、異様いようなその風態ふうたいは、牛丸平太郎からなんども聞かされていた。鬼にもひとしい四馬頭目の残ざん忍にんぶりは、戸倉老人や牛丸平太郎から、耳にたこができるほど聞いていた。

その四馬頭目が、警官たちに包囲された、万国堂の天窓から、忽然として現れたのだ。春木少年はびっくりすると同時にあつげにとられた。四馬剣尺はいままでどこにかくれていたのだろう。

いやいや、それにもまして不思議なのは、猫女や小男はどうしたのだろう。……

春木少年が茫然^{ぼうぜん}として、窓のなかに立ちすくんでいるとき、万国堂の屋根に立った四馬剣尺、かくし持った懐中電気をうえに向けると、虚空に三度輪をえがいた。と、同時に、ヘリコプターからバラリとおりてきたのは一条の縄梯子^{なわばしご}。四馬剣尺はヨタヨタとその縄梯子に手をかけた。

ああ、このまま捨てておけば、四馬剣尺は逃げてしまう。……春木少年はたまらなくなつて、窓から乗りだして大声で叫んだ。「ああ、警部さん、こつちです、こつちです。悪者^{わるもの}は屋根のうえから逃げていきます」

ちようどそのとき四馬剣尺は、屋根をはなれて、春木少年の鼻のさきまでできていたが、その声をきくとズドンと一発！ 春木少年はあつと叫んで床のうえに身を伏せた。

しかし、春木少年の叫ぶまでもなく、警部の一行もヘリコプターの爆音に気がついていて、それ、屋おくじょう上かみが怪しいというのでバラバラと屋根のうえへあがつてきたが、無念！ ひとあしちがい四馬剣尺は、縄梯子にブラ下ったまま、ゆうゆうとして虚空を逃げていく。

ズドン、ズドン！ 警官たちの手から、いつせいにピストルが火をふいたが、もうこうなれば後あとまつりの祭だ。四馬剣尺のブラ下ったヘリコプターは、折からの半月の空を、しだいに遠く、小さく、

すがたを消した。

ヘリコプターの爆音が、遠ざかるのを待つて、床から這いあがった春木少年、非常梯子ひじょうはしごづたいに万国堂の屋根へおりていくと、「ああ、君か、さつき電話をかけてきたのは……せつかく注意してもらいながら、残念にも悪者はとりにがしたよ」と、

秋吉警部が歯ぎしりしながらくやしがつている。

「えっ、それじゃ、小男や猫女もにがしたのですか」

「小男や猫女……そんな、みょう妙なやつはどこにもいないぜ」

「そんなはずはありません。天窗から逃げだしたのは、横綱のような大男です。小男や猫女は、たしかにまだ万国堂のなかにいるはずです」

春木少年の言葉に、警官たちや少年探偵団の同志が手分して、万国堂の隅から隅までさがしてみたが、小男も猫女も、どこにもすがたが見られなかった。

ああ、いるべきはずの小男や猫女がすがたを消して、いるはずのない四馬剣尺が、忽然として万国堂の天窓から現われたというのは、いったい、どういうわけであろうか。……

春木少年はそのことについて、深くかんがえこんでいたが、やがて思いだしたように、

「それはそうと、この家の主人、チャンウーさんはどうしたのですか」と、警部にたずねた。

「ああ、チャンウーか。あの男は可哀かわいそうに、ひどい目にあわさ

れているよ。まあ、こつちへきてみたまえ」

警部に案内されて、奥のひと間へ入ったとたん、春木少年は思わずあつと、ハンカチで顔をおさえた。部屋のなかの大火鉢おおひばちには、炭火すみびがかつかつとおこつていて、あたりいちめん、肉のこげにおるような匂いにおが充満じゅうまんしているのだ。

「見たまえ。チャンウーの足を……あの足を炭火のうえにのせ、拷問ごうもんしていたんだ。ひどいことをするやつもあればあるもんじやないか。まったく鬼だよ、悪魔だよ」

見れば椅子にしばりあげられたチャンウーの足は、いたいたしく火ぶくれがして血がにじんでいる。チャンウーはこの拷問にたえかねて、ぐったりと気をうしなっているのだったが、ひと眼、

その顔をみたたん、春木少年は思わずあつと床からとびあがった。

「あつ、こ、こ、これは戸倉老人！」

ああ、チャンウーとは戸倉老人の変装へんそうだったのである。

怪船かいせん 黒竜丸こくりゅうまる

話變つて、こちらは四馬頭目を救いだしたヘリコプターである。海岸通りの万国堂のうえをはなれると、進路をしないで西にとり、須磨すまから明石あかしのほうへやってきたが、そこで急に進路をかえると、南方の海上へでていった。そして、淡路島あわじしまの東海岸ぞい

に、大阪湾の出口のほうへでていったが、やがて淡路の島影から、意味ありげに明滅する灯火あかりをみると、しだいにその上空へすすんでいった。

ヘリコプターに向つて、発火信号しんごうをしているのは淡路の島かげに停泊ていはくした、三百トンくらいの小汽船しょうきせん、その名を黒竜丸という。

ヘリコプターは黒竜丸のうえまでくると、ピタリと進行をとめ、しだいに下降してくる。やがて繩梯子のさきが甲板かんばんにふれると、四馬剣尺はよたよたと、繩梯子から甲板におり立った。それを見て、バラバラとそばへ寄つてきたのは木戸と仙場甲二郎。波立二はヘリコプターの操縦をしているのである。

四馬劍尺は甲板に仁王立におうだちになり、

「おまえたちは向うへいけ。それから五分たつたら、机博士をおれの部屋へつれてこい。よいか、わかったか。わかつたら早くいけ」

「しかし、首領かしら、首尾はどうだったのです。本物の黄金メダルの半ペラは、手に入ったのですか」

「そんなことはどうでもいい。早くいけといえばいかんか」

首領はわれがねのような声で怒号どごうした。これは四馬劍尺の不機嫌げんなときの特徴である。そんなときにうっかりさからうと、毒どく棒ぼうの見舞いをうけるおそれがある。さわらぬ神に祟りなしとばかりに、

木戸と仙場甲二郎は、こそこそと甲板から下へおりてい

つたが、そのすがたが見えなくなつてから、四馬剣尺はよたよたと歩きだした。

不思議なことに、四馬剣尺、いついかなる場合でも、自分の歩くところを乾分こぶんのものに見られるのを、ひどく嫌うくせがあつた。唯一度、机博士にレントゲンにかけられたときいっしょに博士の部屋までいったが、そのときとても毒棒で、机博士を脅おどかして、決してうしろを向かせなかつた。そして、部下にあうときは、いつもあの竜の彫物ほりもののある大きな椅子によつてゐるのだ。

それはさておき、五分たつて木戸と波立二が、机博士をひつたてて頭目の部屋へ入つていくと、四馬剣尺はいつものように、大きな椅子にふんぞりかえつていた。

「どうだ、机博士」四馬剣尺はわれがねのような声で、

「肩の傷はなおったか。貴様があんなところへメダルをかくしておくものだから、つい荒療治あらいようじもせにやならん。しかも貴様があんなに苦勞して、手に入れたり、かくしたりしていた黄金メダルの半ペラが、贖物にせものだったというのだから、こんないい面つらの皮かわはない。は、は、は、人を呪のろわば穴二つとはこのことだな」

「ちがう、ちがう、そんなはずはない」

木戸と波立二に、左右から手をとられた机博士は、金切かなぎり声をふりしぼった。

「あれが贖物だなんて、そんな、そんな……あれは時代のついた古代金貨こだいきんかだ」

「そうよ、時代のついた古代金貨だ。しかし、やっぱり贋物なんだ。まあ聞け、机博士、そのわけをいま話してやろう」

四馬剣尺はゆらりと椅子から乗りだすと、

「貴様も知つてのとおり、あのメダルは、海賊王デルマが、埋め
た財宝のありかをしるして二つにわり、ひとつをオクタン、ひとつをヘザールというふたりの部下に譲つたのだ。このヘザールの
子孫しそんというのがこのおれ、即ち四馬剣尺様だ。それからオクタン
の子孫とくらやそまるというのが、あの戸倉八十九丸じや。ヘザールの子孫もオク
タンの子孫も、宝をさがして東洋の国々を遍歴へんれきしているうちに、
代々東洋人と結婚したから、しだいに東洋人の血が濃こくなつてい
つたのじや。ところで、海賊王デルマにはもう一人、ツクローワと

いう部下がおつたが、こいつは肚黒いやつで、デルマを裏切つたことがあるので、放逐ほうちくされて宝のわけまえにあずからなかつた。それを怨うらんでツクーワは、ヘザールとオクタンの持つている半ペラを、しつこく狙つていたが、ただ一度だけ、オクタンの半ペラを手に入れたことがある。そのときツクーワはその半ペラの贖物をこさえておいたのだが、その後間もなく、オクタンにつかまり、殺されて、半ペラは本物も贖物も、ふたつともオクタンの手に入ったのじゃ。貴様が手に入れて、虎とらの子のように後生大ごしょうだい事じにしていたのは、即ち、その昔ツクーワのつくつた贖物で、しかも、ツクーワとは誰であろう、机博士、貴様の先祖だぞ。どうだ、これでわかつたらう。先祖がつくつた贖物に、子孫のものが

欺あざむかれる。世の中にこれほど滑稽こっけいなことがあるうか。わっはっはっ！」

われ鐘のような声で笑いとばされ、机博士はいつぺんにペシャンコになった。四馬剣尺はしばらく、腹をかかえてわらっていたが、やがてやっとな笑いやめると、

「いや、しかし、机博士、おれはやっぱり貴様に礼をいわねばならぬわい。おれは今夜、戸倉のやつがチャンウーという中国人に化けていることを知って、忍びこんで、本物を吐きださせようと拷問ごうもんしたが、強情ごうじょうなやつでとうとう吐きださなかった。それで、ものはためしに贖物で間にあわそうと思つてなのだ。これがヘザールからつたわった扇おうぎ型の半ペラ、これは本物だ。

それからこつちが、机博士の肩の肉からでてきた、三日月型の半ペラ、こいつはいまいうとおりの贗物だ」

と、四馬剣尺がデスクのうえにならべてみせた。二つの黄金メダルの半ペラをみて、木戸と波立二が思わずあつと顔見合せた。

「頭目、そ、その扇型のやつはどうしたのです。それはいつか、猫女めに横奪よこどりされたはずじゃありませんか」

木戸の言葉に、四馬剣尺ははっとした様子だったが、すぐさりげなくせせら笑つて、

「なに、猫女から取りもどしたのよ。たかが知れた猫女、取り戻すのに雑作ぞうさくはないわい。さて、この半ペラをふたつあわすと、われ目も文句もぴつたりあう、だから、ここに彫つてあるこの文句

は、贗物とはいえ、本物どおりに彫つたにちがいないと思うんだ。

みる、これが苦心くしんの末すえ、おれが翻訳した文章なのだ」

四馬剣尺が、ふところより取り取り出した紙片かみきれをみて、机博士は

禿鷹はげたかのようにどんらんな眼を光らせた。

そこには、こんなことが書いてある。

三日月型の分

わが秘密を

とする者はいさ

人して仲よく

り聖骨を守る

のあとに現われ

メダル右破片

左の穴に同時

ただちに

強く押すべし

正しく従うなら

らの前に開かれん

扇型の分

うけつがん

かいをやめ両

ヘクザ館の塔にのぼ

二匹の鰐魚がくぎよを取除きそ

たるそれぞれの穴に金

を右の穴に左破片を

に押入れ、それより

ふたつのメダルを

なんじ 汝なんじらわが命令に

ば金庫は自ら汝

戦闘準備

残虐な悪魔の頭目とうもく、
四馬剣尺のために、
両脚に
大火傷おおやけどをし

た戸倉八十丸老人は、あれからすぐに、病院へかつぎこまれたが、さいわい、その後、経過は良好で、一週間もすると、ステツキ片手に、病院の庭を、散歩できるようになった。

その戸倉老人を、毎日のように見舞いにくるのは、少年探偵団の同志五人。探偵長株の春木少年をはじめとして、牛丸平太郎に田畑、横光、小玉の三少年である。

戸倉老人というひとは、海賊の宝を追うて生涯をはげしい冒険にささげてきただけに、いまだ家庭のあたたかみというものを知らず、ましてや、子供の可愛さなど、いままで一度も考えたことのないひとだが、今度、こうして思わぬ負傷をし、病院で退屈たいくつをもてあましている折柄おりから、毎日のように少年たちの見舞いをう

けると、いまさら子供の可愛さ、無邪気さむじやきというものをひしひしと感じ、平和な生活へのあこがれを、日一日と強くするのであった。

「ああ、おれももう年だ。一日も早く危険な冒険の世界から足をあらって、毎日こうして、子供たちと楽しく暮らしていききたいものだ」

戸倉老人の心には、そういう考えがしだいに深くなっていくのだが、少年たちはそれと反対に、戸倉老人の口から過ぎこしかたの冒険談をきくことを、このうえもなくよろこんだ。

アフリカの猛獣狩りもうじゆうが、熱帯での鱷退治わにたいじ、サワラ砂漠の砂すな嵐らし、さてはまた、嵐に遭遇して、無人島へ吹きよせられた難なんば

破船せんの話など、戸倉老人の口から綿々として語りつがれるとき、少年たちはどんなに血を湧かせ、肉を躍おどらせたことだろう。少年たちは、いつの日にか、自分たちも、そういう冒険談の主人公になつてみたいと夢想するのだった。

ああ、戸倉老人が平和を愛し、少年たちが、冒険あこがに憧れる、そこにこそ、人生の本当のすがたがあり、世界の進歩も、それなくしては得られないのだ。

それはさておき、今日も今日とて、見舞いにきてくれた五少年をあつめて、戸倉老人が楽しそうに昔の思い出を語っているところへ、やってきたのが秋吉警部。

「やあ、相変わらず、みんなきてるな」

「ああ、警部さん、今日は」

「警部さん、今日は」

少年探偵団の同志五人が、帽子をとって、警部ににこにこ^{あいさ}挨拶をするのを、戸倉老人は眼を細めて眺めながら、

「警部さん、聞いて下さい。この子たちが毎日きてくれるので、わしはどんなに楽しみだか知れません。ちかごろではもう、すっかり子供にかえった気持ちで、いつまでも、こうして、平和に暮りたいと思うくらいです」

「ははははは、あなたも変りましたな。しかし戸倉さん、あなたが、そういうふう^{ふう}に平和を愛されるようになったのは結構だが、そのまえに、ぜひとも解決しておかねばならぬ問題がありましたよ

う」

「むろんです。あの四馬剣尺のことでしよう。わしはもちろん、最後まであいつと闘う決心じやが、警部さん、その後、あいつらの動勢どうせいについて、何か情報が入りましたか」

「はあ、若干の情報は入っています。しかし、戸倉さん、それよりまえにお聞きしたいのだが、あなたと四馬剣尺とは、いったい、どういう関係なのですか」

それをきくと戸倉老人は、しばらく眼をつむって考えていたが、やがてかつとそれを開くと、

「いや、お話ししましょう。もう、こうなつては、何もかも洗いざらい打明けて、あなたがたの御援助ごえんじよをこうよりほかにみちはな

い。まあ、聞いて下さい。こういうわけです」

と、そこで戸倉老人が打明けたのは、いつか山姫山やまひめやまの山小屋で、春木、牛丸の二少年に語ってきかせた話だが、戸倉老人はさらに言葉をついで、

「つまり、海賊王デルマから、黄金メダルの半ペラを譲ゆずられた、オクタン、ヘザールの二人の子孫しそんというのが、この戸倉と、四馬剣尺のふたりだが、この四馬剣尺というのは、まことに疑問の人物で、わしの聞いているところでは、ヘザールの子孫というのは、幼いときに病気にかかって、それきり身体が発育せず、いままでは小男になっていると、いうことを耳にした。それでも、年頃になると結婚して、娘がひとりできたということだが、まさか、その

娘が、あの横綱のような大女であるはずがない。だから、わしにはどうも、あの四馬剣尺という覆^{ふくめん}面の頭目は何者だか、さっぱり見当がつかんのじゃ」

戸倉老人の話をきいて、春木少年はキラリと眼をひからせたが、かれが口をひらくまえに、秋吉警部がからだを乗りだして、

「なるほど、なるほど、それでだいたいの事情はわかりましたが、いつか殺されたチャンフーというのは……」

「ああ、あれですか」老人はちよつと暗い顔をして、

「あれは、まったく可哀そうなことをしました。なにあれは、わしの双生児^{ふたご}でもなんでもない。海外を放浪^{ほうろうちゆう}中、わしに生きうつしなところから、何かの役に立つだろうと思って、ひろつてき

た男じゃ。四馬剣尺の眼をくりますために、わしはチャンフーと名乗って、あの万国骨董堂をひらいたが、わしはしじゅう、出歩かねばならぬからだじゃ。そこで、近所のものに怪しまれてはならぬと思つて、わしの留守中は、いつもあの男に影武者かげむしやをつとめさせていたのじゃ。それがあのようなことになつて……」

戸倉老人は眼をしばたいたが、なるほど、これで、はじめてわかつた。いつか山姫山の山小屋で、戸倉老人が断乎だんことして、チャンフーが殺されたなんて、そんなことはありえないのじゃ、といい放つた言葉の意味が、これではじめて、納得できるのである。

まことのチャンフーとは、戸倉老人自身であつたのだ。

「なるほど、それです。その事情はわかりました。それでは、

私のほうに入った情報をお話ししましょう」

秋吉警部は手帳をひらいて、

「御老人からいつか、淡路島あわじしま 一帯を捜索そうさくしてみてくれというお話があつたので、あちらの警察とも連絡をとって、虱しらみつぶしに島内から、その沿岸えんがんをしらべたのですが、すると果然かぜん、耳よりな情報が入つたのです。まず、そのひとつは、淡路島の周しゅう 囲いを、おりおり、怪しげな汽船が周遊しゅうゆうしているということ、それについて、ときどき、深夜しんや淡路島の上空に、竹トンボのような音がきこえるということ、更さらに、その竹トンボの音が常に旋回する中心をさぐってみると、そこはヘクザ館かんという、古い西洋建築があることがわかつたのです」

「それだ！」突然、戸倉老人が手を叩いて叫んだ。

「それです、それです、警部さん、問題はそのヘクザ館にあるにちがいありません。海賊王デルマが、淡路島に根拠地をおいてたということは、古い文献ぶんけんにも残っています。その当時、デルマは善ぜんりょう良せんきょうな宣教師をよそおい、島の中央に、カトリックの教会を建てたといわれています。ヘクザ館というのが、きつと、それにちがいありません。そこに、海賊王デルマの宝がかくされているのです」

戸倉老人の声は、しだいに昂奮こうふんにうわずつてくる。その昂奮が伝染したのか、少年探偵団の同志たちも手に汗握あせにぎつて、戸倉老人と秋吉警部の顔を見くらべている。

秋吉警部もにっこり笑って、

「そうです。われわれもだいたい、そういう見込で、ヘクザ館にはげんじゆう厳重かんしな監視をおいています。ところで戸倉さん、あなたの戦闘準備はどうですか。脚のぐあいがよかったら、いっしょにでかけたら、どうかと思うのですがね」

「むろん、いきます。なに、これしきの火傷ぐらい」

「警部さん！」そのとき、横から緊張した声をかけたのは、少年探偵団の探偵長、春木少年だった。

「ぼくたちもつれていって下さい。ぼくたちも四馬剣尺の正体を知りたいのです」

それを聞くと秋吉警部もびしやう微笑して、

「むろんつれていくとも、君たちこそは今度の事件でも、最大の
功労者なんだからね」

ああ、こうして、戦闘準備はなつた。兇悪きようあく 四馬剣尺を向う
にまわして、少年探偵団の働きやいかに。淡路島の上空に、いま
や、ただならぬ風雲がまきおこされようとしている。

ヘクザ館かん

淡路島あわじしまの中央部、人里ひとさとはなれた山岳地帯のおくに、ヘクザ
館という建物がある。

その昔、国内麻の葉のごとく乱れたみだ戦国の世に、スペインより

わたつてきた、一宣教師によつて建てられたという伝説以外、誰もこの、ヘクザ館の由来ゆらいを知っているものはない。

爾来じらい、幾星霜いくせいそう、風雨ふううにうたれたヘクザ館は、古色蒼然こしよくそうぜんとして、荒れ果ててはいるが、幸いさいわにして火にも焼かれず、水にもおかさねず、いまもつて淡路島の中央山岳地帯に、屹然きつぜんとしてそびえている。

いつのころか、ここはカトリックの修道院しゅうどういんになつて、道德堅固けんこな外国の僧侶そうりよたちが、女人禁制きんせいの、清い、きびしい生活を送り、朝夕、聖母マリアに対する礼拝らいはいを怠らない。

それは秋もようやくたけた十一月のおわりのこと、二人の教師に引率いんそつされた中学生五名が、このヘクザ館を見学にきた。

教師のうちの年老いたほうが、院長に面会して、館内を参観させてもらえないかと申込むと、スペイン人系の老院長はすぐ快く承諾して、若い修道僧を呼んでくれた。

「ロザリオ、このひとたちが、ヘクザ館の内部を参観したいとおっしゃる。おまえ御苦労でも、案内してあげなさい」

「は、承知しました」

長年日本に住みなれているだけあって、ヘクザ館に住む僧侶たちは、みんな日本語が上手であった。

「では、皆さん、私についておいで下さい」

「いや、どうも有難うございます」

むろん、この中学生の一行というのは、戸倉老人に秋吉警部、

それから少年探偵団の同志五人である。みんなてんでに、スケッチブックやカメラなどをたずさえているが、かれらの真の目的が、写生や撮影にあるのではなく、館内の様子偵察ようすていさつにあることはいうまでもない。

古びて、ぼろぼろに朽ち果くちはてた館内をひととおり見終ると、やがて若い僧侶ロザリオは、一行をヘクザの塔に案内した。この塔こそはヘクザ館の名物で、山岳地帯にそびえる古塔は、森林のなかに屹きつりつ立して、十里四方から望ぼうけん見みされるといふ。

「おお、なるほど、これはよい見晴みはらしですな」

塔のてっぺんにのぼったとき、老教授に扮ふんした戸倉老人は、眼下を見下ろし、思わず感嘆かんとんの呟つぶやきをもらした。

いかにもそれは、世にも見事な眺めであつた。東を見れば、大阪湾をへだてて紀伊半島が、西を見れば海峽をへだてて四国の山々、更に瀬戸内海にうかぶ島々が、手にとるように見渡せるのである。

「はい、ここはヘクザ館の内部でも、一番聖なる場所としてあります。されば、初代院長様の聖骨も、この塔のなかにおさめてあるのでございます。あれ、ごらんなさいませ。あの壇のうえにおさめてあるのが、その聖骨の壺でございます」

と、見れば円型をなした室内の正面には、大きな十字架をかいた翁があり、その翁のまえには、聖壇がつくつてあり、その聖壇のうえに黄金の壺が置いてある。そして、その黄金の壺の左

右には、これまた黄金でつくった二匹の鱈魚がくぎよが、あたかも聖骨を守るがごとく、うずくまっているのである。

戸倉老人はそれを見ると、ふと、黄金メダルの半ペラに書かれた文字を思いだした。

わが秘密を……とする者はいさ……人して仲よく……り聖骨を守る……のあとに現われ……（以下略）

もう一方の半ペラがないから、完全な意味はわからないが、聖骨を守る……という言葉があるからには、黄金メダルに書かれた文句は、この塔内の、この一室を指さしているのではあるまいか。

そうなのだ！

それにちがいないのだ。しかし、そうはわかっても、黄金メダ

ルの他の半ペラの無い悲しさは、それ以上の謎は解きようもない。それはさておき、館内の見物に手間どっているうちに、すっかり日が暮れて、雨さえポツポツ降ってきた。まえにもいったとおり、ヘクザ館は人里離れた山岳地帯にあるのだから、こうなつては、辞去することもできないのである。一行は途方にくれた面持ちをおもちしている、親切な老院長が、一晩泊つておいでなさいとすすめてくれた。そして、粗末ながらも、夜食をふるまつてくれたのである。

実をいうと、これこそ、一行の思う壺であつた。わざと参観に手間どつたのも、ここで一夜を明したいばかりであつた。

さて、一行七人、館内の二階にある、ひろい寢室へ案内される

と、すぐに額ひたいをあつめて協議をはじめた。

「問題はあの塔にあると思うのじゃがな。みんなも見たろうが、初代院長の聖骨をおさめてある壇、あの周囲がくさいと思うがどうじゃ」

「小父おじさん、そうすると、四馬剣尺もあの塔を狙っているというのですか」

「ふむ、たしかにそうだと思ふ。それでどうじやろう。今夜四馬剣尺がやってくるかどうかは疑問だが、ひとつ、あの塔を、われわれの手で調べてみようじやないか」

それに対して、誰も反対をとなえるものはなかった。

そこで修道僧たちが寝しずまるのを待って、一行七人、こつそ

り寢室を抜けだすと、やってきたのは古塔の一室。

時刻はすでに十二時を過ぎて、宵よいから降り出した雨は、ようやく本降りとなり、昼間はあれほど眺ちようぼう望ぼうの美を誇ほこった塔のてっぺんも、いまや黒暗こくあんあん々たる闇やみにつつまれている。

一行はその闇のなかを、懐中電気の光をたよりに、あの聖壇のまえまできたが、そのときである。少年探偵団のひとりの横光君があつと小さい叫びをあげた。

「ど、どうしたの、横光君……」

「あの音……ほら、ブーンブーンという竹トンボのような音……」

それを聞くと一同は、ギョツとしたように闇のなかで息をのんだが、ああ、なるほど、聞える、聞える、降りしきる雨の音にま

じって、ブーンブーンとヘリコプターの唸り声うな。しかも、その音が、またたくまにヘクザ館の上空へちかづいてきたかと思うと、やがて、さつと上から探照灯たんしょうとうの光が降ってきた。

「あつ、しまった。ヘクザ館のありかを探しているのだ」

戸倉老人が叫んだとき、ダダダダダと物もの凄すごい音を立てて、機関銃がうなりだした。ヘリコプターのうえからヘクザ館の周囲にむかって、機関銃の雨を降らせているのである。

「危い。みんな、物もの陰かげにかくれろ」

一行七人、蜘蛛くもの巣すを散らすごとく、四方の壁にちると、カーテンのうしろに身をかくした。

ダダダダダダダダダダ！

機関銃のうなりはひとしきりつづいて、ヘクザ館の周囲の森に、
弾丸が雨あめあられ霰あられと降ってくる。

だいだんえん
大団円

やがて、機関銃のうなりがピツタリやむと、ヘリコプターはヘクザ館の上空に停止したらしく、ブーンブーンといううなり声が、同じ方向から落ちてくる。

ああ、わかった。わかった、四馬剣尺しばけんじやくは今夜、空からヘクザ館を襲撃しようとするのだ。そして、そのために、誰もヘクザ館の塔へ近寄せぬよう、空から威嚇射撃いかくしゃげきをやったのだ。修道僧

たちは、おそらく、蒼あおくなつて、自分の部屋でちぢこまつていることだろう。ああ、なんという、傍ぼう若無じゃくぶじん人の悪虐あくぎやくぶ振り！

少年探偵団の同志五人、それに戸倉老人と秋吉警部が、いきをこらしてカーテンのかげにかくれていると、知るや知らずや、やがて忽然こつぜんとして、塔のなかへ入つてきたのは、木戸に仙場甲二郎それにつづいて机博士、最後が覆面の四馬剣尺。ヘリコプターが照らす探照灯たんしやうとうの光のために塔のなかは、昼よりもまだ明るいのである。一同はいま、ヘリコプターから繩梯子なわぼしごづたいにおりてきたのであろう。脚が少しフラついていた。

「やい、机博士」四馬剣尺はヨチヨチとした足どりで、聖壇のまえまで近寄ると、われがねのような声で怒鳴どなった。

「さあ、いよいよ宝の山へやってきたぞ。いまわしが手を下せば、宝はたちどころにわしの手に入るのだ。どうだ。うらやましいか。貴様もおとなしくしていれば、少しはわけまえにあずかれるのに、わしを裏切ったばかりに、宝の山へ入っても、手を空しゆうしてかえるよりほかはないのじゃ。わっはっは、わっはっは、わっはっは！」

四馬剣尺が腹をかかえて笑っているとき、ギリギリと奥歯をかみ鳴らした机博士、物^{ものすご}凄^きい形^{ぎょうそう}相^{そう}をしたかと思うと、いきなり四馬剣尺の体を背後^{はいご}からつきとばした。

と、これはどうだ。

あのいわおのような体をした覆^{ふくめん}面の頭目の体がふがいなくもフラフラよろめいたかと思うと、やがて、腰のへんからふたつに

折れて、ドシンと床にひっくりかえった。

「おのれ！」四馬剣尺は覆面のなかで叫んだが、どういふものか、モガモガ床で、もがくばかりで、なかなか起きあがることができないのだ。木戸と仙場甲二郎が呆気にとられてみると、やがて、四馬剣尺のダブダブの服のなかから、ピヨコンととびだしてきたものは、ああなんと、小男と立花カツミ先生ではないか。

カーテンの陰にかくれていた七人も驚いたが、それにも増してびっくりしたのは木戸と仙場甲二郎。まるで蛙でも踏んづけたように、ギヤツと叫んでとびあがった。

このなかにあつて、唯ひとり、腹をかかえて笑いころげているのは、悪魔あくまのような机博士だ。

「わっはっは、わっはっは、東西東西、覆面の頭目、四馬剣尺の正体とは、男のような女にかたぐるま肩車かたぐるましてもらった小男とござあい。わっはっ、わっはっはっは！ やい、その女、貴様は小男の娘だろう。そして、猫女とは貴様のことだな。貴様は親爺おやじと同じ服のなかに入って、われわれをさんざんおもちゃにしがった。やい、木戸、仙場甲二郎、相手はこんな小男と、たかが女とわかつちや何も恐れることはないんだ。こんなやつのことことを聞くより、この机先生の乾分こぶんになれ。そいつらふたりをやつつけてしまえ」

だが、このとき、机博士は、四馬剣尺の恐ろしい武器のことを忘れていたのだ。

机博士は、最後の言葉もおわらぬうちに、

「あつちちちち」と、叫んで右の眼をおさえた。見ると、太い針がぐさりと右の眼につきささっている。

「あつちちちち」

机博士はふたたび叫んで、今度は左の眼をおさえた。同じような太い銀の針が左の眼にもつつ立っている。

「あつちちちち、あつちちちち、わつ、た、助けて……」

小男のかまえた毒棒どくぼうからは、まるで一本の糸のようにつきがらつきへと毒針どくばりがとびだしてくる。机博士はみるみるうちに、
 全身ぜんしん針鼠はりねずみのようになって、床のうえに倒れ、しばらく七しちて転んぼつとう八倒していたが、やがて、ピッタリ動かなくなった。

これが悪魔のような机博士の最期さいごだったのだ。

小男はヒヒヒヒと咽喉のどの奥でわらうと、

「どうだ、木戸、仙場甲二郎、おれの腕前はわかったか。おれを裏切ろうとするものはすべてこのとおりだ。どうだわかったか」

「シュ、シュ、首領……」

木戸と仙場甲二郎は、あまりの恐ろしさにガタガタふるえながら、

「あつしは何も首領を裏切ろうなどと……」

「そうか、おれが小男とわかっててもか。ふふふ、なるほど、おれは小男だが、ここにいる娘は恐ろしいやつよ。こいつはな、暗くらや闇みでも眼が見えるのだ、そして、男より力が強く、人を殺すことなど、屁へとも思っていないのだ」

「お父さん、何をぐずぐずいつてるのよ。それより早く、鰐魚がくぎよをのけて、二つの穴に黄金メダルを入れなさいよ」

ああ、恐るべき立花カツミ。彼女は机博士が針鼠まゆのようになって死ぬのを見ても、平然として眉まゆひとつ動かさなかつたのだ。

「よし、よし、おい、木戸、仙場甲二郎、その壇だんのうえにある鰐魚を二つともかけてみる。ああ、のけたか、のけたらそこに、穴が二つあるはずだが、どうだ」

「はい、首領かしら、ございます、ございます」

「ふむ、あるか、それではな、このメダルをひとつずつ入れてみる。右の穴には右の半ペラ、左の穴には左の半ペラ……入れたか、よし、それじゃアな。おれが号令ごうれいをかけるから、それといっし

よにぐつと押ししてみるんだぞ、一イ……二イ……三！」

そのとたん、轟然ごうぜんたる音響おんきょうが、ヘクザ館の塔をつらぬい

て、暗い夜空につつ走った。カーテンのかげにかくれていた一行

七人は、一瞬いっしゆん、足下が水にうかぶ木の葉のようにゆれるのを

かんじたが、つぎの瞬間、こわごわカーテンのかげから顔をだし

てみると、こはそもいかに、木戸も仙場甲二郎も、小男も猫女も

立花カツミ先生も、さてまた、針鼠のようになって死んだ机博士

も、みんなみんな影も形もなくなっているではないか。春木少年

はちよつとの間、狐きつねにつままれたような顔をしていたが、やがて

こわごわカーテンから外へでると、

「ああ、みんなきて下さい。あれあれ、あんなところに……」

その声に、一同がバラバラとカーテンの影からとびだしてみると、聖壇せいだんのまえ方六メートルばかり、ぽつかりと床に大きな穴があいていて、そのなかを覗のぞいてみると、数十メートルのはるか下に、黒ずんだ水がはげしく渦うずをまいていた。そして、その渦にまきこまれ、小男も、立花カツミ先生も、机博士も、木戸、仙場甲二郎も、みるみるうちに水底ふかく沈んでいったのである。

「おとし穴ですね」

「ふむ、おとし穴だ」秋吉警部は顔の汗をぬぐいながら、

「しかし、どうしてあんなことになったのでしょうか。黄金メダルに書いてあることは、それでは、ひとをおとし入れるための、嘘うそだったのでしょうか」

戸倉老人はそれには答えず、聖壇の左の穴にはめこまれた黄金メダルの半ペラを取りだして、裏面りめんに彫ほられた文字を讀んでいたが、やがてにつこり笑うと、

「わかりました、かれらはこの贗物にせものの半ペラにかかれた文句にだまされたのです。わしの持っている本物にはね、二つの半ペラを穴のなかに入れると、それより（壁際かべがわに身を避けさ）ふたつのメダルを、（長き竿さおにて押すべし）と、なっているのです。ところがこの贗物では、それよりただちにふたつのメダルを（強く押すべし）となっています。そのために、海賊王かいぞくおうデルマが万一の場合の用意につくっておいた、罾わなのなかにおちたのです」

ああ、それというのも自業自得じごうじとくだったろう。

それはさておき、一同がおとし穴に氣をとられているとき、キヨロキヨロとあたりを見廻みまわしていた牛丸平太郎が、突然とつぜん、

「あつ」と、素すつ頓とんきよう 狂きやうな声をあげた。

「あれを見い、みんな、あれを見い、えらい宝や、宝の山が吹きこぼれてるがな」

その声に、弾はじかれたようにふりかえった一同の眼にうつつたのは、十字架のかかった翁きゆううが真二つにわれて、そこからザクザクと聖壇のうえに吹きこぼれてくる、古代金貨に宝ほうぎよく 玉たまの類……ヘクザ館の塔なる聖壇のうえには、みるみるうちに七色の宝の山がきずかれていったのである。……

四馬劍尺を頭目とする、悪人一味はすべて滅んだ。唯一人、ヘリコプターに乗った波立二のみは、その後、杳ようとして消息がわからなかったが、首領を失ったかれに何ができよう。その後、紀伊半島の沖おきあい合に、ヘリコプターの破片らしいものがうかんでいるのを見たものがあるというが、あるいはそれが、波立二の最後を物語っているのではあるまいか。

ヘクザ館から発見された宝石や古代金貨うわさの噂は、たちまち全世界に喧けん伝でんされた。それはいまの金に換かん算さんすると、零れいという字を、いくつつつけてよいかわからぬほど、莫ばく大だいなものになろうという。

それらの財宝は、すべて、日本の教育復興のために使用される

ことになり、戸倉老人や少年探偵団、さてはまた、秋吉警部たちは、それから一銭の利益りえきも得るうことはなかつた。

それにもかかわらず、いや、それだからこそ、戸倉老人も、少年探偵団の同志たちも幸福ふくだつた。

戸倉老人はその後、海岸かいがんどお通りの店を売りはらつて、思いでの淡路島あわじしまを眼のまえに見る、明石あかしの丘に一軒の家を建てた。そして、いまでは草花を作りながら、静かに余生を送っている。その戸倉老人の何よりの楽しみは、土曜から日曜へかけて、泊りがけで遊びにくる、少年探偵団の同志たちに、御馳走ごちそうをすることであるという。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第13巻 少年探偵長」三一書房

1992（平成4）年2月29日第1版第1刷発行

入力…tatsuki

校正：小林繁雄

2002年1月12日公開

2006年7月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

少年探偵長

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>